
キセキの錬金術師 In リリカルなのは

ruin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキの錬金術師 In リリカルなのは

【Nコード】

N9803R

【作者名】

ruin

【あらすじ】

作者が書いていた、キセキの錬金術師の主人公相沢祐依がとある、魔法の失敗で、魔法少女リリカルなのはとよく似た世界へ飛ばされます。主人公は原作？を知らずに色々やっています。作中には作者の独自解釈が多数含まれます。

0 話

今日は、お休みだから、以前から考えていた新しい術式を使った、儀式魔法を試すことにした。

「えーと、ここが、こうなって、あれがあーなって…」

新しい術式を組むこと、数時間。

「よし！できた！」

いざ、実験に入ろうとしたその時に、

・ガチャ

扉が開かれ、

「祐依くいる？」

「な、名雪？」

名雪に声をかけられ、一瞬集中力が切れその途端、術式に流し込む魔力が乱れ、暴走する。

私はとっさに、名雪を部屋の外へ突き飛ばす。

その瞬間、魔法陣が光を放ち、私は気を失った。

0 話（後書き）

色々あると思いますが、広い心でお許しください。

人物設定

人物紹介

名前 相沢 祐依

読み あいざわ ゆえ

性別 女性

年齢 不明

作者の前作、キセキの錬金術師の主人公。

詳細は、キセキの錬金術師の16話あたりまでと人物紹介をご覧ください。

能力

・リンク - 契約をしたモノと念話や術技、能力の共有、召喚など色々なことが出来る。

・契約者・F a t e / S t a y n i g h t シリーズのサーヴァントの皆さん

・東方Projectの幻想郷の皆さん

・精霊や神様、悪魔、妖怪、幻想種、その他多数

・錬金術 - 錬成陣なしで、錬成を行うことが出来る。

・先生が残した賢者の石や加護があるため。

容姿

髪 黒でポニーテール（シングルポニー）で、肩甲骨ぐらいまで伸ばしている。

瞳 黒。 場合によっては、変化する。

装身具 眼鏡、ペンダント

・ペンダント 満月を模している。（色は黒）

祐依の持つオリジナルは賢者の石をもとに作られていて、色々な強力なチカラを有している。

祐依の仲間も、同じ形のペンダントを持っている。

複製した賢者の石もどきで作ったもののため、オリジナルには及ばない。

けれど、はたから見れば、異常な物。

黒き月の由来にもなっている。

現在判明しているもの

・精霊の加護

・いろんなモノの加護

・リンクしているものを召喚

共通

・隠蔽

・意思の疎通

・結界を張る

- - - - -

なのはの世界の、戦闘などは

偽名 ノア・ミナツキ

団体名 黒き月

服装 黒い外套にTOAのシンクの仮面をつけている。

デバイス・ゼロ

インテリジェントデバイス

第一形体は扇子

基本は補助の魔法を使用

武器 大抵のものは使える。

錬金術で錬成、もしくは、倉庫から取り出す。もしくは、能力。

前作からの追加

・半不老不死 - 神や悪魔、妖怪などと契約しているため、輪廻の輪から外れ、死なないことはないが、簡単には死なない。
皆さんに、教えてもらって、肉体の操作ができる。

- 例 年齢、体型の操作

人物設定（後書き）

あくまで、なのはとよく似た世界なので、原作と違う場面が多々あります。

1話（前書き）

原作まで、少しあります。

さっそく、無茶な話です。

4月3日 - 本文改訂 - ルインの面前

1話

side 祐依

「うゝん」

目を覚ますと、知らない部屋にいた。

「病院かしら？」

だが、病院にしては、機材などがない。

「お目覚めですか」

「誰！」

私は、開いていた扉から入ってきた十代後半の黒髪の女性に警戒し、いつでも攻撃できるようにする。

「私はこの街の管理人…かしら？」

そう言つて、首をかしげる。

「どういうこと？」

「えゝ、私はプログラマーであつて、人ではありません。それに、本当の私はここにはありません」

「プログラムってことは、ここは、電脳空間なのかしら？それと、

本当の私はここにはないってどういう意味？」

「いえ、ここは、現実世界ですよ。忘れられし都、アルハザード、
がこの街の名前です。私は、プログラムによって作られた擬似生命
体です。本当の私と言うのは、とあるロストログアのプログラムの
一つでした。それが、私は取り除かれました。そして、私は破棄さ
れ、電腦空間を彷徨っていました。このアルハザードのメインコ
ンピュータに拾われ、こうして、街の管理をしています。本当の私
と言うのは、そのロストログアだったものですから」

「えーと、ちょっと待ってくれる？整理するから…」

「質問を続けるわね。ここが、忘れられし都ってことは、もう誰も
知っている人はいないのかしら？」

「はい、かつてこの街で生活していた人々は禁忌を犯し、神の域を
荒らした。と、そして、その罰でこの人々は皆消え、街は別次元
に飛ばされたそうです」

「別次元ってことは、帰る術がない？」

「いえ、この街の座標が分かれば、転移ができますよ」

「転移？座標？」

「はい、私たちが使う魔法で、デバイスを用いて行います」

「デバイスとは？」

「魔導師や騎士が共通して持つ杖のことをデバイスって言うんです。その役割は、魔法のプログラムをすることで、魔導師の魔法の行使をしたり、補助をするんです。」

魔法を制御するための演算をしてくれたり、直接的な武器となったりと色々あるんです」

「話を聞く限りじゃ、此処の魔法は、科学の延長みたいなものね」

「そうですね。ところで、' 此処の ' と、言うことは…」

「あ、私の名前は相沢祐依です」

「祐依さんの使う魔法とは違うんですか？」

「はい。私たちの使うものとは、まったく違いますね。機械ではなく、精霊の力を借りて魔法を行使しますし、魔法を使うものを魔術師といいますから。それに、こんなに違うことが多いから、おそらく、私は別の世界に来たんじゃないかしら？」

「でしょうね。祐依さんはデバイスを持っていませんし、突然、現れましたから」

「あ、それは、助けくれてありがとう。他にも質問があるんだけどいいかしら？」

「構いません。私もこうして、人と話すのは何百年もありませんでしたから」

「じゃあ、遠慮なく。初めの方に出てきたロストロギアって何かし

ら？」

「過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。多くは現存技術では到達出来ない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物ですね」

「結構危険ですね。でも、似たような物なら、私たちがたくさん持つてますよ」

「私、たち、？それにたくさん！？」

「ええ、私の仲間が特に。少しですけど呼びましょうか？」

「いえ、今日は色々と話しているので、このまま話にしましょう。また後日でもいいですか？」

「そうね。あとは、デバイスの説明をお願いしてもいいかしら？」

「ええ、デバイスはその用途によって専攻があり、一分野に特化した機種が幾つか存在しているわ。‘インテリジェントデバイス’、‘ストレージデバイス’、‘アームドデバイス’、‘ユニゾンデバイス’の計四種類。それぞれの特徴を簡単にまとめるところになります・・・」

その後、数時間デバイスやこの世界の魔法、この世界についての講義が続いた。

（まとめるのが、大変で、途中で心が折れました。by作者）

「じゃあ、私もデバイスがあれば、この世界の魔法が使えるのかしら？」

「いえ、この世界では、リンカーコアと呼ばれる、魔道師が持つ魔力の源で、大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積することと体内の魔力を外部に放出するのに必要な機関で、魔力資質にも影響するものが必要なんです」

「私にはないの？」

「それは、検査をしないとわかりません。検査をしますか？」

「いいの？ ぜひ、お願いします」

「じゃあ、ついてきてください」

検査をする場所に来て、検査を行う。

「どうでした？」

「それが、リンカーコアどころか、何も反応がありませんでした」

「……え？」

沈黙が続いた。

「グウ」

その沈黙を破ったのは、おなかの音だった。

「…何か、食べるものありませんか？」

「こちらに来てください」

案内され、食事にありつくことができた。

「食べてから聞くんだけど、これって何時の食材？人がいなくなつてから、相当経つんだよね」

「それは、今朝採れた物ですよ。ここは、半永久に食糧を生産しますから」

「それならよかった。あ！」

「どうしましたか？」

「さっきの反応なしの理由が分かった！これつけっぱなしだったから」

そついつて、黒き月のペンダントを見せる。

「これは、一体？」

「身に着けている人の情報がわからないようになってるの。たぶん、これが、検査の妨害をしたんだと思うの。あとで、もう一回検査してもらってもいい？」

「構いませんが、その後で、そちらを見せてもらっても？」

「いいよ。てか、これとほぼ同じものをあげるわ。私の仲間の証なんだけど、ここまでしてくれたから」

「私も、仲間に？」

「嫌だった？」

「いえ、ありがとうございます。私は以前は、防衛プログラムという名前で、現在は管理人。名前がありませんので、名前をつけてもらえますか？」

「うーん、ルイン、ルインフォース。意味は破壊の風、でどう？今までの不条理なんて、ぶっ壊しちゃえ」

「認証しました。よろしくおねがいします」

「こちらこそよろしく。じゃあ、再検査やろうか」

「はい。わかりました」

検査の結果、

「祐依さんにリンカーコアはありましたよ。ランクは測定不能ですね。それに、体内にそれとは異なる物が…」

「あゝ、たぶんそれって、体中に神経のようになかった？」

「はい、確かにそのようになっていましたが？」

「それは、魔術回路っていう、私の世界の中でも特殊だけど、ちゃんとわかってるから。あと、ランクが不明って？」

「それは、上限を超えている上に、ペンダントなどからの補助で絶えず変化しているので、正確にはわからないんです。けれど、大抵の魔導師には負けないほどですよ」

「あゝ、むこうの世界でも魔力は多い方だったから。で、私にもデバイスって、使える？」

「ええ、使えますが、祐依さんほどですと、普通のデバイスだと、デバイスの方が持ちません」

「じゃあ、やっぱり使えないの？」

「いえ、ここには、遙か昔の技術から、そして現在までの技術もハッキングして、全てあります。作るための施設もあります。材料も先人たちが残した最高級の物から、一般的な物までありますが…」

「今なにか、変なワードがあつた気がするけど…何かあるの？」

「今のデバイスに使われている材料が無いんですよ。かなり昔に人がいた頃の物なので、原材料さえあれば、作ることが出来るんですけど。昔型のものなら、すぐに製作に移れるんですが…私はこのアルハザード内しか行動できないんです」

「それって、何？ 私、色々持つてるけど、その中に似たような物があるかも知れないし、いざとなったら、私たちがそれを探しに行くわよ」

「そうですね… ちょっと待ってください」

そう言つて、機械を操作しリストをだす。

「こちらになるんですが…」

「ちょっと見せてね…え」と、これは？

「あ、それは……………」

その後、数時間かけて、リストの物を埋めていく。

「結局、全部そろったね」

「ええ、祐依さんは何でこんな物を持っているんですか？」

「私は錬金術師をやってて、いろんな儀式とか物を作るのに色々必要だったから、集めていたらこんななっちゃったのよ」

「そうなんですか……」

1話（後書き）

次回に祐依のデバイスが完成するかも・・・

2 話（前書き）

デバイスを作ります。

2話

side 祐依

数日後、講座が終わり、

「で、どういうデバイスを作るの？」

「祐依さんは、普段どのような武器を使いますか？」

「うーん、剣、刀、槍、弓、銃…なんでも使うな…」

「そうですか。なにか、希望がありますか？」

「デバイスの形ってどうとでもなる？」

「大抵の形にはできますが…」

「じゃあ、扇子の形にできる？」

「ええ、出来ますが、それでよろしいのですか？」

「特別性の扇子なら、相手の獲物によるけど、十分戦えるし、他の武器を持つてる時とかには腰に差しておけば邪魔にならないし。日常で持っていて不思議じゃないし、バリアジャケットを装着せずに、起動しても、怪しまれないでしょ？それに、魔法の補助と、私の魔法を非殺傷に弄るためなんだから」

「では、そちらをどういったタイプにしますか？」

「うーん、インテリジェントデバイスにできる?」

「ですが、形状的にベルカ式のカートリッジシステムは搭載できませんから、ミッドチルダ式になりますが…」

「それなんだけど、今カートリッジある?」

「はい、こちらに」

「ちょっと、実験してもいい?」

「?構いませんが」

そう言つて、研究室を出て実験室に移る。

「何をなさるんですか?」

「錬金術をつかつて、カートリッジの小型化を…」

「パチン！」

「一応できたけど、これって使える?」

「ちょっと、調べさせてください…」

数分後

「さすがですね。完璧です。これなら、十分に使えます。と言うより、小型化しておきながら、今までのと同じ効果って、もうふざけてますね」

「でも、私のこの黒き月のペンダントの方がもっと、複雑で難解な物よ。これに比べたら、カートリッジぐらい簡単よ」

「そうなんですか…ということは、まだカートリッジシステムを改良できますか？」

「時間があればできると思うわよ。とりあえず、私のデバイスを作ってから、改良していこう！」

「そうですね。とりあえず、現在は、形状は扇子。術式はミッドベール力混合式。インテリジェントデバイスですね」

「あとは何が必要？」

「そうですね、待機状態の形状と、祐依さんのおかげで、起動状態の材質の硬度の向上ができましたから、外観と名前ぐらいですかね」

「そうね、名前はゼロ、待機状態の形状は、ブレスレットで、起動状態の外見は、骨の部分は漆黒で、柄は……後で描ける？」

「大丈夫です。では、さっそく、作りますけど、参加します?」

「もちろん! 私が知らないものが実際に見られるチャンスなんだから」

なんか、マッドになってきたわね私……

「では、こちらへ」

ルインについて研究室に入り、製作に入る。

今後の為に、説明を受けながら作っていく。

「ここをこうして、これで完成です」

「ふーん、私たちとは技術とか殆ど違うわね」

「ですが、もう殆ど理解してしまいましたよね」

「そう? まあ、それは置いといて、起動してみよう」

さっきの実験場に戻る。

「じゃあ、始めましょうか」

『起動を確認　マスターの名前の登録を』

「相沢祐依よ」

『マスター相沢祐依、登録完了。デバイスの名前を』

「あなたの名前はゼロよ」

『ゼロ、登録完了。術式を』

「ミッドチルダ、ベルカ混合式」

『ミッドベルカ混合式、登録完了。バリアジャケットの設定を行います。セットアップしてください』

「ゼロ・セットアップ」

『バリアジャケットを設定します』

私は、あちらの世界で使っていた、黒い外套と仮面を思い浮かべる。

『設定完了。これからよろしくお願いします。マスター』

そう言って、私の姿が変わる。

黒い外套を纏い、仮面をつけていて、黒き月のペンダントがあり、腰にはゼロが差してあった。

「よろしくね。ゼロ」

「上手くいったようですね」

「ルイン、そうみたいね。じゃあ、訓練を試みたいから、訓練室に行くわよ」

「はい」

そう言って、ルインと共に訓練室に向かい、訓練を行った。

その後、ルインやゼロと訓練や実験を行い、数か月が過ぎた・・・

2 話（後書き）

次回に原作に少しでも関われたらいいなと思います。

思いうことがあったら、ぜひ教えてください。

3 話（前書き）

原作に関わることが出来ました。

3話

side 祐依

この世界に来てから、早数か月。

「日本食が食べたーい!!!」

「祐依、突然どうしました？」

最近になって、ルインが私を呼び捨てにさせることに成功した。
プログラムだけど、遥かに年上だし。

「いや、私、前の世界では、地球っていう惑星の日本っていう島国に住んでただけど、日本食が食べたくなったの」

「ちょっと、待ってください」

「？」

数分後

「祐依、この世界にも地球の日本が存在しますよ。第97管理外世界」

「その管理っていつてるのって、時空管理局だっけ？」

「はい」

「ふざけてんのかしら？」

「それは、一体？」

「管理局が勝手に正義を謳ってるけど、やってることが無茶苦茶じゃない。それに、ルインを改悪したのって、管理局でしょ？」

「ええ、そうです」

「ま、いいわ。管理外なら、関係ないわ。ちょっと、行ってきた、食材を買って来るわ」

「わかりました。地球の座標は……です」

「ありがと。じゃあ、ゼロ行くわよ」

『了解』

そうして、異世界の地球へと降り立った。

「魔法がないけど、あんまり、文化は変わりないわね。さて、さっさと買いに行きますか」

そうして、食材などを買った後、一旦アルハザードに戻り、再び地

球に戻り、マンションの一室を買い、ネットでハッキングし、住民票などを偽造する。

因みにお金は同じでした。

その後、近くを散策していると、公園で少女が泣いていた。

因みに私は今十代前半の肉体年齢です。

マンションを買った時はさすがに大人の姿だったけど、商店街で買い物をするときはこっちの方が都合がいいからです。

もといた世界の知り合いの少女に姿が被り、近くによって、しゃがみこんで声をかける。

「さっきから泣いてるけど、どうしたの？」

「あのね、おとうさんがけがをしちゃって、おかあさんもおねえちゃんもいそがしいの。だから、なのはひとりなの」

「そうなんだあ、じゃあ、お姉さんと少し遊ぶ？」

「うん！けど、どうして？」

「それは、なのはちゃんが、私の遠いところにいる子に似てたからかな」

「そうなの？じゃあ、あそぶの！」

その後、夕方になるまで、なのはちゃんと遊びました。

「なのはちゃんの家はこっち?」

「そうなの」

今、送っています。

「ここの!」

見てみると、

翠屋と書いてある喫茶店があつた。

「なのはちゃんの家は喫茶店なの?」

「そうなの。いっしょにいくの。ただいまー」

手を引っ張られ、店内に引き込まれる。

「いらっしゃいって、おかえり、なのは」

「ただいまなの」

「えっと、こんにちわ」

なのはちゃんに連れられ、店内に入ると、一人の女性がいた。挨拶をしていたので、ご家族と判断し、挨拶をする。

「あら、いらつしゃいませ。えっと、なのはのお友達ですか？」

「そうなの！きょうしりあつたの！」

「はい、今日公園で泣いていたのを見つけて、私の遠いところにいる知り合いの子に似ていて、声をかけて、そこから、今まで遊んでいまして、暗くなってきたので送ってきたんです。あ、私の名前は相沢祐依と申します」

「それは、ありがとうございます。それと、ごめんなさいね。私は高町桃子。なのはの母です」

「なのはは、なのはなの」

「え？お姉さんではなく？」

「ええ、母親ですよ」

「若く見えますね。てっきり、お姉さんかと…」

「あら、ありがとうございます」

「そういえば、なのはちゃんのお父さんが怪我で入院しているそうですね」

「ええ…」

表情を暗くする桃子さん

「それで、明日になのはちゃんのお父さんのお見舞いに連れて行って欲しいと頼まれまして、病院と部屋を教えてもらえますか？」

「それは、構いませんが、本当によろしいんですか？」

「はい、なのはちゃんに笑ってほしいですから。どうも、あの子と被っちゃって」

「では、お願いしますね。場所は……です」

「わかりました。じゃあ、なのはちゃん、明日の一時くらいに迎えに来るからね」

しやがみこんで、なのはちゃんに話しかける。

「わかったの。おねがいなの」

「ふふ、じゃあ、また明日ね。そろそろ、失礼しますね」

「ええ、明日お願いしますね」

「また明日なの」

そうして、翠屋を出て、アルハザードに帰り、日本食を堪能した。

翌日。

「こんにちは」

「いらっしゃいませ。あ、祐依さん。なのは、祐依さん来たわよ」

「はい」

返事が聞こえる。

「では、桃子さん、ちょっと行ってきますね」

「すみませんね、私たちはお店が忙しくて」

「構いませんよ。頑張ってくださいね」

「おまたせなの」

「じゃあ、行こうか」

「うんなの」

なのはちゃんと病院に行き、お見舞いをする。

なのはちゃんのお父さん土郎さんは、眠ったままだった。

「うっん、これなら」

容体を診て、あることを判断する。

「なのはちゃん、これなら、私の魔法で治せるわ」

「なおるの?!」

「だから、ちょっと、部屋の外で待ってもらえる?」

「…わかったの」

なのはちゃんが部屋を出ていき、土郎さんと二人きりになる。

『マスター、いいのですか?魔法を使っても』

「構わないわ。なのはちゃん達には悪いけど、私が関わった記憶を消させてもらうわ。それよりも、笑顔でいて欲しいから」

『それは、マスターがいたという世界の子に似ているからですか』

「そうよ、いくわよ」

結界を念のために張る。

「<彼の者を死の淵より呼び戻せ レイズデッド>」

治療魔術を行使し、土郎さんの体を治していく。

「う、うん。ここは?」

「お目覚めですか?」

「君は一体？」

「なのはちゃんの友人だった者ですよ」

「だった？」

「これは、偶然起きた奇跡です。そして、サヨナラ」

忘却の魔法で、私と会っていたという記憶を消す。

なのはちゃんを呼び、明日まで、眠ればよくなると言い、翠屋に送り、なのはちゃんと桃子さんに忘却の魔法で、私に関する記憶をなかったことにする。

『これで、よかったですか？マスター』

「ええ、記憶を操作するのは心が痛むけど、この地球には魔法が存在しないから、私との記憶はあつてはダメなのよ。これは、偶然起きた奇跡なのよ」

私は顔を俯かせながら、ゼロと話す。

「戻るわよ、ゼロ」

『…了解』

ゼロの転移でアルハザードに帰る。

数年後、あの町で、
なのはとあんな場面で再会するとは、
思っても
みなかった・・・

3 話（後書き）

祐依は、地球に魔法の文化がないので、魔法に関わった記憶を消しました。

高町家を笑いものにさせないために、奇跡にするために。

感想など、募集中

4話（前書き）

無印編いきます！

4話

side 祐依

高町家の私の記憶をなかったことにしてから、数年が過ぎた。

その間に、ゼロの改造や自称正義の管理局について調べたり、大人の姿になってただのお客として翠屋に行ったり、いろいろとあった。

高町家では、士郎さんが復活し、なのはも会った頃よりも元気になっていた。

私は今、地球にある、隠れ家？の一つマンションにいます。

「あゝ、なんか面白いことないかしら？」

『マスター、でしたらこの街に降ってきたという魔力を含んだ物を探してみたらどうでしょうか』

「え？そんなのがあったの？」

『はい、私たちがアルハザードにいた時に落ちたそうで、私はアルハザードのコンピュータにその情報をもらいました』

「よし、行くわよ。ゼロ」

『了解。ですが、それらは、現在待機状態で魔力も殆ど感じられませんが。』

「ふーん、チカラを使えば簡単そうだけど、それじゃつまらないから、コツコツやるわよ」

その後、私は街を当てどもなくふらついていた。

その際に今回のターゲットのわかる限りの端的な情報を教えてもらっていた。

「うーんやっぱり、見つからないわねえ」

『大きさも小さいですから。発動すれば、魔力が発せられるのでわかりやすいと思いますが』

「そうね、今日はあのマンションで街を観察してみますか」

夜に街のある場所で突然魔力の反応が起きた。

『マスター！』

「わかってるわ、座標は？」

『大丈夫です。何時でもいけます』

「先に、ゼロ・セツアップ」

『了解』

素顔を見られないようにバリアジャケットを身に着ける。
因みに体格は十代前半ぐらいです。

場所に行くと、動物病院でそこには、思念体のようなバケモノとな
にか動物と話しているなのは姿があった。

なので私は木陰に隠れた。

「えーと、ゼロこれは一体？」

『とりあえず、マスターの探し物はあちらのバケモノです。なのは
嬢はどうしてここにいるのかはわかりませんが』

「とりあえず、どうしようか？」

『なのは嬢たちが何かをするようです！』

.....

「うわゝ、なのは、変身しちゃったよ。なのはもえゝと、魔導師だったの？」

『いえ、資質はありましたが、あの動物がデバイスを渡したので、おそらく、たった今魔導師になったのでしょう』

「えゝ、なりたてで、この魔力って...」

『マスターの方が量・質、共にいいですよ』

「そりゃ、私は長年、魔導師じゃないけどやってきたんだし、初心者に負けたくないけど...っておい！」

なのはは、変身して驚いたのか、呆然としていた。
そこをバケモノが襲ってきた。

なのはのデバイスが自動でプロテクションを張り、攻撃を防いだ。

「しょうがない、手伝いますか」

そう言つて、ゼロを腰に差し、p a i nを錬成し、狙撃銃に変え、
実弾は使わず魔力を込める。

- パシユッ！

音は出さないようにもできるが、なんとなく、昔のような感覚が欲しかったので、サイレンサーをつけて、音を殺したような音を出した。

・ダアン

バケモノに命中し、こちらに注意が向く。

その隙になのはは離れ、動物と会話している。
話を聞く限り、封印をするようだ。

その封印を知るために、なのはを泳がせる。

私は移動をしながら、狙撃を繰り返し時間を稼ぐ。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは、忌まわしき器、ジュエルシード!」

動物が引継、詠唱?をする

「ジュエルシード、封印!」

なのはのデバイスから光の帯のようなものが大量に伸び、バケモノを絡め捕る。

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印」

するとバケモノは青い石に変わった。

「これが…ジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのはが近づいていき、レイジングハートをジュエルシードのほう

へ突き出す。

そうしてジュエルシードがレイジングハートに取り込まれる。

「これで、お終いか…」

「あの、ありがとうございます。助けてくださって」
しゃべる動物が話しかけてきた。

今更だが、この地球にはしゃべる動物はいないから、捕まえて売れば高くなるんじゃないだろうか…
と、そんなことを考えていると、

・ウウウウー

パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「とりあえず、場所を変えるましょうか」

「え？うん」

「はい」

一人と一匹はうなずき、ちょっと離れた公園に移動する。

「で、さっきのバケモノは何だったの？」

動物に尋ねる。

「あれは、・・・・・・・・なんです」

そうして、ジュエルシードと動物についての話を聞いていると、

「えっと、あなたは一体？」

「ああ、私は、ノア・ミナヅキよ」

「ユーノ・スクライアです」

「高町なのはです」

自己紹介をする。

「それで、あなたは一体何者なんですか？」

「私としては、あなたたちの方こそ、何者って感じなんだけど……」

魔導師の方は知っているが、あえて、知らないフリをする。

「それは・・・・・・・・なんです」

説明を聞く。

「そう。私は魔術師よ」

「魔術師ですか？魔導師じゃなく？」

「ええ、さつき、なのはが使っていた魔法とは全く別なものを使うし、誰にも知られないように我々魔術師は細々とやっているから。なのはが知らなくても、ましてユーノあなたが知らないのは無理もないわ」

「そうだったんですか」

「ええ、そろそろお話はお終いにしましょうか」

一方的に話を終わらせて、この場を去る。

部屋に戻り、

「ゼロ、さっきのレイジングハートが使っていた封印ってできる？」

『結論を言えば出来ます。あれとは、多少違いますが』

「そう、なら私たちもあれを手に入れることが出来るのね」

『それはできますが、なのは嬢と敵対してもよろしいのですか？』

「昨日の友は今日の仇って言うじゃない。それに、最高の暇つぶしが出来たじゃない。おまけもついてくる」

『マスターがそうおっしゃるなら、私はマスターの命に従います』

「
ありがとね。
ゼロ」

4話（後書き）

祐依の今後のスタンスは助けるかもしれないが、協力、横取りはしないような感じですかねえ。

感想など、お待ちしております。

5 話（前書き）

短いですが…

5話

side 祐依

翌日

「さて、この街に落ちているはずなんだよね？」

『はい、そう情報にありますか』

「じゃ、レッツゴー」

買い物ついでに散策をする。

荷物は、‘倉庫’（ギルさんと紫さんの協力のもと作りましただ）に入れ、ジュエルシードの搜索を続ける。

『マスター！』

「ええ、わかってるわ」

神社の方で反応が出た。

神社の方へ急行すると、犬のようなバケモノが女性を襲おうとしていた。

「ゼロ・セットアップ」

『了解』

近かったため、遮音の結界をまず張る。

そして、misfortuneとhappinessを錬成し、二丁拳銃でバケモノをけん制し、女性から引き離す。

「なのは！」

なのはとユーノが来たようだ。

「ちっ、なのは！足止めは私がする。さっさと封印をしなさい！」

女性を庇いながら戦い、初めての封印は困難と判断し、なのはに封印を任せる。

「わかったの。ええと、どうするんだっけ？」

「昨日のパスワードを！」

「あんな長い憶えてないよ」

頼まれておきながら、漫才をしている光景を見て、私は一瞬気が抜ける。

バケモノがなのはを見つけ、そっちに向かう。

「きゃっ！」

レイジングハートがパスワードなしに起動し、なのはを守る。

プロテクションに弾かれたバケモノの四肢を撃ち抜き、動きを鈍らせる。

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル16。封印」

動きが鈍ったところを、なのはが封印する。

「これで、終わりね」

そうして、去ろうとすると、

「待つて」

なのはに声をかけられる。

「なにかしら」

「どうして、ノアさんは手伝ってくれたの？」

「結果がそうだっただけよ。私みたいな魔術師は何も知らない人を魔法関係で巻き込みたくないからよ。前回は、偶然。今回はあの女性を守るため。それだけよ」

嘘の情報を流す。

「あの、ジュエルシードを集めるのを手伝ってくれませんか？」

「ごめんなさいね。私にもやることがあるから」

そう言って、別れる。

『マスター、あれでいいんですか？』

「いいのよ、私、利用されるのが嫌いだから。それに、二回も封印を見たから、今度は完璧に出来るわ」

『なのは嬢にそのような意は無いと思いますが』

「あの子が魔法に関わってるのは、切っ掛けは偶然でも、その後はあの子の意思だから。彼女はもう一般人じゃないわ。一人の魔導師よ」

『そうですか…わかりました』

5話（後書き）

祐依は正義の味方ではなく、ダークヒーローっぽいです…

自分の意思で、行動します。

感想やご意見、随時お待ちしております。

6話（前書き）

ジュエルシード集めをちょっと一休み

6話

side 祐依

以前に大人になるのを忘れ、子供の姿のまま、翠屋に行ってしまったが、記憶の操作と黒き月のペンダントのおかげで、バレずにすみ、そこから、子供の姿で常連になっている。

今では、たまにアーチャーと行き、料理の研究をしたりしている。

「なんでさ…」

今、私は道場で美由希さんと向かい合っている。

どうしてこうなったのか…

〓回想〓

ある日、私は士郎さんと料理の話をしていた時に、なのはがお手伝いをしていたのだが、転んで運んでいたお冷を私に向かって飛ばしてしまった。

それを士郎さんと会話しながら、特に見ずキャッチしてしまい、それを、その場で見ていた士郎さんをごまかせるはずもなく、何かやっているのかと聞かれ、はい、と答えてしまい、休日、道場に呼ば

れ、同じ女性の美由希さんと試合をすることになってしまった。

「さて、いいかしら？」

「ダメと言って、どうにかなりますか？」

「あっちが無理ね」

そう言って、士郎さんと恭弥さんを見る。

「ですよねえ」

二人は興味津々にこちらを見ている。

私は木刀を構えながら、誰にも聞こえないほどの小さな声で呟く。

「？リンク・セイバー・小野塚小町・ロード？」

セイバーの剣技とスキル・小野塚小町の「距離を操る程度」の能力、を共有する。

「どうぞ」

士郎さんが前に出てくる。

「では、はじめー！」

「は！」

美由希さんが打ちこんでくるが、

セイバーの未来予知とも呼べそうな鍛え抜かれた第六感の‘直感’で攻撃を避ける。
避けきれない攻撃は、‘距離を操る程度’の能力で距離を弄り間合いを外し、躲す。

「ふっ！」

一瞬の‘魔力放出’で一撃の威力を高め、美由希さんの木刀を弾き飛ばす。

「あっ」

「そこまで！」

「ありがとうございます」

「いや、祐依ちゃん強いね」

「たまたまですよ」

「いや、美由希の攻撃を見切っていたんだから。相当なものだよ。どうだ、恭也とも試合を試合をしてみるか？」

「はい、恭也さん、お願いできますか？」

「いいぞ」

今度は、恭也さんと試合になった。
こうなったら、とことんやってみよう。

「では、はじめ！」

「はあ！」

恭也さんが開始と同時に切りかかってくる。

「くう」

想像以上に速く、木刀で受ける。

体格差で力負けるが、無理やり間合いを空ける。

「はあはあ」

体の魔術回路に魔力を流し込み体中を強化する。

‘距離を操る程度の能力’で不自然にならない程度の距離を操り。
一気に距離を詰め突きを放つ。

「ぐ」

防がれるが、構わず追撃する。

「はあ！」

力で押し切られ、少し隙が出来てしまった。

その一瞬で恭也さんが消えた。

直感が警笛を鳴らし、私は前方に飛び込むように避けた。

私がいた所に数瞬後、攻撃が行われたのが気配で分かった。

咄嗟に飛び込み、縛りがあるため、対処できず、大きな隙ができ、木刀を突き付けられ

「そこまで！」

敗れた。

「「ありがとうございます」」

「恭也さん！最後の消えたのって一体なんだったんですか？」

「…父さん」

「うむ、あれは私たちの流派、小太刀二刀御神流の神速という、歩法の奥義だよ」

「そうなんですか？全然わかりませんでした！！」

「え？じゃあ、さっきのはどうやって避けたんだい？」

「何と言いますか、直感ですかねえ？消えたと思った瞬間にここい
ては不味いと思って、前方に飛び込んだら、避けられましたが、そ
の後がダメでしたね」

「直感であれを躲されたらかなわないなあ」

「そう言えば、祐依ちゃんの流派って何？」

「あゝ、流派はわかりませんねえ。今までに色々な人に鍛えてもら
ったんですが、特に師匠たちの流派は聞かされませんでしたので。
自分を超えたら、名前を教えてやると言って別れたので、流派どこ
るか、師匠たちの本名も知らないんです」

「そう言えば、知らないなと思いテキトーに嘘情報を並べて置く。

「そうか、頑張ってくれ」

「はい、ありがとうございます」

6 話（後書き）

小野塚小町の距離を操る程度の能力って、そのまんまの、自由に距離を操るでいいのですかね？

感想などお待ちしております。

7話

side 祐依

今日は、土郎さんが監督をしているサッカーチーム翠屋JFCの試合があるらしく、応援に行こうと思った。

因みに、ゼロはメンテナンス中でいません。

教えてもらった試合会場に着き、土郎さんを見ると、なんかすごく困った顔をしていた。

その時、何故声をかけてしまったのだろう。

「こんにちは、どうかしたんですか？」

「ああ、こんにちは、メンバーが急病で来られなくなってしまって、メンバーが足りないんだ」

「それは、大変ですね。どうにか…ならないみたいですね。さっきの顔を見るからして」

「そうなんだ……そうだ！」

その時、嫌な予感がして、逃げようとしたら、肩をつかまれた。

「祐依ちゃんは、今いくつ？」

「えっと、十歳です」

肉体年齢を答える。

「サッカーの経験は？」

「向こうで、少々……」

高町家には普段は外国に住んでいて、今はこの街にいるがすぐ、外国に行くため、学校に通っていないと言っている。

あれ？これって…

「頼む、今日の試合に助っ人で出てくれないか？」

ぎゃーやっぱりー

「でも、私、女の子ですよ」

「大丈夫だ！それぐらいの歳なら、それほど差はまだない。せれに、前に息子たちと戦った時のあの動きができるんだから大丈夫！頼む、出てくれ」

よく、サービスしてもらっているため、土郎さんの頼みは断り辛い。

「はぁー、わかりました。出ますよ」

「そうか、じゃあ、皆に紹介するから、こっちに来てくれ」

その後、チームメイトに紹介され、試合前の練習で実力の確認をした。

試合前に高町家と会い、今回の件の説明し試合に出ることになったことを話す。

そこで、なのはの友達のアリサ・バニングスと月村すずかを紹介され、友人になる。

おしゃべりをしていると、

「翠屋JFC集合っ！」

「あ、じゃあ、そろそろ行くわ」

「うん、頑張ってね」

「頑張rinaさいよ」

「頑張って」

「ええ、じゃあ」

試合が始まり、私は前半は古明地こいしの、無意識を操る程度の能力、でちょこまかとカットして、相手の攻撃を防いでいた。

後半は、攻撃に参加し小野塚小町の‘距離を操る程度の能力’でボールを巧みにキープして、古明地さとの‘心を読む程度の能力’で、逆をついたりして、活躍していた。

ゴールキーパーのスーパーセーブもあり、翠屋JFCの勝利に終わった。

私、やるからには、本気で勝ちにいきますよ。

勝利を祝って、翠屋で祝勝会があったが、私はゼロをとりにいかねばいけなかつたので、辞退した。

ゼロを引き取り、街中をふらついていると、

—！

『マスター！』

「ええ、ってうわ！？」

ジュエルシードの発動を感じ向かおうとした途端、足元から巨大な木の根が生えてきた。

「何これ…」

そして、大樹が街中に突然生えてきた。

『マスター、あの大樹に二つの生体反応とジュエルシードの反応がそれと、あのビルの上になのは嬢がいます』

「わかったわ。ゼロ・セットアップ」

『了解』

いつもの姿になり、博麗霊夢の‘空を飛ぶ程度の能力’で空を飛び大樹の全貌と街の状況を見る。

「これはひどいわね…」

八雲紫の‘境界を操る程度の能力’で街と大樹に境界を引き、これ以上被害が出ないようにした後、なのはの所へ向かおうとしたが、

「あれは、ダメね」

街の様子を見たからか、呆然としている。

「ゼロ、私たちで行くわよ」

『いいのですか？』

「ええ、あれは、しばらく使い物にならないわ。待つよりも私たちがやった方が早い」

なのはを放置し、詠唱を始める。

「<全てを焦がせ焔の御手よ！ 我欲するは灼熱の宴 災いを灰燼と化せ！ エクスプロード！！>」

大樹の人がいるであろう場所を避け、周りの木を消し飛ばす。

「ふえ？ 何？」

なのはが再起動したが、無視。

私は、ジュエルシードの反応がある場所へ向かう。

「これね」

コアのようなものの中には今日知り合った、ゴールキーパーとマネージャーがいた。

その手にジュエルシードがあった。

「ジュエルシード、封印」

『了解 封印』

封印すると、殆ど消し飛んでいたが、残っていた大樹が消える。

ジュエルシードは、'倉庫'に入れる。

「なのはたちに挨拶をしにいきましようか」

「なのは」

「…ノアさん。私、ジュエルシードに気づいたのに、気のせいにしちゃって、それが、こんなことになっちゃった…」

「あなたは、それでどうするの?」

「え?」

「私は、魔術師として、これを封印、破壊するわ」

「そんな?これは危険な物ですよ。僕たちがキチンと封印しますので、渡してください」

ユーノがそう言うが、

「それは、出来ないわ。街に、一般人にまで被害がでる…そんなものを放っておけないわ。封印なんて、一時凌ぎのものなんて意味がないわ」

「……」

「なのは、あなたはこれを反省する?それとも後悔する?」

そう尋ね、答えは聞かず、去る。

side another

俯いていたなのは顔をあげ、

「ユーノ君」

「なのは?!」

「私、ユーノの手伝いではなく、自分の意志で、自分なりの精一杯ではなく、本当の全力で、もう二度とこんなことが起きないようにする」

ジュエルシード集めを続けることを誓うのはだった。

こうして、なのはとの立場が決まった。

side 祐依

家に戻ると、

『マスター、最後の言葉にはどういった意味が?』

私の仲間以外の人がいると、しゃべらないか、秘匿回線の念話しかないゼロが尋ねてきた。

「あれは、反省はすべきだけど、後悔はしなくてもいい。『反省、

は未来に繋がるけど、後悔は過去に縛られてるだけなのよ。
…私の先生の最期の言葉よ」

『……………』

7 話（後書き）

現在の祐依の立ち位置！

祐依は友人

ノアは敵

祐依はやるからには、本気で勝ちに行こうとします。

そのため、サッカーの試合で、技術と運でごまかせる能力をつかってました。

感想募集しています。

8話

side 祐依

今日は、サッカーの試合の時に友達になった、月村すずかの家に招待されました。

けれど、私を招待したのは、すずかの姉の月村忍さん。

以前の恭也さんたちとの試合と、サッカーの試合のことを恭也さんに聞き、私に興味を持ったようだ。

「はあ。これはわざとかしら？」

教えてもらった住所の家の場所に着き、呼び鈴を鳴らし、門が開かれたが…

『マスターを試しているのでしょうか』

明らかに、防犯システムが作動しっぱなしなのである。

むこうの世界で仕事柄こういった、防犯システムについてかなり警戒するようになって、無意識に探す癖ができてしまって、チカラを使い今回も見つけてしまった。

「偶然を装って、一つ作動させてみようか」

『それで、どうするのですか？』

「家に連絡して、解除してもらつように頼む。断られたら、帰る」

『それでいいんですか？』

「ダメ？」

ゼロを起動させ、扇子の形態にする。

何故か矢が飛んでくる仕掛けがあったので、それを使うことにする。

わざと、起動させる。

子供の体格のせいか、頭めがけて矢が飛んでくる。

紙一重で、ゼロで叩き落とす。

「わっ！？」

監視カメラが当然あるので、驚いた演技をする。

門の外に戻って、携帯を取り出し、

「あ、すずか？相沢祐依だけど、忍さんいる？」

以前知り合った時に携帯番号を交換したすずかに電話する。

「あ、祐依さん？部屋にいるはずだけど、どうかしたの？」

「きょう、忍さんに呼ばれたんだけど、ちょっと言いたいことがあって、よかつたら代わってくれないかしら？」

「いいけど…ちょっと待ってね」

少し待つと、

「もしもし、電話変わったわ」

「あ、忍さん。呼ばれてきたのに、防犯システム？のお出迎えってひどくないですか？」

「どういつことかしら」

「さっき、呼び鈴を鳴らして、門が開いたから入ったら、矢が飛んできて危うく死にかけたんですけど！」

「え？ちょっと待ってね……どうぞ、もう大丈夫だから」

待つこと数分

忍さんを信じて再び入るが、警戒して進む。

警戒しながら進むという演技をしたため、玄関に着くまで多少かった。

玄関に着き、警戒して開ける。

「いらっしやい」

忍さんと恭弥さんが立っていた。

「呼ぶなら、防犯装置を切つといてくださいよ！危うく死ぬところでしたよ！」

忍さんに文句をぶつける。

「それは、ごめんなさいね。怪我がなくてよかったわ」

「大丈夫だったか？」

「はい。矢が飛んでくるだけでしたけど、機械仕掛けだったんで、当たる直前まで気づけませんでした。何とか叩き落とせましたから」

「ごめんなさいね。それを含めて、話は私の部屋でもいいかしら？」

「はい」

忍さんの先導で部屋に向かう。

部屋に着き、メイドのノエルさんに紅茶を淹れてもらった。

「さて、お話を聞いてもいいかしら？」

忍さんの表情が変わり、真面目な顔つきになる。

だが、

「はい、防犯装置はやっぱりひどいと思います。私は今まで武術等を習っていて、今回は矢だったから対処できましたが、あれが、対処できないものや、私じゃない特に武術を習ってない方だったら危ないですよ」

私はあえて、さっきの話をぶり返す。

「え?... あ、それは、本当にごめんなさいね」

忍さんと恭弥さんは期待していた話とは全く違う話をされて、一瞬呆ける。

「私が聞いたかったのはその件じゃなくて、あなたについてよ」

「と言いますと？」

「その年で恭也といい勝負をしたり前のサッカーの試合での動き、そして今回、あなたは一体何者なの？」

「それは、どういった意味ですか？」

「その年であり得なさすぎるのよ。……あなたは本当に子ども？いえ、人間？」

「そうですね…結論を言えば、ただの人間ではありませんよ。あなた方家族のように」

「！」「」

忍さんと恭也さんの表情が驚きに染まる。

「どうして、それを！」

二人から殺気がくるが、殺気など慣れっこなので、スルーする。

「私の今からの話を決して誰にも話さないなら、話しましょう」

「わかったわ」

「わかった」

別にバレてもどうとでもなるが、一応条件を出す。

「わかりました」

なのはたちに気づかれないように、結界を幾重にも張る。

「これは？！」

「大丈夫ですよ。ただ、情報の漏洩を防ぐためのものですから」

結界の簡単な説明をする。

「さてと、まず、私の正体ですね。私はこの世界の住人ではありません。とある出来事により、この世界に飛ばされまして、向こうの世界にも地球はありまして、そこでは普通に魔法があり、魔物があり、言うなればファンタジーな世界みたいなものでしたね。そこで私はトップクラスの魔術師であり錬金術師で、まあ、他にも色々ありました。大抵の事は出来ますし、この姿も本物ではありません」

そう告げた後、この世界に来る前の姿になる。

「なっ?!」

二人がさらに驚く。

「まあ、世界の違いは正直どうでもいいんですが、それにこの世界もファンタジーがありますし。そこで私には人間以外にも知り合いがたくさんいたんですよ。そのなかに吸血鬼の知り合いもいましたから、多少の違いがありました。忍さんたちの正体がわかったんですよ」

「……」

二人が呆然としている。

再起動するまで、話を止め、
‘倉庫’からトランプを取り出し、ピラミッドに挑戦していた。

しばらくして、二人が復活した。

「うわ!？」

トランプを二組使った巨大なピラミッドが目の前にあり、恭也さんが驚く。

「さて、話の続きをしましょうか。それで、私には向こうでも異質なチカラがありまして、まあ、姿を変えたのもそうなんです。その幾つかで、正体を知ったり、恭也さんの攻撃を避けたり、矢を防いだりしたんです」

「幾つかということは、まだあるのかい？」

「ええ、まだあります。というのは少々語弊がありますが、概ね違いませんね。例えば」

そう言つて、机の上にあつたフォークを、ナイフに錬成する。

そのナイフを恭也さんに渡して、お茶うけにあつたケーキを切つてもらつて確認してもらつ。

ナイフをスプーンに戻す。

「あとは」

風を起こし、そよ風を向ける。

「とまあ、色々ありますね。誰にも言わないでくださいね。もし誰かにしゃべったりしたら、それ相応のことを起こしますから。例外はありませんよ。私も忍さんたちの秘密はしゃべりませんから」

「ええ、わかったわ」

「わかった」

「それで、まだ何かありますか？」

結界を解きながら尋ねる。

「いえ、ないわ。…そうだわ。今テラスでするかたちがお茶会をしてるんだけど、挨拶してきたら？友達なんですよ？」

「そうですね。サッカーの試合の前に話したきりだから、挨拶に行きますか」

「わかったわ。こっちよ」

忍さんに案内され、お茶会が行われているというテラスを目指す。

8 話（後書き）

次回は、なのはたちも出てきます。

感想など、募集しています。

9 話

side ずずか

今日は、なのはちゃんとアリサちゃんまで、お茶会をしています。

みんなとおしゃべりしていたら、サッカーの応援の時に知り合った、祐依さんから電話がかかってきて、お姉ちゃんに取り次ぎを頼まれて、お姉ちゃんに電話を渡した。

聞こえてくる話からすると、今日お姉ちゃんに呼ばれたらしい。

お姉ちゃんとの話が終わったら来てくれるかな？

私はみんなの所に戻って、お茶会を再開してしばらくしたら、猫に追われたユーノ君を追ってなのはちゃんが森の方に行ってしまった。

「ずずか。ちよつといいかしら？」

「なに？お姉ちゃん」

お姉ちゃんが話しかけてきた。

後ろには祐依さんがいた。

「祐依さんとお話が終わって、三人とも知り合いだから、連れてき

ただ、いいかしら？」

「うん」

さっき考えた通りになっただけ…

「あら？なのはちゃん？」

「なのははさっき、ユーノを追ってあっちに行っただけ…」

アリサちゃんが答えてくれた。

「そう、じゃあ帰ってくるまで三人でお茶会でもしてて」

「うん」

「はい」

「じゃあ、二人とも邪魔します」

そう言っ、祐依さんが入ってくる。

祐依さんはこの前、知り合ったばかりで、年上なのに、なんでかすぐに馴染めて、ずっと前から友達みたいに感じる不思議な人…

side 祐依

忍さんに案内されて、三人娘がいるというテラスに行くと、何故かなのはがない。

忍さんとすずかたちが話している内容によると、動物を追いかけていったらしい。

別にあの動物がどうなるうと知ったこっちゃないので、二人とお茶会をすることにしよう。

二人とおしゃべりしていると、

「それにしても、なのは遅くない？」

「そうだね…迷ったのかなあ」

アリサがなのはの事を気にすると、すずかも心配し始めた。

「じゃあ、ちょっとみんなで探しに行きましょうか」

仕方がないので、そう提案する。

「そうね、なにかあったら携帯で連絡を取り合えばいいわよね」

「うん、それじゃあ、行こう」

三人で森に入り、なのはたちを探すことに…

- !

森の中から魔力の反応を感じた。

「それじゃ、私はあっちの方を探してみるわ」

「はい、お願いします」

二人と別れ、魔力の方へ向かう。

移動しながら、探っていくと、なのはとユーノとジュエルシードとあと一つ知らない魔力が結界の中にあった。

「うーん、結界を張るのは正解だけど、そのせいで、気づけなかったわね」

ジュエルシードが発動した時に祐依自身が結界を張ったのでたまたま、気づけなかったのである。

移動中にゼロをセットアップし、正体を隠す。

現場に来てみると、なのはと金髪の女の子が戦っていた。

「ユーノ、これは一体？」

「あ、ノアさん。僕たちが子猫に憑りついたジュエルシードを封印しようとしたら、あの女の子が攻撃してきて、なのはが子猫を守るために戦闘になったんです」

「えーと、あなたが言う子猫っていうのはあの巨大な猫の事？」

そこにいたのは、巨大な猫だった。

「はい。おそらく、子猫の大きくなりたいたいという願いをジュエルシードが叶え、大きくなったと…」

「要するに、あの二人のジュエルシードの奪い合いね」

「ええまあ、簡単にするとそうですね」

「はあ、しょうがないわね。あとからの横取りはしたくないし…」

別に奪ってしまっても構わないのだが、それは非常事態以外ではめんどくさいので、パス。

二人の戦闘を見ていることにする。

――祐依の呟き――

へえ、あの女の子、戦闘に慣れてるわね。

なのはが近距離戦に慣れてないとわかると、近距離主体で攻めてるし。

それに、動きも早い方だし…

あ、猫に気をとられたなのはに一発決めて、なのはが気を失った。

「よくやるわね」

とりあえず、ユーノの気を失わせてから、声をかける。

「…誰？」

「私？私はノア・ミナツキ。魔術師よ！」

サムズアップして、答える。

「あなた、小さいのによくやるわね。名前は？」

「……フェイト・テストロッサ」

「フェイトね。あなたがジュエルシードを狙うなら、私も次は敵よ。今回は遅れたから、手は出さないけど。フェイトはそれをどうして集めるの？」

封印したジュエルシードをデバイスに収納しているフェイトに尋ねる。

「……」

「そう、理由は言えないのね。私はそれが、魔法を知らない人に危害を加えた。だからそれを封印している。フェイト、いつかは、理由を聞かせてね」

そう言つて、ユーノが張つたであろう結界を破壊し、なのはとユーノと子猫を持ち去っていく。

『マスター、いいのですか？』

「いいのよ。本当に非常事態なら対処の仕方を変えるけど、封印してくれるならそれでいいのよ。敵対しても、ライバルがいる方が楽しいじゃない！」

『まあ、マスターなら、敗けはしないでしょうが…』

「ええ、もし私の持つのを奪いに来たら、返り討ちにしてねじ伏せればいいんだから」

ゼロと会話しながら、屋敷に向かいつつ、二人に見つけたと連絡し、戻るように言う。

「なのは大丈夫？」

「ん？ああ、たぶん追っかけてるうちに転んで頭でもぶつけて気絶したんじゃないのかな？」

「うーん、ありえるかも…」

「そうね…なのはの運動神経ならあり得るわね…」

テキストについての嘘が思いのほかあっさりと信じられてしまった。

「じゃあ、恭也さんなのはたちを連れて帰ってもらおうか」

「そうだね。恭也さんならお願いしても大丈夫だよね？」

「そうね」

「決まりね。じゃあ、私がこのまま、お願いしてくるわ」

二人と別れ、恭也さんにあえて、嘘の報告しお願いし、私も帰宅することにした。

9 話（後書き）

新生活になり、更新が不定期になります。

なるべく、長期不掲載にならないように頑張ります。

10話

side 祐依

私は今、海鳴市の近郊にある海鳴温泉に向かっています。

先日、商店街の福引で温泉旅行券が当たり、息抜きを兼ねて遊びに行くことにした。

「へえ、いいところね。この旅館も、この街も」

旅館を見ての正直な感想だった。

いつまでも見ていても何も変わらないので、旅館に入ることにした。

「いらっしやいませ。とう旅館へようこそ」

中に入ると、女将さんが出迎えてくれた。

「予約していた、相沢ですけど」

「はい、相沢様ですね。少々お待ちください。：はい、部屋はこちらになります」

女将さんに案内された部屋でくつろいでいると、何か知っている反応が多々あった。

それも、この旅館に入ってくるようだ。

「偶然かしら？知り合いにこんなところで会うなんて…」

とりあえず、受付をしているだろう内に温泉に行くことにした。

「ああ、いいお湯ね」

露天風呂でくつろいでいると、

・ガチャ

誰かが露天風呂に入ってきたようだ。

「おお、いいとこだね」

赤みがかかった髪をした女性が入ってきた。

以前会った、フェイトに似た魔力反応がしていたが、面倒だったのでスルーし、夕食にしてもらったために温泉から上がることに。

温泉から上がり、念のためにサーチャーを至る所に配置し、様子を

見る。

夕食を食べてくつろいでいると、

あの女性となのはたちが揉めている光景が確認でき、とりあえず様子をみることにした。

念話を盗聴すると、どうやらあの女性はフェイトの仲間らしい。

フェイトがただ単に温泉に来るだけとは思えないので、ジュエルシールドがおそらく、この辺りにあるのだろう。

「よし、私も探しますか。散歩を兼ねて」

旅館を出て、夜の散歩を楽しみつつ、ジュエルシールドを探している
と、

- !

フェイトの魔力が感じられた。

「あつちか！」

魔力を感じた場所へ、セツトアップし向かうと、フェイトがすでに封印を行おうとしていた。

「ああ、また負けか…」

がつくりと肩を落とすと、

「あんた、何者だい？」

あの女性が声をかけてきた。

どうやら、仲間で間違いなかったようだ。

「私？うゝん…敵？」

「なんで、疑問形なんだい！」

「え…私もジュエルシードを狙ってるけど、今回も邪魔をする気はないから…かな？」

「どうしてだい？」

「横取りって、なんか、後で嫌な感じがしない？だから、今回は引くのかな」

「まあ、邪魔しないならいいわ」

「あ、でも、あれはどうだろう？」

と言って、やって来たなのはたちを指し示す。

女性がなのはたちに注目したので、私は情報収集のため、姿を隠す。

「ん？あいつ、どこ行っただ？」

女性が探すが、見つけれないだろう。

その後、三人と一匹の会話を聞いていると、あの女性はアルフという名前でフェイトの使い魔らしい。

アルフが犬っぽい姿になり、襲いかかったが、ユーノが防いで、アルフと共にどこかへ転移した。

なのはとフェイトの戦いになる。

二人の魔法の撃ち合いを見ているが、

「あれ、魔法というより魔砲じゃない？」

『そうですね。ですが、あれが遠距離での一般的な戦い方ですから』

「私なら、アレ相手なら、近距離戦に持ち込むかな？」

『それがいいでしょう。なのは嬢は戦法がアウトレンジですから。フェイト嬢は以前の戦いからして、ショートレンジの方が適正だとおもいます』

「そうよねーまあ、私はどっちも器用貧乏だから」

『マスター、あなたが器用貧乏であればなら、他の方々はどうなるんですか？』

「ん？まあそうねー、でも、どっちが得意って聞かれても、答えら

れないから…」

私はどの距離でもオールラウンダーに攻撃できるから…

「あ、決まった」

フェイトが、バルディッシュを鎌の形にし、なのはの首に突き付けている。

レイジングハートがジュエルシードを出し、フェイトがそれを貰い、一言二言話して去って行った。

「うーん、このままだと、なのははフェイトに見つかからないうちに発見・封印しないと、全部持ってかれるわね。そろそろ、私も本腰入れて、探し始めようかしら。フェイトと戦ってみたいし」

10話（後書き）

今日も何とか書けました。

感想等、待ってます。

11話

side フェイト

あの白い子に勝負を挑まれて、勝ってジュエルシードを手に入れることが出来たけど…

「アルフ、ノアさんって、どう思う？」

「ん〜？ はつきり言って、わからないね。フェイトがジュエルシードを封印をしているのを見た途端に落ち込んでいたし、あの白いのと戦っている時に、攻撃できたはずなのにいつの間にか消えていた…それに、あいつも集めているって言うていたくせに、邪魔をしなかった…」

「うん。戦うとしたら、大丈夫かな？」

私としては、戦わずに済むなら、楽に集めれるからいいんだけど…

「もちろんフェイトなら大丈夫さ！…って言いたいけど、あの白いのは問題ないけど、ノアって言う奴は、戦っているのを見たことないし、それに、目を離れた一瞬の隙に消えていた…魔力を感じなかったから、魔法は使っていないはずなのに…」

「そうだよな。白い子のことを知っているみたいだけど、仲間じゃないみたい。あの子が来ることを教えてくれたし…」

ノアさんは初めて会った時には、小さい動物と話していたけど、私が勝ったら気絶させてから話しかけてきた。

私の名前を教えちゃったけど、白い子は知らなかったから、話していないはず。

「うーん、とりあえず、非常事態以外は何もしてこない筈だから、先に見つけるでいいんじゃないか？」

「そうだね…」

でも、全部を集めるなら、ノアさんが持っているであろうジュエルシールドも手に入れなきゃいけないんだよね…

side 祐依

フェイトたちがノアについて悩んでいた頃

「あつた！」

海鳴市周辺でジュエルシールドを搜索し、発動前に発見し、封印を行っていた。

『マスター、今日はどうしたんですか？それで、二つ目ですよ』

「うーん…感？」

なんとなくで探していたら、今日は二つ見つけることが出来た。

『感ですか…』

「うん、テキトーにうつっていたから」

そんな感じで、街中をブラブラしていたら…

- !

周囲を魔力流が駆け抜け、

その後、結界が張られる。

「ふ〜ん、さっきの魔力はフェイトで、結界はユーノか…」

さしずめ、魔力でジュエルシードを強制発動させたのだろう。
そして、ユーノが結界を張って、周りと隔離したのだろう。

「
♪」

『マスター、どうしました？』

これも手に入れることが出来ないの、また観戦しようと思ったが、ふと暇つぶしを思いついた。

「ん？ちよつとね」

二人が見える場所に移動し、隠れる。

二人が同時に封印をし、放置して戦いだす。

戦いの余波の魔力にジュエルシードが反応し出す。

「なんでさ…二人はどうして気づかずにドンパチやってるのかしら？」

『周囲の警戒を怠るほど、戦いに集中しているのでは？』

「周囲に気を配るのは基本じゃない？なのは仕方ないとして、フエイトは余裕がないのかしら？なのはが強くなってるのかな？以前よりはまだましになってきてるけど…」

『マスター、お二方ともこの世界では強い部類に入りますよ。保有魔力量は高いですし』

「言葉だけじゃなにも変わらないって言ってたけど、話さないと言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!」

なのはが戦闘中にフェイトに向かって、そう叫ぶ。

「私は…」

自分たちの最優先事項は、ジュエルシードの捕獲であるとアルフに遮られ止められる。

そして、フェイトはジュエルシードに向かうが、なのはも同時に杖で捕える。

「て、アレやばいよ!」

考えていたことを何時実行しようか、考えながら見ていると、

ジュエルシードを捕えたレイジングハートとバルディッシュに亀裂が入り、閃光と衝撃が走る。

「リンク・十六夜咲夜・八雲紫・ロード」

私は咄嗟に、時間をゆっくりにし、スキマに退避する。

二人の杖が破損し、二人は吹き飛ばされる。

スキマから出てくると、

ジュエルシードは不気味な鼓動を続けていて、フェイトは素手で無理やり封印にかかる。

「て、またやばいよ!」

フェイトが掴む前に割って入り、封印を施す。

「ふゝ、これで一先ずOKね。はい」

そう言っ、フェイトにジュエルシードを弾き渡す。

「…どうして?」

「ん?あのままだと、大怪我しそうだったから、代わりにやっただけだよ」

「…ありがとう」

そう小さな声で返される。

「いいわよ、これぐらい。じゃあ、そろそろ私は戻るわね」

そう言っ、なのはたちが何か言っ前に立ち去る。

その後、二人の間で一悶着起きそうになったが、アルフにせかされ、フェイトも離脱し何も起こらなかったらしい。

『マスター、どうして魔法を今回使わなかったのですか？』

（祐依の封印は単純に魔力を用いず、チカラの一部を使って行っています）

「ん？ちよつとね……」

私はそう言って、宙を見る。

11話（後書き）

祐依の情報隠蔽能力＋‘黒き月のペンダント’で大抵のものを誤魔化せます。

その気になれば、五感だろうが機械だろうが見つけることはできません。

ただし、こちらからなにかアクションした場合、五感は欺けません。けれど機械は欺けます。

12話

side?

とある戦艦っぽいブリッジには数人の人がいた。

「艦長」

その中の茶色い髪をした女性が、声をかける。

「どうしたのかしら？」

緑色の髪をした艦長と呼ばれた女性が答える。

「はい。第97管理外世界で詳細は不明ですが、強大な魔力が観測された、このことで、原因究明に向かえ、このことです」

「そう。じゃあ、直ちに現場に向かうと返答しといてくれる？」

「はい。わかりました」

「クロノ、危なくなったら…」

「大丈夫ですよ。そのためにいるんですから」

「そうね、任せたわよ」

side 祐依

「うーん、夕食どうしよう。作り過ぎちゃったなあ」

少々考え事をしていたら、作り過ぎてしまった。

「お隣さんにおすそ分けしようかな？」

（因みにお隣さんはフェイトたちです。）

・ピンポーン

「はい？どちら様ですか？」

「こんばんわ、ちょっと夕飯のおかずを作り過ぎちゃって、良かったらどう？」

「いいんですか？ありがとうございます」

「いいのよ。むしろこっちが感謝してるわ。不注意で食材をダメにしちゃうとこだったんだから」

「はい、いまからご飯なので、いただきます」

「そう、また感想聞かせてね」

そう言って、部屋に戻る。

『マスター、どうしたんですか？』

「ん？さっきのことであつとね…それに、フェイトはあんまりいいものを食べてないみたいだし、ご両親を見たことがないからね」

『そうですね。あんな年齢の子が親元を離れてジュエルシードという危険な物を集めているのは気になりますね』

「そうですね。だからね」

sideフェイト

また、祐依さんにおすそ分けを貰って、美味しいご飯がアルフと食べられる。

「アルフ、よかったね」

「ああ、最初は警戒してたけど、料理は美味しいし頼りになる。いいお隣さんでよかったね」

アルフとおすそ分けのおかずと一緒に食べて、買っておいたケーキを持ち、転移の準備をする。

お母さんのいる時の庭園に戻って報告をするが、

「これだけ時間をかけて、たった四つしかないの?!」

お母さんを怒らせてしまって、鞭で叩かれる。

「うっ」

「これだから出来そこないは」

怒って出て行ってしまった。

「くそ、あのクソババあめ」

アルフが怒ってくれるが、

「アルフ、お母さんは、ずっと不幸で悲しんできたんだから、わたし、なんとかして喜ばせてあげたいの」

そう言って、アルフを宥め、

「戻って、ジュエルシードを探そう」

転移して家に戻ると、

・ピンポーン

またチャイムが鳴った。

「はい？」

出てみると、祐依さんがまたいた。

「あ、フェイトちゃん。これ知り合いにもらったお菓子何だけど、たくさんもらい過ぎちゃって、よかつたらどう？」

「あ、ありがとうございます」

そう言って、受け取るために手を伸ばすと、

「あれ？その怪我どうしたの？」

治療しきれなった腕の傷跡を見られる。

「えっと、ちょっと、ひっかけちゃって…」

「そうなの？じゃあ、ちょっと待ってて」

そう言って、家に戻っていく。

数分後、

「フエイトちゃん、これよく効く軟膏だから、お風呂上りに塗ってみてね」

軟膏と説明書き見たいな物を渡される。

そうして、お菓子とお薬をくれて、帰って行った。

side 祐依

夕食後、転移したのを認知し、おそらく、親の元に行ったのだろうと憶測をたてる。

しばらくして、帰ってきたが、なにかおかしいと感じ、以前にもらったお菓子のすす分けと称し、様子を見に行くことにする。

おすす分けを渡そうとした時に、腕に傷を見つけ尋ねる。

なにかあやふやな答えだったが、とりあえず、以前に作った薬をあげることにし、フエイトに渡す。

「ゼロ、フエイトの転移先の座標わかる？」

『はい、一応記録してありますが』

「明日、乗り込んで話を聞くわよ」

『了解』

そうして、明日の予定が決まった。

12話（後書き）

祐依は知り合いが困ったりしていたら、出来る限りのことをしてあげようとする偽善者に近いです。

隣にいつの間にか住み着いていたフェイトたちに現在少し、同情しています。

13話（前書き）

4月29日 - 名前の間違い訂正しました。

13話

sideフェイト

昨日、祐依さんにもらった薬を塗ってみたら、

「すごいじゃないか！ハレも完全に引いてる」

アルフに背中とかを見てもらったら、そう返ってきた。

「祐依さんの薬のおかげだね。でも、これ、普通の商品みたいにパッケージとかないし、お店とかでも見たことないから、なんなんだろう？」

「別にいいじゃないか。傷が治ったんだから！これで、ジュエルシードを探すのに支障がでないね」

「うん。それじゃあ、行こうか」

アルフと一緒にジュエルシードを探しに行くが、やっぱり気になるのはお隣の祐依さん。

今度、お礼に行った方がいいかな？

side 祐依

さてと、フェイトたちが出て行ったようなので、情報遮断の結果を部屋に張り、

「ゼロ、お願い」

『了解』

バリアジャケットを装備し、ゼロの転移で、昨日フェイトが行ったであろう場所に転移する。

そこに着き、目にした光景は、

かつては美しかったであろう荒れ果てた庭園と、奥に見える大きな建物。

「ゼロ」

『はい…サーチ完了！あの奥の建物の中に人の反応があります』

そう聞き、建物を目指す。

（因みに、気配などを完全に遮断しているため、気づかれています
ん）

私はある巨大な扉の前に立っていた。

『マスター、この奥に』

「わかってるわ」

・ギイツ

「誰!」

扉を開けると中に玉座のような椅子に座っている黒髪の少々やつれた女性がいた。

「そうね、ヒール（悪役）とも言うっておきましようか」

「ふざけないで!」

女性が電撃の魔法を放ってくるが、

「トレース・オン 投影・開始千鳥!」

千鳥またの名を雷切と呼ぶ、雷を斬ったという概念を持つ日本刀を投影し、

「はっ!」

電撃を斬り、霧散させる。

「なっ!?!」

自分の魔法が防がれるのではなく、斬られて消えた。
そのことに驚き、動きが止まる。

「チェックメイトね」

その隙をつき、千鳥を首元に突き付ける。

「くう!」

歯を食いしばる女性。

「こんなことになったけど、私は戦いに来たんじゃなくて、話をしに来たんです。話を聞いてもらえますよね?」

「ええ、わかったわ」

千鳥を消し、倉庫から椅子を取り出し、腰掛ける。

「では、幾つか質問しますね。まずは、自己紹介、私の名前はノア・ミナツキです」

「プレシア・テストロッサよ」

「では、プレシアさんと。昨日フェイトさんに怪我を負わせたのはプレシアさんですか?」

「そつよ」

「そうですか。次に、あなたはフェイトさんの母親ですか？」

「冗談じゃないわ。あんな出来損ないが娘なんて！」

「何故、出来損ないと？」

「あの子は私の娘のアリシアのクローンの出来そ…っは？！」

フェイトの正体が予想以上にあっさり判明！

「そうだったんですか…もしかして、娘さんは魔導実験の事故によつて…」

「！ 知ってるの？！」

「事件の概要と原因だけですけど…」

「もう、答えることはないわ！帰って！」

「わかりました。けど、一つだけ、フェイトさんは生まれが通常とは違います、あなたが生み出した…あなたの娘ですよ。フェイトさんはフェイトさんであって、その娘さんアリシアさんとは別人ですよ」

そう言つて、椅子を「倉庫」にしまい、足下に煙玉を投げ、煙幕を張り消える。

sideプレシア

「つたく、あの出来損ないは…」

・ギイ

私は昨日の事を思い出し、イライラしていたら扉が開き、そこには仮面をつけ、黒い外套を身に纏う奴がいて、咄嗟に尋ねたが、ふざけた返答が返ってきて、イライラしていたから魔法を放ったが、どこからともなく現れた膨大な魔力を宿した剣に斬られ、消え去ってしまった。

そのことに氣をとられ、その際に首元に突き付けられ、話しかけてくる。

話し合いとなったが、つい感情的になり過ぎて、口を滑らしてしまった。

その後、フェイトが私の娘と…

アリシアとは別の娘だと…

何故か、心に残り、尋ねようとしたら、煙幕を張って、消えていた。

「何だったのかしら…?」

最後に煙幕を張る意味が分からなかったが…

「あら?」

煙幕が消え去った後、彼女がいた場所に、一枚の紙が、

『最後のことを考えてみてください。もし何か思うことがあったら、此処に連絡をください。できることがあればできる限りのことはします。お身体をお大事に』

そんなことと、電話番号が書かれたメモが落ちていた。

私はいたい・・・

フェイトは・・・

アリシアは・・・

13話（後書き）

原作をさらに壊していることと思います。

感想やご指摘をお待ちしています。

14話（前書き）

4月29日 - 名前の間違い訂正しました。

14話

side 祐依

プレシアさんとお話した後、ルインのもとに轉移し、

「ルイン、今からプレシア・テストロッサのことと魔導実験の事故について調べて！」

「はい。少々待っていてください」

「頼んだわよ」

ルインに調査を頼み、私は自室に移り、

「ふう、？リンク・四季映姫・ヤマザナドゥ・コンタクト？」

『祐依さんどうしました？』

「あ、四季さん。今ちよつといいかしら？」

『ええ、丁度仕事がひと段落して今から休憩にしようとしていたところですから』

「じゃあ、アリシア・テストロッサがそっちの名簿に載ってないか、調べてくれない？」

『わかりました。すぐやらせますので』

「いえ、明日に再度連絡しますから。そんなに急がなくてもいいですよ」

そうして、話を終わらせ、調査と返答を明日まで待つ。

ただ、待っているだけでは、暇なので、また海鳴市に戻り、ジュエルシードを探すことにした。

街中をぶらついていると、

- !

「あっちか！」

ジュエルシードの反応があった。

現場に行くと、なのはとフェイトが何故か共闘し、ジュエルシードを封印していた。

ジュエルシードの封印が施され、どちらが手に入れるかまた決闘しようとしていたので、

「じゃあ、私が一先ず預かるわよ」

「「ノアさん!?!」」

二人が驚く。

「また、前みたいに暴走したらバカらしいから、私が二人の決着が着くまで封印してるから」

「そうだね。ノアさんなら、大丈夫だよね」

「うん」

私はジュエルシールドを手にし、二人から距離をとる。

「じゃあ、ついでだから、私が合図するわよ」

二人が距離をとり、戦闘準備を済ませ、

「いくわよ。始め!!」

二人がいざ戦闘を始めようとした時に、

「そこまでだ!時空管理局執務官、クロノ・ハラOWNだ…詳しい事情を聞かせてもらおうか?」

黒い少年が割って入ってきた。

「えゝ、ここで止めるゝ?」

とつい呟く。

あれがKYというやつか…

「フェイト!」

アルフがフェイトに向かって叫び、目くらましの攻撃をし、離脱しようとするが、

少年の射撃魔法がフェイトを襲い怪我を負わせる。

第二射撃が放たれたが、

「ふっ!」

‘倉庫’から一本のナイフを取り出し、少年の顔すれすれに投擲する。

少年の髪を数本飛ばしながら、ナイフは飛んで行った。

「うわっ!?!」

少年の射撃魔法が中断し、不発に終わる。

その隙に離脱するフェイトとアルフ。

「なんだ貴様!」

少年が怒鳴ってくるが、

「何か？ 知り合いが襲われていたので助けようとしただけですが？」

「公務執行妨害で逮捕する！」

「どうして？」

「我々の妨害をしたからに決まっているだろ！」

「ふ〜ん。ところで、あなたは一体何者なんですか？ さっきから、ごちゃごちゃ言ってますけど」

「我々は時空管理局だ！」

「聞いたこともありませんね。一体どこの宗教団体ですか？」

（嘘です。暗部まで色々知ってます）

「ふざけるな！ 魔導師が時空管理局を知らない訳がないだろう！」

「ふざけてなんかいいわよ。私は魔導師なんかじゃないから。あなたの常識で話されても訳がわからないんだけど？」

「いいかげんにしろ！」

『落ち着きなさい。クロノ』

突然、少年の前にウィンドウが現れ、緑の髪をした女性がそう言う。

「母さ…艦長」

『クロノの無礼をお詫びするわ。話を聞きたいからこちらに来てもらえないかしら?』

「だってさ。なのは、ユーノどうする?」

「私も行く!」

「僕も行きます」

「と言う訳だから、二人は行くそうよ」

『二人はと言うことはあなたは?』

「別に私は行く義務はないでしょ?」

「ふざけるな!貴様は攻撃してきただろう!」

「だからそれが何?私たちはあなたたちの存在を今まで知らなかった。この地球の情報に時空管理局なんて言葉はないし、知らない勝手な法律を言われても従う必要性はないのよ」

「情報がないのは当たり前だ!ここは管理外97世界。魔法とは縁のない世界だからだ」

「だったら尚更、従う必要性が無いわね。あなたはたった今この世界を管理外世界と言った。管理されていないのに、そちらに命令される筋合いはないわ」

「な『止めなさい』…艦長」

『話を伺いたいのので申し訳ないけど、こちらに来てくれないかしら？』

「はあ、行かないと帰してくれないんですよ…死体の後始末は簡単だけどめんどくさいから…行くわ」

「今なにか、不吉な言葉が聞こえた気が…」

傍観していたユーノが呟いていた。

14話（後書き）

祐依はゼロというデバイスを持っていて、魔導師と言いますが、仲間以外にゼロのことを知られていないので、今は魔導師とは名乗りません。

時空管理局に使われないためです。

閻魔様として、四季映姫・ヤマザナドゥを採用しました。
よって、幻想郷はどの世界とも繋がっている？設定です。

四季映姫・ヤマザナドゥの口調がイマイチわからなかったため、違うかもしれません、ご了承ください。

感想、ご指摘、ご意見、募集しています。

15話

side 祐依

少年に連れられて、変な場所に連れてこられた。

なのはたちと少年の会話からすると、ここは、時空管理局の巡航し級8番艦。

次元空間航行艦船‘アースラ’と言らしい。

ユーノはどうやら本当の姿は人で、なのはが大絶叫していた。

「艦長、入ります」

どうやら、目的地に着いたようだ。

中に入ると、外国人の古い日本のイメージをしたかのような部屋だった。

日本をおちよつくてるのか？

「ようこそ、私が、アースラ艦長のリンディ・ハラオウンよ」

「エイミィ・リミエッタです」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「ノア・ミナツキ」

「クロノ・ハラOUNだ。そろそろ、バリアジャケットを解除したらどうだ？」

「そうだね、レイジングハート」

なのははバリアジャケットを解除する。

「貴様はどうして、解除しない？」

高圧的に尋ねてくるが、

「さっきも言ったでしょ。私は魔術師。解除なんかないわよ」

（嘘です。今は、ゼロを身に着けています）

「仮面ぐらい外せるだろう！」

あゝ、そっちな。

顔を見られたくないし…

「よし、少年s。こっちに来なさい」

部屋の隅に呼ぶ。

「どういうことだ？」

「ん？顔を女性に見せたくないのよ」

「…わかった」

隅に来て、私はなのはたちに背を向け、仮面を外す。

仮面を外し、顔を見せた直後、二人は気絶する。

「何をしたの！？」

艦長とやらが尋ねてきたので、

「私の素顔を見せただけですけど？」

「どうして、顔を見ただけで、気絶するのよ！？」

「以前にとある儀式によつて、顔に大怪我したんですよ。それで、大抵の人は私の素顔を見れないんですよ。それに、治療は不可能なので、仮面で素顔を隠しているんですよ。ノーメイクでホラーに出れますよ」

（嘘です。怪我なんてしていません。幻術をかけて、素顔じゃないものを見せて、その上、気絶させました。起きてても、恐怖しか思い出せず、思い出そうとは思わないようにしました。トラウマを植えつけてやりました）

「…そう」

皆が若干引いている。

「まあ、気にしてないから。そいえば、ユーノが気絶しちゃったら、話が出来ないわね」

「二人が起きるまで、お茶でもどうかしら？」

私以外の人が、お茶を飲み始める。

「あら、ノアさんどうしたのですか？」

リンディが問いかけてくるが、

「まだ、何も話しておらず、あなた方が信頼できるかどうか、判断できませんので、出されたものを飲めません」

「そう…」

リンディはお茶に大量の砂糖を入れているのを見て、なのはたちが引いていた。

私も引いた。

心理的にも物理的にも…

15話（後書き）

ここで、今日は切ります。

次回には話し合いに入りたいと思います。

16話

sideクロノ

「う…」

目を覚ますと、艦長室の天井が見えた。

「僕は…?」

「あ、目が覚めた?クロノ君」

「ああ、エイミィ。何があった?」

「ええ」と、ノアさんの仮面の下の素顔を見た途端に気絶したんだよ。ノアさん曰く、ノーメイクでホラーに出られるくらい酷い大怪我しているらしいよ。それに殆どの人がトラウマになるんだって」

「う、…」

エイミィに何が起こったのか聞き、思い出そうとするが、何故か思い出せない。

思い出そうとすると、頭の中で警鐘が鳴っている気がする。

「その様子だと、クロノ君もトラウマになっちゃった?」

「ああ。情けないが…思い出そうとしても、何故か思い出せない。思い出したくない気がしてくる…」

「うわぁ」

「そう言えば、奴は？」

「ノアさん？ノアさんならそこに」

エイミィの指し示した方を見ると、

奴と母さんが何やら言い争っていた。

「……何?!」

僕は再び戦闘態勢に移り、攻撃がいつでもできるようにするが……

言っていることを聞いてみると、

「お茶に砂糖を入れるのは、艦長職は頭を使うことが多く、疲れた時には糖分が必要で……」

「だからと言って、お茶にそんなに砂糖をいれたら、お茶本来の味が分からなくなり、それは、食材に対しての冒瀆です」

どうやら、母さんの特製のお茶。

別名リンディ茶に対する抗議のようだ。

「…エイミィ。あれはどれくらいやっている？」

「そうだね、かれこれ、三十分は過ぎてると思うよ」

「なっ！？そんなにか！？」

「うん。最初は引いてたけど、心理的にも物理的にも…だけど、すぐに戻ってきて、そこから言い合ってるよ」

「そうか…」

僕もあれは異常だと思うが、今まで誰も辞めさせるどころか、話しても数分と持たなかったのに、奴はかれこれ、三十分以上も話し合っているなんて、もしかしたら辞めさせれるのではないかと期待してしまった。

少し、意識がまた遠くに行っていたが、再度見みると、

「エイミィ、あれはどっから出したんだ？」

「え？うーん…気づいたら、準備が始まってたよ」

さっきまで言い合っていたはずなのに、今は奴がお茶を淹れるための道具をどこからともなく取り出し、お茶を淹れようとしていた。

「あ！起きた？丁度いいわ。全員に試してもらっわ。師匠直伝の本

当のお茶っていうやつを」

そんなことを言い、いつの間にか、座っていて、全員の前には奴が淹れたお茶が出されていた。

「さあ！」

奴の迫力に負け、湯呑を手にとると、

お茶のいい香りが漂ってきた。

恐る恐る一口飲んでみると、

『ッ！』

今までにこんな美味しいお茶を飲んだことなどない。

それほどまでに美味しいお茶であった。

周りを見ると、全員が同じような驚愕の表情をしていた。

「なにこれ！？こんな美味しいお茶初めて！」

エイミイが驚きのあまり、そう叫ぶ。

「どう？これがお茶本来の味よ！」

「くう」

奴がそういうと、母さんが膝をついていた。

確かに、奴の淹れたお茶にこのお茶菓子というのも、互いを尊重し合い、素材の味を活かし合っている。

「負けたわ」

母さんがとうとう負けを認めた。

「そう言えば、話し合うと言って、此処に連れて来たんじゃないかったか？」

「『あつ』『あつ』（祐依・クロノ以外）

16話（後書き）

原作破壊！

リンディ茶を破壊？してみました。

料理屋で修行中の知人がいまして、以前会った時にその人から料理に、食材に関する話を聞いていて、自分も色々思うことがあったので、こんな話になりました。

それと、作者が病気をやった時に、食事制限されて、薄味のことを食べたりした時に以前よりも美味しいと感じ、それから、薄味の方に変わってきたので、砂糖を大量に入れる、リンディ茶を否定してしまいました。

感想、ご意見 お待ちしています。

17話

side 祐依

つい時間つぶしのお茶で白熱してしまったけど、やっと本題の話し合いになった。

初めにユーノのことの説明をする。

「・・・そうわかったわ。これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「えっ？」

なのはが驚きの声をあげる。

「君達は、今回の事は忘れ、元の世界に戻って、元通りに暮らすといい」

「でも、そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

なのはが何か言おうとしたが、言う前に止められた。

「まあ、急に言われても気持ちの整理も出来ないでしょう？ 一度

家に帰って、今晚ゆっくり話し合つといいわ。その上で、改めてお話ししましょう」

「そう。じゃあ、さっさと帰らせてください」

私がそう言つと、

「ええ?!」

なのはがさつきよりも驚いていた。

「どうして? ノアさん! ?」

「私には関係ないから。これは貴方たち魔導師の話でしょ? 私は魔導師じゃないから。それに、現在私が知りうる限りの時空管理局のお偉いさんがこんな人だから」

「…それはどう言う意味かしら?」

「先程、時空管理局執務官クロノ・ハラウン殿が言いましたね。
『民間人が介入していいレベルの話じゃない』と」

わざわざ、役職名からフルネームで呼ぶ。

「ああ」

「…」

「と言うのに、何故話し合う必要があるのですか? もし本当に関わらせたくないなら、無理やりにもさせないようにすべき筈なのに、

「何故か」話し合う時間を作る。まるで、「協力を願いださせよう」としているかのよう」

「…」

「そこんとこ、どうなんですか？時空管理局提督にしてアースラ艦長リンディ・ハラOWN殿？」

皮肉を込めてそう尋ねる。

「…」

「沈黙は肯定ととりますが」

リンディ・ハラOWNを問い詰めると、

「母さん！それは本当なんですか？」

クロノが驚きによつてか、艦長と呼ばずに尋ねるが…

「…」

何も言い返さない。

「そうですか。さしずめ、時空震の計測をしているくらいだから、その場にいたなのはたちも計測していて、なのはたちの能力を知り、自分たちの駒としてでも利用しようとも思っただけでしょ？」

「…貴方達を騙して協力させようとしたことについては認めるわ。ごめんなさい」

そう言って、頭を下げる。

「そうですか。別に私にはもうどうでもいいんですけどね。なのはたちはどうするの？」

「協力させてください。まだ、フェイトちゃんとお話ししてないから。ちゃんとお話ししたいから！」

「僕もそもその原因は僕にありますから、最後まで手伝わせてください」

「だ、そうですよ。よかったですね。じゃあ、もういい加減帰してください」

「待つて、あなたは一体何者なの？あの世界には魔法文化は無いはずなのに」

「あなた方の常識で話さないください。あの世界にも魔術師が、魔法関係はありますよ。我々魔術師は一般人に決して知られないようにし、代々継いでいき魔法の研究をしている。よって、魔術師以外知らないんですよ。なので、知ってしまった者は引き込むか、口封じ、記憶を消す」

そう言って、チラッと〇〇〇を一瞬だけ見る。

「まあ、魔術師同士の交流がないから、地球に私以外にいるかどうかはわかりませんがね。もしかしたら、隣の人が魔術師かもしれないし、既に私以外は滅んでいるかもしれない」

そう付け足す。

「あなたは、現場にいたはずなのに、どうして映像にも映っていないし、測定機いえ、どんな機械にも反応がなかったんですか？」

「魔術師だからですよ」

「答えになっていないぞ！貴様」

「我々は秘匿する者。そういったモノですよ」

「どうということなの？ノアさん」

「一般人に知られないようにするモノがこういった結果になったんですよ」

そうはぐらかす。

「…そうですか。それで、あなたはどつするんですか？」

「答える義理はないですね」

尋ねられるが、斬って捨てる。

「帰してくれないようなので、自力で帰りますよ」

そう言つて、左の袖に右手を入れ、あるものを取り出す。

「待て！話はまだ終わってないぞ！」

「では、サヨナラ」

煙玉を足下に投げつけ、煙幕を張り、

『リンク・十六夜咲夜・八雲紫・ロード』

前みたいに、時間をゆっくりにした後、スキマを開き、入る。

家に帰った後、

『マスター、これが最近あまり魔法を使わなかった理由ですか？』

ゼロに尋ねられたので、

「ええ。監視されているのにわざわざ見せる義理はないし」

『それにしても、どうやって気づいたんですか？』

「私は、通常とは異なることや、そういったことに敏感なのよ。だから、普段から黒き月のペンダントをつけてたりするのよ」

そう言った、会話をしつつ、夕食のきりたんぽ鍋を食べていた。

17話（後書き）

東方シリーズの能力は魔力じゃないチカラなので、管理局の機械には反応しませんでした。

まあ、黒き月のペンダントのおかげで、よほどのことが無い限り、バレませんが。

感想、ご意見、ご指摘、ご質問、お待ちしております。

18話

sideリンディ

あの次元震の現場にいた子たちに話を聞いて、

とある提案を…

あわよくば、この子たちを利用できるようにとしようとしたのだが…

ノア・ミナツキと名乗る、第97管理外世界にもとからいたという魔術師にこちらの思惑を全て見通され、全てを話されてしまう。

彼女を探ろうとしても何もわからない。

アースラの全ての機械、私や部下の探査魔法を用いても、何一つわからない。

全てが未知数だが、彼女に協力をしてもらえたら、遥かに容易くこの事件を解決できるだろうと考えただけけれど、彼女が自分で帰ると言いだし、まだ交渉するために咄嗟に部下に転移をさせないようにする結果をアースラの周りに張らせたが、彼女が足元に何かを投げつけると煙幕が張られ、煙が消えるころには既に姿はどこにもなかった。

彼女がさっきまでいた場所に一枚の紙切れが落ちていた。

『地球で我々魔術師を無理やり探そうとしても無駄ですよ。あなた方程式では何も知ることができませんよ。あなた方曰く地球を管理しようとしても、その過程であなた達に色々な国から、核や質量兵器の雨が降りますよ。もう一度言います。探すだけ無駄ですよ。』

そして、私は私の心情に肩入れする。その果てに何があるうとも。私の心情を貫く。誰にも、何人たりとも、我々は飼いならすことはできない』

そんなことが書いてあり、次に会うのはおそらく戦場だろう。

私たちには彼女を探す術がなにのだから。

「これが本当なら、あの世界は静観のままがいいのかもしれないわね……」

「艦長、それは一体？」

私はクロノに手紙を見せる。

「これは?!」

読んでいるうちに顔が険しくなっていくが、

「クロノ。あの世界はこのまま管理外世界にしておくわよ。間違っても管理しようと思わない方がいいわ。彼女のあなたへの初撃の攻撃方法がナイフの投擲だったように、彼女は私たちとは違う。彼女の魔法がどういったものかわからないけど、おそらく魔法が使えない人々は質量兵器で抵抗してくるわ。それではこちら側に多大な被害がでるわ」

何か言う前に釘をさす。

「あの」

なのはちゃんが、手を挙げて声をかけてきた。

「あら、ごめんなさい。なのはちゃんの世界のことを勝手に話してて、それでなにかしら？」

「えと、実際に見たことは無いけど、私たちの地球だとミサイルとか鉄砲とか傷つけることを、殺すことを前提に作った武器で戦うから、ノアさんの話は大体あつてだと思います」

「そう。クロノ、思っちゃだめよ」

「…はい」

その後、なのはちゃんたちと再度話し合い、これからどうしていくかを話し合った。

18話（後書き）

短いですが、管理局側のお話でした。
ノアこと祐依への警戒をしています。

お手紙の後半はFateのランサーの影響が多大にあります。
作者はランサーも大好きです。

19話

side 祐依

次の日、

「？リンク・四季映姫・ヤマザナドゥ・コンタクト？」

昨日の報告を聞くために連絡を取る。

『祐依さん』

「どう、わかった？」

『はい、こちらの名簿には載っていませんから、正式には死んでいません。それと、リニスという山猫が、一度こちらに来ましたが、同じ姓のプレシア・テストロッサの使い魔としてそちらに戻りましたが、まだ、こちらには戻ってきていません』

「そう、ありがとう。今度、お土産もってお礼に行くね」

『わかりました。楽しみにしています』

会話を終えると、

『祐依さん、調査が終わりました』

ルインから連絡が入り、ルインのもとに向かう。

「ルイン、どうだった？」

「はい、プレシア・テストロッサは、当時魔導工学の研究開発者であり、一つのプロジェクト『新型の大型魔力駆動炉開発』の設計主任に任命されました。しかし、問題の多い前任者からの引継ぎ、上層部の勝手な都合で厳しくなるスケジュール、上層部に嫌気が差しやめていくチームスタッフたちの事後処理など拷問のような出来事が次々とプレシアに訪れ、プレシアの進言にも拘らず上層部が自分達の都合で出した決定の末に『駆動炉の暴走・エネルギー漏れ』が起こってしまいました。結果的には『プレシア・テストロッサが違法手段・違法エネルギーを用い、安全確認よりもプロジェクト達成を優先させた』という形で記録に残りました。

その後プレシアは地方である研究、それは人造生命の研究。その技術を元にしてプレシアはアリシアの細胞を用いて作り上げた彼女と寸分違わぬ素体にアリシアの記憶を転写した人造生命体を生み出した。

『アリシア』と呼ばれていた記憶を消した後、このプロジェクトの名前からその生命体には『フェイト』という名が付けられたそうです」

「それが、あの子なのね」

「おそらく、アリシアを蘇らそうとして、生み出されたのがフェイト……」

「だから、出来損ないか……ありがと。だいたいわかったわ」

「いえ、祐依さんの依頼ですから、お気になさらず」

ルインの報告を聞いて、どうしようか考えていると、

『マスター、何故アリシア嬢の死亡調査を？』

報告を受け終え、これからのことを考えていたら、ゼロからそう聞かれる。

「ん？ああ、それはプレシアさんに話を聞きに言った時、フェイトによく似た女の子の霊がプレシアさんの近くにいたから、これは、アリシアじゃないかなって思っ、もし正式に死んでいるなら成仏させてあげなきゃいけないけど、正式に死んでいないんだから、きっと、体に戻ることが出来ないだけの状況だったら、何とかしてあげたいじゃない。■ ■ みたいにしておけないから」

『マスター……』

「さて、これから、どうなるかはプレシアさん次第ね。幻影を追い

求め続けるか、現実に目を向けるか……それとも……」

数日後、石狩鍋を食べながら、プレシアさんがどういった答えを出すのか、考えていると、

「
♪
♪」

と携帯電話が着信を告げる。

「これは、プレシアさんね」

今更だが、携帯番号を渡したけど、電話って持ってたのかしら？そもそも、電波は届くのかと考えながら、電話にでる

「もしもし」

『私よ。プレシアよ』

「どうしました？」

『あなたの言葉をずっと考えてたわ。それであなたと直接話したいから、悪いけどこちらに来てくれないかしら？』

どうやら、プレシアさんの中で、プレシアさんの答えが出たようなので、

「いいですよ。少し準備がありますので、少々お待ちください。すぐにそちらに向かいます」

『ええ、悪いわね』

「いえ、私がそう言い出したんですから、お気になさらず」

そうして、通話を終え、時の庭園へと向かう。

19話（後書き）

次回、プレシアさんの答え

感想、ご意見、ご質問
お待ちしております。

20話

side 祐依

時の庭園のプレシアさんのいる部屋を訪れる。

「ギイ

「ようこそ」

プレシアさんが出迎えてくれた。

「お招きありがとうございます。それで、プレシアさん、あなたの、
あなただけの答えは出ましたか？」

私はいきなり直球に尋ねる。

「ええ、あなたに言われてから、何日も考えたわ」

「それで？」

「あなたの言うとおり、フェイトは確かに生まれは普通じゃないけど、私が生み出した、私の娘よ」

プレシアさんが私の瞳をまっすぐに見つめながら、そう答える。

「そうですか。それが、プレシアさんが考え出した答えですね。それで、これからどうするんですか？このまま、フェイトにジュエルシードを探せさせ続けるんですか？」

「ええ、フェイトには悪いけど、こうするしか…フェイトの為には」
最後にそう付け足す。

「わかりました。理由は聞きません。これをお渡しします」

‘倉庫’からジュエルシードを取り出し、渡す。

「いいの？今のが嘘で悪用するかもしれないのよ？」

「大丈夫ですよ。プレシアさんの目を見ていればそれくらいわかります」

「そう…」

「ところで、フェイトは？」

「フェイトなら、今あなたがジュエルシードをくれたから、管理局にまだ発見されていない最後のジュエルシードの封印に向かっているわ」

そう言つて、モニターを出し、見せてくれる。

フェイトが大規模な魔法を発動させようとしていた。

「って、あれやばくないですか？」

「ええ！あんな魔力を使って、さらに六個も封印するなんて無茶よ」

プレシアさんまで、驚いている。

どうやら、あそこまで無茶をするとは思っていなかったようだ。

「あゝ、ちよつと、行ってきますね」

フェイトの元へ駆けつけると、巨大な六個の竜巻がフェイトを襲おうとしていた。

「ちつく白きに染められし凍結なる世界、安らかなる幕引きを与えん！ブリザード！」

フェイトに当たらないように注意しながら、近づいていた竜巻を凍らせる。

「「なっ！？」」

二人が驚いていると、

「フェイトちゃん！」

なのはがやってきて、何か話し合っている。

どうやら、二人で封印を行うらしい。

大丈夫そうなので、私はプレシアさんのところへ、戻った。

戻ってみると、プレシアさんが魔法を行使しているところだった。

モニターを見てみると、フェイトたちに向かって雷撃を放っていた。

「ッ！　ゴホゴホッ」

魔法の行使が終わると、途端に吐血をした。

「って、うわ！　大丈夫…じゃなさそうね」

「ええ、私はもう長くはないわ」

「ふむ、＜癒しの光よ！　ヒール！＞」

応急手当てに治療術をかけ、吐血を止める。

「はあはあ、ありがとう」

「いえ、フェイトたちが戻ってくるまで、横になっていたらどうです？」

「ええ、そうするわ」

横になり、目を瞑ったのを確認した後、病気を調べる。

「ふむ、これなら……」

『マスター、フェイト嬢たちがもうすぐ戻ってきます』

「そう、ありがとう。プレシアさん、もうすぐ来ますよ」

起こした後、別れを告げ、私も帰る。

20話（後書き）

感想・ご意見・ご質問　お待ちしております。

21話

side 祐依

あの後、プレシアさんから、再度連絡を貰い、明朝に全てのジュエルシードをかけて、なのはと最後の勝負をするらしい。

あと、アルフが襲いかかってきて、怪我を負わせたら、第97管理外世界に転移してしまったらしい。

そして、現地人に助けられて、治療を受け、その後、なのはと会い、管理局にプレシアさんのかつての思惑を知られてしまったらしい。

けれど、それは、かつての考えで、今とは過程は似ているが、最後の結果は全く違うらしいので、放置しているらしい。

「さあ、一体どうなるのかしら？」

『マスター、マスターは既にどうするのか考えているのでは？』

「ええ、結果を言えば、数十の案はあるわよ。でも、所詮それは机上の空論。実際にはどう動くなんて誰にもわかりはしない。その場、その場で考え、行動し、理想に近い未来を手繰り寄せる…それしかないのよ」

『ですが、マスターならどうにかしてくれると信じています』

「ありがと、ゼロたちの信頼に応えられるように最善を尽くすわ」

明朝、朝靄のたつ公園でなのはとフェイトが向かい合っていた。

私は、姿を隠しながら、近くで見ていた。

なのはが勝負の前に何やら言っていたが、フェイトは自分の意思を曲げず、バリアジャケットを装備する。

それを見て、なのはもバリアジャケットを装備し、ジュエルシールドをめぐる戦いの決着をつけようとする。

戦いはフェイトが終始有利にことを運ぶが、最後の攻撃、フォトンランサー・ファランクスシフトをなのはに耐えられ、逆にディバインバスターで返され、さらに追撃で放った全魔力を込めた砲撃魔法・スターライトブレイカーを決める。

「うわゝ、あれ、オーバーキルでしょ…非殺傷設定でも死なないかしら？」

スターライトブレイカーが直撃し気絶したのか、海に向かって落ちていくフェイトをなのはが助けるが、そこにプレシアさんの次元魔法の雷撃が放たれ、フェイトに直撃する。

バルディッシュが庇い、比較的軽症で済むが…

「なるほどね。あなたの考えはわかったわ。…でも」

今の行動で、大体のプレシアさんの今の思惑の見当をつける。

今の雷撃でバルディッシュとレイジングハートからジュエルシードが吐き出され、二十一個全てが揃う。

クロノが転移で現れ、それらを手にしようとするが、

「はっ！」

私は姿を現し、黒鍵をクロノに向かって投擲する。

「何?!」

黒鍵に怯んだ隙に、ジュエルシードをプレシアさんが転移魔法で奪う。

「貴様!どういうつもりだ!」

「ふふふ。そうねえ、人助けかしら?」

「ふざけるな!今度こそ貴様を逮捕する!」

「ふふふ。管理局ごときには捕まえられまい」

そう言った後、クロノに向かって、再度、黒鍵の投擲をし、転移の時間を稼ぐ。

管理局の武装局員が数名やってくるが、

「残念だったわね。これから、始まるわ」

そう言って、時の庭園に転移する。

時の庭園のプレシアさんのもて行くと、管理局と交信している最中だった。

その中には、なのはやフェイト、アルフもいた。

私は映らないように注意しながら、静観していた。

プレシアさんがフェイトの正体、真実が語られる。

画面越したが、フェイトが真実の重さに耐えきれず呆然としているのが見えた。

その後、管理局の武装局員が送られてきたが、プレシアさんに一蹴された。

「プレシアさん。これが、あなたの出した答えですか？」

「ええ、私はもう長くはない。フェイトを守るには、こうするしか… 私はもう罪を犯し過ぎた…」

「フェイトを管理局に保護させ、プレシアさんが罪を全て被る。これが、あなたの答えでいいんですね？」

私は最後の確認をとる。

「そうよ。それが、私のフェイトを守るために考えた答えよ」

プレシアさんは偽りのない目で、私の目を見てそう話す。

「そう、なら、合格ね。」

そう言って、プレシアさんをバインドで拘束し、魔法封じの結界の中に閉じ込める。

21話（後書き）

次回、祐依がプレシアさんに初めて会った時に言ったことをやりま
す。

20000アクセス

3500ユニーク

到達しました。

皆さん、読んでくださりありがとうございます。

22話(前書き)

5月3日 - 本文加筆

22話

sideクロノ

二人の決闘が終わり、ジュエルシードが偶然全て揃い、それを回収しようとしたら、

ノアが突然現れ、剣を投擲し妨害してきた。

一瞬怯んでしまい、その隙に全てを奪われてしまった。

「貴様！どっいつつもりだ！」

咄嗟にそう尋ねるが、

「ふふふ。そうねえ、人助けかしら？」

ふざけたような返答をしてきた。

「ふざけるな！今度こそ貴様を逮捕する！」

「ふふふ。管理局ごときには捕まえられまい」

そうあざ笑うかのように挑発してきた。

応援に来た、武装局員と共に捕まえようとするが、

「残念だったわね。これから、始まるわ」

そう言うと、転移されて逃げられてしまった。

「くそっ！…あいつは後だ！先に居場所がわかっているプレシア・テストロッサを逮捕する」

先ほどの魔法の逆探知によって、居場所が判明したプレシアを先に逮捕に向かう。

そう局員に指示を出し、プレシアのもとへ乗り込むために一旦アースラに戻る。

アースラに戻ると、プレシアと交信している最中で、その中で、フエイト・テストロッサの正体・真実が判明し、安心していたが、優先すべきはプレシア・テストロッサの逮捕なので、医務室に連れて行かせ、僕たちはプレシア・テストロッサがいる時の庭園に乗り込むために転移の準備をする。

sideプレシア

管理局との交信を終えるとノアが声をかけてきた。

私の出した答えの確認。

私は、本当の自信をもって、答えた。

彼女が『合格ね』と呟き、どういうことが、尋ねようとするとき、
バインドで拘束され、結界を張られた。

その時に手にしていたジュエルシードを全て落としてしまう。

「どういうこと?! 今から何をするつもりなの?!」

そう問うと・・・

side 祐依

私はプレシアさんの答えを聞き、初めて会った時に言った『ヒール
(悪役)』になろうと決めた。

「ふふふ。先程言ったようにプレシアさん。あなたの出した答えに
共感しました。それで、私からのプレゼントです」

「拘束しておいて、何をするというの?!」

プレシアさんが拘束されながらも、私を睨みつけながらそう問う。

「では、時間もあまりないので簡潔に結果だけを答えましょう。

一つ、プレシアさんの病気の治癒、

二つ「アリシア・テストロッサを起こす」
三つ「ありえなかった日常を」

「なっ？！そんなことは、出来るはずがないわ！死者を蘇らすなんて、失われた都アルハザードにでも行かない限り！それに私の病気は治すことのできないものなのよ！」

「いえ、アリシア・テストロッサは正確には死んでいませんよ。魂が体から抜け出てしまい、戻ることが出来ずにいるだけです。それに、アルハザードに行っても、死者の蘇生は出来ませんよ。かの都が滅びた理由、それが、死者の蘇生。神の域を犯した報いを受けたからですよ」

私はそう告げながら、アリシアを隠し部屋から運び、準備をする。

「何故、あなたがそれを？」

「私は以前にある事故でアルハザードに飛ばされ、そこで知りました。因みにプレシアさんが初めに計画していた次元震を起こしてもたどり着けませんよ。そこにたどり着くには他の方法があるんです。これは、さすがに誰にも言えない事です……」

準備を終えるが、まずは、

「先にプレシアさんの病気を治します。せつかく、アリシアが起きても、あなたがいなかったら悲しみますから」

そう言つて、プレシアさんの病気を先に治すことにする。

「く聖なる光りよ 彼の肉体を悪しき種子の呪縛より解き放ちたま

え！ レイズデッド！>」

プレシアさんの下に魔法陣が現れ、光がプレシアさんの身体に宿っていく。

「こっこれは?!」

「どうです？病気は治りましたか？」

「ええ、病気は治ったけど…」

「あとは、・・・」

私はある薬を無理やり飲ませる。

「一体なに…を…?!」

「何かはお気づきでしょう？私だけの若返りの薬ですよ。あの事故が起こった時の年齢まで、無理やり年齢を若返らせました」

プレシアさんは絶句していた。

「じゃあ、次はアリシアね」

アリシアに向かい、呪文を唱える。

「くその力 穢れなく澄み渡り流る 魂の輪廻に踏入ることを許したまえ！ リヴァヴィウサー！>」

アリシアの下に先程の魔法陣とは比べものにならないくらい複雑で膨大な魔力を有する魔法陣が現れ、アリシアを光が包み込む。

賢者の石こと、黒き月のペンダントのおかげで、デメリットは魔力の消費程度です。

「アリシア！」

プレシアさんがアリシアに向かって、叫ぶ。

「う、うゝん」

「アリシア?!」

アリシアが目覚めると、目を見開き、一層声高々に叫ぶ。

「アリシアちゃん大丈夫？」

「うん。起こしてくれてありがとう！」

プレシアさんを今は無視し、確認を進める。

「やっぱり、プレシアさんのまわりにいつもいたのは、アリシアちゃんだったんだね」

「うん。あの時の事故で体から離れちゃって、どうすることもできなくて、お母さんのまわりにずっといたんだよ」

「じゃあ、今までどうだったのか。これからの事も予想がつくわよね？」

「うん。いつも一緒にいたから今までのことはわかるよ。これから
の事はあんまり自身がないけど」

「そこまで、わかれば十分よ。あとのことは私にまかせなさい」
そう言って、

「<深淵へと誘う旋律 ナイトメア>」

譜歌を謡い、アリシアをただの眠りにつかせる。

「さて、そろそろ時間ですね。最後の仕上げをします」

遠くの方で、戦闘の音が聞こえ始める。

「何をするつもりなの？」

「簡単ですよ。あなたのデバイスの記録部分にある細工………
を施します」

「そんなことをしたらあなたが！」

「ふふ。言ったでしょ。私は『ヒール』って。構わないですよ。全
ては私の独断……偽善ですから。……それに先生との誓いでもありま
すし」

私はプレシアさんのデバイスに細工を施しながら、説明する。

「それは一体どういうこと？」

私は質問をあえて無視し、

「さて、タイムアップですね。念のためにジュエルシードを持っていきますよ。あ、安心してください。無駄に使ったり、発動させたりなどはしませんから」

ジュエルシードを「倉庫」にしまい、その後、デバイスを返す。

「これで、お別れですね。最後に、せつかく前を向けるのだから、前を見つめて生きてくださいね。過去に縛られるのではなく、未来、この先にあるものを信じてください。…あ、忘れていました。あなたの使い魔であつたりリスはあなたを信じて今も待っていますよ。ことが落ち着いたら、彼女にはあなたが応えてくださいね」

プレシアさんもアリシアと同様に譜歌で眠らせ、バインドを解き、母娘揃って寝かせる。

数分後、管理局員となのは、そして、フェイトが入ってくる。

22話（後書き）

全ては、祐依の偽善です。

管理局のせいでも、無茶苦茶になってしまったテストロッサファミリ
ーを助けるためにジュエルシードをめぐる戦いの罪を全て被りました。

祐依は助けたいと思った人々は何が何でも助けます。

その過程で、法を犯すことになっても…

それが、祐依の先生との誓いでもあり、償いです。

感想・ご意見・ご質問お待ちしております。

23話

sideフェイト

ジュエルシードを集めるのに何度も衝突してきた、高町なのはと最後の決闘をし、負けちゃったあとにお母さんの魔法が襲ってきて、バルディッシュが庇ってくれたおかげで、怪我は殆ど無かったけど、管理局の時空航行船アースラに連れてこられた。

艦長と名乗るリンディさんがいるブリッジに行かされるが、そこに着くと、突然、お母さんが交信してきて、そこで明かされる私の正体とお母さんの過去…

その話を聞いて、呆然とする私。

白い魔導師と管理局はお母さんを捕まえるために時の庭園に乗り込むらしい。

私は医務室に運ばれ、そこで私は今まで何をしてきたのか、私は一体何なのだろうか。

と自問自答していると、

先に突入していた管理局員がお母さんに敗れて、医務室に運ばれてきた。

アルフが自分の想いと、これから訪れるはずの未来をそつと語り、少女たちの手伝いへと向ってゆく。

『S i r M a s t e r 』

私を庇ってボロボロに傷ついたバルディッシュが応える。

「バルディッシュ…」

自分はもう終わったのではなく、まだ始まってすらいなかったのかと。

静かに告げる。

どんなに傷ついても戦う意思を捨てない愛杖の姿に、
フェイトはバルディッシュもまた、自分とともに傷ついても戦いつづけてきたことを思う。

傷ついても砕けても、強く光を放つバルディッシュに涙を落とし、
フェイトは想いを決める。

それは運命から逃げることで、戦いや信じたものを捨てることでもなく。

愛する人の過ちすら疑わず、ただ信じることだけに逃げていた弱い自分…

「バルディッシュ。今までの自分を終わらせる」

という答えを出した。

『S i r』

バルディッシュも応えるように起動する。

「行こう！時の庭園へ」

時の庭園に着くと、傀儡兵に苦戦するみんながいた。

「バルディッシュ」

『S i r』

一撃のもとに傀儡兵を一掃する。

「フェイトちゃん！」

「お母さんに言いたいことがあるから、手伝って」

「うん！」

皆が驚いていたけど、頷いていてくれる。

傀儡兵を倒しながら、進んでいくと、分かれ道があり、本来ならば

二手に別れるはずなのだが、何故か駆動炉が今は、現状維持のため程度にしか動いていない。

なので、五人全員でお母さんがいる部屋を目指し、進んでいく。

「ここが、お母さんの部屋…」

「全員で一斉に突入し、確保するぞ」

「うん」

「行くぞ！」

全員が確認し、突入するとそこには、

お母さんと私にそっくりな女の子が寄り添うように寝ていて、

そこから少し離れた場所に今までに何度も会ってきた仮面をつけた一人の女性。

ノア・ミナツキが立っていた・・・

side 祐依

管理局やなのは、ユーノ、アルフそしてフェイトが部屋に入ってくる。

「遅かったわね。もう終わったわ」

「お母さんたちに何をした！」

「ただ、眠っているだけよ。後、一時間程で、起きる筈よ」

「貴様の目的は一体何だったんだ！どうして此処にいる！」

「目的はジュエルシードの封印、そして破壊。そのために全てが揃っているここにいる」

「ジュエルシードの管理は僕たち管理局の仕事だ！渡してもらおう」

「残念ね。私は管理局を信用できないのよ。ここ数日で調べただけで、そう判断したのよ」

（嘘です。かなり前から、管理局の闇も知っているけど、以前に知らないと言っているから辻褃合わせです）

「どついうことだ！」

「簡単なことよ。組織には裏、即ち闇の部分が存在する。組織が大きくなればなるほど、そんなところを信用して、悪用されたらたまら

ないから、私が破壊して二度と使えないようにするのよ」

「そんなことあるか！」

「事実よ。とある貴方たちの言う管理外世界で行われていた人体実験を含む違法研究。これは管理局の配下の研究所だったのよ。もちろん私が人が出ないように破壊して、使い物にならないようにしたわ。私が破壊したのは、二つ。おそらく、探せばまだまだ出てくるわよ」

「証拠はあるのか!？」

「いいえ。ICレコーダーの音声と一部の写真、それと私の証言しかないから、立証するのは無理よ」

そう言つて、ICレコーダーと写真の入った封筒を投げる。

「研究所は塵も残さず消し飛ばしたから、行っても無駄よ」

私は寝ている二人から距離をとり、二人の回りに結界を張る。

「そろそろわかったでしょ？話し合いなど平行線と。言いたいことがあるなら、私を倒して、私を捕まえてから好きなだけ言いなさい」

そう言つて、戦闘態勢に入る。

相手も全員戦闘態勢に入る。

23話（後書き）

より、管理局との敵対のために対立します。

感想・ご意見お待ちしております。

24話

side 祐依

「さあ、？リンク・セイバー・アーチャー・ランサー・サモン？行くわよ！」

セイバーとアーチャーとランサーを召喚し、それぞれ戦闘態勢に入る。

「セイバーはあの黒髪。アーチャーは茶髪の子。ランサーは金髪の子をそれぞれお願い」

「了解！」「」

そうして、皆が散開し、それぞれ、戦闘に入る。

side セイバー

マスターに呼ばれ、戦闘にすぐ入る。

「さあ、私の相手は貴様か。かかってこい。この剣にかけて貴様を倒そう」

そう言って、宝具は切り札なので、以前に渡された、宝具と全く同

じ質感・質量・形状をした、空中戦を行えるようにと空中に足場を作るなど補助を目的に作られたデバイスという剣を向ける。

「悪いが、用があるのは、ノアだからさっさと終わらせる」

「ふっ。さあ来い。貴様の挑戦に応えよう」

「ステインガースナイプ」

魔法を放ってくるが、私は構わず突っ込み剣を振るう。

「なっ?!くっ」

剣は間一髪で杖に防がれる。

「確かに今の攻撃は直撃したはずだ」

「どうした?これで終わりか?」

「くそっ!ブレイズカノン!」

先ほどとは異なる攻撃が来るが、

「はあっ!」

私の対魔力でキャンセルし、攻撃を仕掛ける。

「があっ!?!」

剣で切りかかるが外傷は与えられない。

だが、衝撃により行動不能になる。

「さあ、貴様の負けですね」

sideアーチャー

「ふむ、私の相手はお嬢さんかね」

「待つて！私たちはノアさんとお話したいだけなの！」

「マスターが言っただろう。話がしたければ、倒して見せろと。マスターの命だ。行くぞ！」

投影した干将・莫耶で切りかかる。

「きゃあ」

後ろに下がって、いや、転んで避ける。

『Protection』

再度切りかかるが、プロテクションが張られ、防がれる。

「今度はこっちが行くよ！ディバインシューター！」

「^{トレース}投影・^{オン}開始」

弓を投影し、剣を放つ。

魔法と剣が衝突する寸前に

ブローケン ファンタズム
「壊れた・幻想」

剣を爆発させ、魔法を相殺かつ目くらましをする。

「これで、終わりだな」

背後にまわりこみ、干将を突き付ける。

sideランサー

「俺の相手は嬢ちゃんか。さあ、いっちょやりますか！」

「行くよ！」

切りかかってくるが、

「はっ遅え」

セイバーたちと同じように宝具と同じような槍型デバイスで突く。

「くっ！」

槍で、払い、薙ぎ、突く。

「そらそらそら！」

嬢ちゃんは防ぐので背一杯だな。

「はあはあ」

速さを活かし、間合いをあけられる。

「フォトンランサー！」

魔法を撃ってくるが、

「はっ 遅え」

最速のサーヴァントと呼ばれる所以の速さで接近し、杖を弾き、槍を突き付ける。

side 祐依

「さあ、あなたたち行くわよ」

「はっ、かかってきな」

私はまず、misfortuneとhappinessを錬成し構える。

「なっ?!どっからそんなもん?」

どうやらアルフが前衛でユーノが後衛らしい。

私は実弾ではなく、魔法弾を放つ。
ただの魔力のもの。属性をもったもの。
様々な魔力弾を放つ。

実弾ではない。
故に魔力がある限り、撃つことができる。

「はあ!」

アルフが殴りかかってくるが、

「甘い」

躲して、お返しに光属性の魔弾の一つ閃光弾を放ち、目くらましをし、ユーノとの間合いを詰め、
misfortuneの銃身の下部についている逆三角形の部分で後頭部を殴り、気絶させる。

さらに、アルフはhappinessを後頭部に突き付ける。

「これで、終わりね。抵抗すれば、実弾を撃つ」

どうやら、皆も終わったらしい。

「みんな、ありがとう」

そうして、みんなが戻っていく。

「ふふ。残念だったわね。私たち、[、]黒き月[、]はあなたたちに負けはしないわよ」

そう告げ、転移する。

25話

sideクロノ

「くそっ！」

あいつに全員で挑んだが、あいつの仲間、黒き月と名乗っていた奴らに全員が負けてしまった。

誰一人一撃も与えることも出来ずに…

『クロノ』

「はい、艦長」

『逃げられてしまったのはしょうがないわ。後で対策を練りましよう。今は、そこにいるプレシア・テストロッサの確保を』

「わかりました」

母さんの言う通り、逃げられてしまったては、今はどうしようもない。

奴は第97管理外世界の住人と言っていたが、奴は我々とは全く異なった技術、魔法を使う。

転移も出来るようで、あのまま戻るとは考えにくい。

おそらく、すでにどこか違うところに逃げているだろう。

なので、今は今回の件に深く関わっていた、プレシア・テストロッサの確保をすることにする。

近寄って様子をみると、どうやら眠らされているだけのようだ。

僕は、念の為にバインドで拘束し、アースラに転移させる。

「ただいま帰還しました」

艦長室へ報告のためになのはたちも連れて行く。

「ご苦労様。なのはちゃん達も協力感謝するわ」

「いえ、私はやりたいことをしただけですから」

「そう…でも、ありがとう。それで、プレシア・テストロッサの事なんだけど…クロノ、彼女たちが起きたら、すぐに取り調べをして、ノア・ミナツキの行方を追って」

「わかりました」

あの後、フェイト・テストロッサはアースラに戻った途端に気を失った。

どうやら、無茶をし過ぎたらしい。

今は、二人のデバイスを没収し、三人とも医務室で眠らせ、監視をつけている。

「クロノくん。フェイトちゃんたち大丈夫なの？」

「そうだな…現時点では今回の件の容疑者であり、重要参考人でもあるから、手荒な真似はしないだろう」

「よかった…」

「なのは?!」

どうやら、安心して気が緩んで、気を失ってしまったらしい。

「ユーノ、すまないが、なのはを別の医務室に連れて行って、寝かせておいてくれ。僕は取り調べの準備をするから」

「わかったよ」

なのはが倒れた時に支えたユーノになのはを頼み、取り調べの準備に向かう。

s i d e リンディ

「一体彼女は何だったのかしら…」

クロノたちを見送り、私は今ある情報の整理をつける。

「彼女は私たちとは全く違う魔法や技術を持っている。私たち、管理局を知らなかった筈なのに、たった数日で調べる能力…それに彼女が見つけたという管理局の違法研究所…それに彼女の目的…」

彼女は、初めて会った時から、何かあった…

今回の件を手伝わせようと思って、誘導しようとしても、あつという間に見抜かれ、看破されてしまった。

なのはちゃんたちが決闘して、偶然ジュエルシードが揃い、クロノが回収しようとした時に突然現れ、妨害。

その際に『人助け』と言っていた。

あの状況から考えて、プレシア・テストロッサの協力者かと思っただが、時の庭園に乗り込み、いざ彼女の部屋に突入したら、彼女らは眠らされていて、そのすぐそばに立っていた。

捕まえようとしたが、黒き月と言う彼女の仲間を呼び、瞬く間に全員が破れてしまった。

そして、プレシアたちを放置して、転移してしまった。

「彼女は誰を助けようとしたのかしら？」

「艦長」

思案に耽つていると、クロノがいつの間にか私の前に資料を携えて立っていた。

「なにかしら？」

「取り調べとデバイスの記録媒体の調査が終わりました。それで、報告に来ました」

「何かわかったかしら？」

「ええ。どうやら、今回の一件はフェイトはプレシアに従って行動した。ですが、さらにフェイトに命令していたプレシアの裏にもう一人の人物が存在し、プレシアを利用しジュエルシードを集めようとしていた人物がいた。その人物に誘導され、プレシアは今回の件を起こした。そう、デバイスの記録に残っていました。その黒幕が、ノア・ミナツキです。ノアはデバイスをよく知らず、故に記録が残されていることに気づかなかった。それで、デバイスに記録が残されていたでしょう。ノアはジュエルシードが第97管理外世界にばら撒かれる以前にプレシアとは面識があつたようです」

「…そう」

「これが、デバイスの記録です。ですが、プレシアはそれと全く異なった弁解をしているんです。まるで、ノア・ミナツキを庇うような…」

「どういうこと?」

「はい。それは、プレシアが今回の件を自分で起こしたと、ノアは後からやって来た。と…ですが、デバイスの方の記録には不備が無いように改竄された形跡も見受けられないんです。どこにも、異常が見当たらないので、おそらく、プレシアが庇っているだけに思われます。」

「魔法をかけられているという可能性は?」

「検査をしました、眠らされた魔法…術式は一切不明ですが、と
りあえず、それしかありませんでした」

「そう。やはり、今回の件はノア・ミナツキが起こしたものの
かしら?」

「その可能性が高いと思われます。あ、それとプレシアのデバイス
にプロテクトのかかった謎のデータがありまして、そちらは現在調
査中です」

「報告は以上ですか?」

「はい」

「…わかりました。その謎のデータが解析され次第、上に報告しま
しょう」

「はっ」

「もう、休んでいいわよ」

そう言って、クロノを下げさせる。

「一体なにがしたいのかしら？ 目的を尋ねたところで、ジュエルシードの破壊と言うし、第97管理外世界に表だって、調べに行くことはできない。謎のデータ次第で彼女の処遇が決まるわね…」

side 祐依

あの後、転移を複数回行い、完全に撒いてきた。

『マスター。あれで、本当によかったのですか？』

「ええ。狂っていたのを戻しただけだから」

『おそらく、マスターは指名手配されると思いますが…』

「それぐらい平気よ。私たちのチカラしってるでしょ」

『はい。ですが…』

「いいのよ。プレシアさんたちに光を与えたんだから」

そう言って、視線を宙に向ける。

『マスター…』

26話

sideプレシア

ノアに眠らされ、目が覚めたら既に捕まっていた。

その後、取り調べになったが、先にデバイスを調べられたらしく…

「これで、間違いないな？」

ノアが残していった、偽の情報を鵜呑みにしていた。

「いいえ。それは全て偽物よ。今回の件は全て私がやったのよ。ノアは後から来たのよ」

私が証言するも、ノアが言ったように信じてもらえず、取り調べが終わってしまった。

「ノア…一体どうして」

「お母さん…」

考え込んでいると、

「フエイト？」

フエイトとアルフがアリシアに連れられてきて、声をかけてきた。

「お母さん、あの話は全て偽物なの？お姉ちゃんに今までの話を聞いたんだけど…」

「ええそうよ。途中でノアに諭されて、フエイト、あなただけでも助けようとしたんだけど…本当にごめんなさい」

「うん。ありがとう。お母さんは最後は私の為にしてくれたんだよね？」

「そうよ。もうそれしかないと思ったから…でも、これからはずっと一緒よ」

「うん」

フエイトは嬉しそうに抱き着いてきた。

「でも、このままじゃ終われないわ。ノアが罪を全て被ってその上、私たちを助けてくれた。彼女と話をもう一度しなくちゃいけないわ」

「お母さん。私たちも手伝う！」

「ありがとう」

フエイトたちと和解し、家族の時間を過ごしていると、

「プレシア。ちょっと聞きたいことがある。艦長室まで来てもらお

う」

管理局員が入ってきた。

「なにかしら？」

「内容は行ってからだ」

「わかったわ。じゃあ、ちょっと行ってくるわね」

艦長室に入ると、

「プレシアさん。あのデバイスのプロテクトにかかっていたデータは本物なの？」

そう尋ねられた。

「ええ。あれは本当よ」

「……そう。……あなた達には裁判を受けてもらうわ。今までの情報を踏まえて、形だけのものになると思うけど、そんなに重い罪にはならないと思うわ。それで、おそらく、管理局の委託魔導師になると思うのだけれど、……私たちはノア・ミナツキを追うことになるのだけど、手伝ってくれないかしら？」

「それなら、引き受けるわ。私たちにもノアと話すことがあるから」

「ありがとう。それで、明後日にミッドチルダに戻ることになるのだけど…フェイトちゃんとなのはちゃんの暫しのお別れをさせてあげたいんだけど…」

「こちらこそ、お願いするわ。フェイトの初めてのお友達なんだから」

そうして、二日後、なのはたちと暫しの別れを告げ、ミッドチルダに旅立った。

26話（後書き）

えゝ、これで、無印編は終わりです。

この後、少しA・sまでの空白期をやりたいと思います。

感想・ご意見お待ちしております。

27話

side 祐依

私は今、飛び交う魔法を掻い潜っています。

何故かと言うと、

「ついに見つけたぞ！絶対に捕まえる！」

管理局員を相手にしています。

どうしてこうなったかは…

あれから大分たち、

「ここね。違法研究してるっていう管理局の研究所は」

とある世界にある違法研究所を潰しに来ました。

潜入し、証拠などを集めていたら、偶然研究員の一人と書類を持ち上げた時に遭遇してしまい、見つかってしまつて、仲間を呼ばれる前に気絶させたのだが、倒れた時に手にしていた物を落として、大きな音をたてられて、それに反応した警報が鳴り響き、応援が次々とやってきて、研究所にいた研究員や警備の人と一戦交えて全員を倒した。

別にこのまま放置してもいいのだが、後々復讐されそうなので、

一旦研究所から離れて、わざと管理局に見つかるようにし、呼び寄せる。

そして、少し応戦し研究所の方に向かって逃走。

「そろそろね」

「何か企んでいるぞ！総員警戒せよ」

「了解！」

私は研究所が近くなつたら、いつものように煙玉を用意する。

「お疲れ様」

そう言って、煙玉を投げ、目くらましをする。

「くそ、総員注意しろ」

管理局は私の攻撃を警戒するが、私は既に逃げて、隠れていた。

「なっ！いない！辺りを探せ！転移魔法をした形跡はない！隠れているはずだ！」

そう隊長みたいな人が指示を出していたので、研究所の方角で音をたてる。

「あっちだ！」

バカみたいに引っかけり、研究所の方へ飛んでいく。

「さ、これであの研究所は終わりよね。あれを隠蔽されたら、さすがに本気で管理局を潰しにいかなきゃならないけど……」

そう言って、私は本拠地である、アルハザードに戻る。

アルハザードに戻ると、

「祐依、この間の事件の報告書が上に提出されたので、ハッキングして見られるようにしておきましたよ」

「ありがとう。ルイン」

どうやら、この間のジュエルシードをめぐる事件の報告がやっとできたらしい。

それを見てみると…

「ねえ、ルイン念の為に聞くけど、これって間違いないわよね？」

「ええ。そのようになっていましたけど」

私の策に気持ちがいいほど嵌っている。

あの事件はNM事件ノア・ミナツキと称され、黒幕がキチンと私になっているし、プレシア一家もたいした罪にはならなかったようだし、プレシアの汚名もはれたようだ。

どうやら、管理局の委託魔導師となって、私を追うつもりらしい。今はまだ管理局に監視されているようだが、直にアースラの一員として働くらしい。

「うーん…追ってくるのは予想出来たけど、まさか管理局側になるとはね…」

正直言って、個人として会つのはまだよかったが、管理局に所属しているとメンドクサイ。

『マスター、これから一体どうするのですか？』

「どうしよっかな」

別に管理局程度に捕まるほどではないので、どうでもいいが…

「ん？あ、今日借りてた本の返却日だ。ルインちょっと本の返却に行ってくるね」

「わかりました。お氣をつけて」

地球の海鳴市にある図書館にやって来て、以前借りていた本の返却を済ます。

「何かないかな」

大体の本を読んでしまっていたので、ふらふらと歩いていると、

「ん？もうチヨイ」

車いすの女の子が、少し高いとこの本をとろうと懸命に手を伸ばしていた。

何故周りの人は手を貸そうとしないのだろうか？

「大丈夫？とつてあげようか？」

「え？あの、いいんですか？」

「困っている人を助けるのは普通じゃない？」

「うれしいけど、普通はなかなかそんなんできへんよ」

「そう？まあとにかく、どれがとりたいの？」

「えと、あの赤いカバーの本で」

「これ？」

本をとつて渡してあげる。

「まだ何か読みたい本はあるかしら？ついでだからとつてあげるわ
よ」

「いいんか？じゃあ、お願いします。私車いすやから高いとこの本
が読めへんかったから、ちょっと多いけど」

「いいわよ。で、どの本？」

その後、女の子の希望の本をとつてあげて、借りるところまで運んで

あげた。

「おおきに。私は八神はやてです」

「私は相沢祐依よ」

「祐依さんですか。今日はおおきに」

「これぐらいなんともないわ。あとは帰るだけだろうけど、気を付けてね」

「大丈夫だよ。迎えが来とるし」

「あら、そうなの？」

「あ、噂をすれば、おゝいシャル」

はやてがこっちに向かっていて、金髪の女性がこちらを向いた。

- !

私はあることに気づくが表情などには何も出さない。

「はやてちゃん。本は借りれた？」

「うん。祐依さんに手伝ってもらって、読みたい本が借りられたんや。祐依さん、この人は私と一緒に住んどる、親戚のシャルや」

「初めまして、相沢祐依と申します」

「こちらこそ初めまして、シャルと言います。はやてちゃんを手伝ってくれてありがとうございます」

「いえいえ、困っている人を助けただけですから。お気になさらず。つと、そろそろ失礼しますね。買い物とがありますし、また縁があったら会いましょう」

「はい。では、また」

「祐依さん、今日はありがとうな」

「ふふ。いいわよ。それじゃあね、はやてちゃん、シャルさん」

そうして、二人と別れ、アルハザードに戻る。

ルインの下を訪れ、

「ルイン！今日偶然だけに見つけたわ。夜天の魔導書のマスターを」

「本当ですか？」

「ええ。けど、どうやら、蒐集はしていないようだったわ。マスターの意思なのかはわからないけど、守護騎士とマスターはとても仲がよさそうに見えたわ」

「そうですか…」

「とりあえず、静観をするわね。悪いけど、マスターの八神はやてのことを調べてくれないかしら？」

「構いませんが…？」

「守護騎士たちが起動しているということは、夜天の魔導書…いえ、闇の書のことを聞いているはず…だけど、彼女はともに暮らすことを望んだ。そんな子のことが気になったのよ」

「わかりました」

「じゃあ、お願いね」

そんな初夏のことだった。

27話（後書き）

お便り待ってます。

28話

side 祐依

夜天の魔導書いや、闇の書のマスターと偶然知り合って、早数週間。その後も、幾度となく図書館などで遭遇し、話したりするうちに、仲良くなっていた。今日は、はやてに家に招待された。はやての家族を紹介したいらしい。

「ここね」

教えてもらっていた、住所を頼りに家にたどり着くが…

「警戒しすぎでしょ…」

思わずそう呟く。

はやての家と思われる建物のまわりに結界が張ってあった。

しかも、巧妙に隠蔽されていて、並みの者なら気づけないだろう。

「まあ、とにかく呼び鈴を鳴らしますか」

・ピンポーン

「はい、どちらさまですか？」

「はやてちゃん？祐依よ。遊びに来たわよ」

（因みに、今はノア・ミナツキと行動している時と同様十七歳の肉体年齢です。）

「あ、祐依さん。ちょっと待ってて、すぐに開けるから。シャル、お願い」

「はい」

そんな風に、インターホンの向こう側で話しているのが聞こえ、すぐに、玄関が開いた。

「いらっしゃい。こちらにどうぞ」

以前に知り合ったシャルさんが招き入れてくれた。

「邪魔します」

リビングに案内されると、そこには、

車いすに乗ったはやてとピンク色の髪をした二十歳ぐらいの女性と、赤い髪をした十歳ぐらいの女の子、そしてその女の子に寄りかかられている蒼い犬…いや、狼か？が、いた。

「はやてちゃん。久しぶり」

「ようこそ。じゃあさっそく私の家族の紹介するな。まず、シグナム」

「シグナムだ」

「で、こっちがヴィータ」

「ふんっ！」

「こら！ちゃんとあいさつせな！」

「ヴィータだ」

「この子がザフィーラ」

・コク

そう紹介される。

「じゃあ、私も。相沢祐依です。はやてちゃんとは図書館で偶然知り合いました。それから、色々と仲良くしてます。今日はお招きありがとうございます。あ、これお土産です」

そう言つて、来る途中で買つてきた翠屋のシュークリームを私の分を入れて、六人分入った箱を机に置く。

「これ、翠屋っていうお店の人気商品なんですよ。ほぼ毎回売り切れになるんですよ」

「そうなん？よく手に入つたなあ」

「常連で、お店の人とは良く知つた中だから。まあ、とりあえず、食べてみて」

その後、おしゃべりなどをして、警戒心を解いた。

その中で、ヴィータに特に懐かれた。

シグナムには武術をしていると言つたら、今度、模擬戦を申し込まれた。

そんな感じで八神家で過ごし、暗くなってきたところで、帰ることに。

「じゃあ、暗くなってきたし、そろそろ失礼するわ」

「そうなん？晩御飯くらい家で食べてつてもええのに」

「ありがと。でも、家でももう準備してるから。気持ちだけでも受け取っておくわ。また今度招待してね」

「うーん、そんななら仕方ないなあ。また今度な」

「ええ、また」

そうして、別れを告げて去る。

side シグナム

主が眠りについた頃に、

「さて、皆、相沢をどう見る？」

「いい人だと思うわよ。はやてちゃんを図書館で何度も手助けしてくれたりしたそうだし、私の結界にも何も反応しなかったし」

「そうだな。あたしもいい奴だと思うぞ。最初は警戒してたけど、途中から全くするのを忘れるくらいなんかいい奴だと思ったぞ」

「私もふたりと同じく思う。ただ気がかりなのは、私を含めた数のお土産があつたことだが…」

「あ、それははやてちゃんがファイラのことを以前に名前だけを紹介してたから、一緒に住んでいる人数に含めてたんじゃないかな

「？」

「そうだいいが……」

「ふむ、みんなの意見をまとめると、相沢は今現在、警戒するには及ばないが、もしもの為に注意しておく程度か？」

「それでいいんじゃないかしら？それにシグナムだって、祐依さんが武術をやってるって知ったら、すぐに盛り上がって、模擬戦を申し込んでいたじゃない」

「うっ、それは……」

「シグナムの悪い癖だな。そのバトルマニアは」

「っザフィーラ！」

私は凶星をつかれ慌ててしまう。

side 祐依

アルハザードに戻り、夕食の白菜と豚肉の重ね鍋を食べていると、

「祐依、どうでした？」

ルインが話かけてきた。

「そうね…思った通り蒐集は一切してなかったわ。けど、このままだと、いつか闇の書のマスターは倒れるわね。そうしたら、マスターを慕っている守護騎士たちのことだから、蒐集を始めると思うわ。蒐集を始めたら、私も手伝うわ。それまで、皆に束の間の幸せを…」

「…そうですか」

「ごめんなさいね。でも、今までのことを考えると、束の間の幸せでもいいから、幸せを味わってもらいたいから…けど、絶対に助けるわよ。彼らも、そしてあなたのことも」

28話（後書き）

33、333アクセス 5、555ユニーク
に到達しました。

読んでくださり、ありがとうございます。

ネタがつかけているので、もしかしたら次回にはA・S編に突入
するかもしれません。

お便りまっています。

29話

side 祐依

はやての家を訪れてから、早数か月、秋も終わり、冬に差し掛かってきました。

色々ありました。

はやてと本についてはなしたり、シグナムとただの試合をしたり、ヴィータ達と遊んだり、シャルに料理を教えたり・・・

管理局の違法研究所を潰したりなど、色々なことがありました。

そのなかで、現闇の書の守護騎士たちと、ノア・ミナツキとして関係を作ったりしました。

く回想く

ヴォルケンリッターたちが、はやての命に背こうとしていた時に、

「主はやて、我らの不義理を、お許してください」

「はい、ちょっと待ってくれる？」

声をかけ、止める。

「！ 何者だっ！」

四人に警戒される。

「ふふ。私は黒き月のノア・ミナツキよ。強いて言うなら、ヒールかしら？」

「どういうことだ？」

「私は、地球の魔術師で、管理局の言う広域次元犯罪者って言う者かしら？」

「広域次元犯罪者だと?!」

こないだのNM事件で、過去最高の賞金首になっていました。

因みに、生け捕りではなく、殺してでもOKだそうで、私を探している人もたくさんいるそうです。

その中にはテストロッサー一家や高町なのなどもいる。

「ええ。とある友の、管理局によって人生を狂わされた人たちを助けた代償ですけどね」

「どうということなの？」

「それは、この春に起きた事件で……ということですよ」

「それで、貴様がどうして我々に接触してきた？」

「それはですね、とある命を助けてくれた人から、あなた達への協力を頼まれたからですよ。その人に関する詳細は言えませんが」

「……広域次元犯罪者になった原因は友のためと言ったな。今回貴様は何のために行動している？」

「あなた方がこれから行うことに対して、少しでも罪がかからないようにするため。そして恩人に少しでも恩を返すため」

「そうか……貴様の恩人とやらのことはどうしても何も話せないのか？」

「……その人は管理局によって、被害を受け、それ以来、あなた方の事をずっと守りたいと言っていました。全てが終わったら話をしてくれるでしょう。今は、とある事情でこちらに来ることが出来ませんので」

「見返りは何だ？」

「あなた方が幸せになることですよ」

「ふざけんじゃねーよ！そんなんで信用できるかよ！」

「もつともね。私があなたたちの立場だったら、信用しないわね。絶対に。じゃあ、これをあげるわ」

そう言つて、以前に作つた魔石を投げ渡す。

「これは？」

「純粋な魔力の籠つた石ですよ。私が数年かかつて作つた物（のほんの一部）ですよ。魔術師の私しか知らない、管理局では作れない物で、結構価値がありますよ。それをあなた方にあげますよ。それから蒐集してもいいし、売り払つて、お金にしてもいい」

「シャマル、調べてみてくれ」

「わかつたわ」

シグナムがシャマルに魔石を渡す。

「これはすごいわ。たぶんだけど、数十ページに値する魔力が籠つてるわ。確かに、大抵の人じゃ作れないわ」

「そうか。それから蒐集しておいてくれ」

「わかつたわ」

「ノア、お前を信じよう。皆、いいか？」

「将がそう言うなら構わない」

「裏切ったら、私が潰してやるからな」

「そういうわけだ、手を貸してくれ」

「こちらこそお願いね」

そうして、ヴォルケンリッターたちと協力体制ができました。

29話（後書き）

お便りまっています。

もうすぐ、A・S編に本格的に入ります。

30話

side シグナム

我らが敬愛する主はやて。

我々の心を溶かしてくれた。

希望を与えてくれた主。

そんな主が突然の発作で倒れ、この夢のような日々が終わりを告げた。

その原因は闇の書。

闇の書が、主の身体を蝕み、今は足の麻痺だが、いずれ麻痺が心臓まで及んでしまうだろうと、主の主治医による診断がでた。

主の平和を望む、誓い。

だが、このままでは、主が…

誓いを破ることを…

「主はやて、我らの不義理を、お許しください」

そんな時だった。

「はい、ちょっと待ってくれる？」

黒い外套を身に纏い、仮面をつけた奴が我らの前に突然現れた。

私は警戒し、問う。

「何者だ！」

「ふふ。私は黒き月のノア・ミナツキよ。強いて言うなら、ヒール（悪役）かしら？」

「どういうことだ？」

「私は、地球の魔術師で、管理局の言う広域次元犯罪者って言う者かしら？」

「広域次元犯罪者だと?!」

何故広域次元犯罪者が我らの前に姿を現す？
闇の書が目的か？

その後、ノア・ミナツキの話を聞き、魔石と言うものを渡される。
シャマルに調べさせると、相当なものだとわかり、警戒レベルを少し下げる。

さらに話を聞くと、我らを思う者からのお願いらしい。

一体誰だ？

前の主の知り合いか？

っ！

前の主は最期はどうなった？

何故思い出せない…

そもそも、今までの主は…

そんな考えをしながらも、ノアに協力を頼む。

side 祐依

今、守護騎士たちと打ち合わせをしています。

「じゃあ、まず、一般の管理局員や希少種の生物はなるべく狙わないで欲しいんだけど」

「それはどうしてだ？一体何から蒐集するんだ？」

「ん？一般の管理局員を襲うと後々面倒くさいから。希少種も同じで。まあ、主がもう危ないと思ったら、もう別だけど。専ら、管理局の言う管理外世界にある違法研究所を狙うわよ」

「そんなところがあるのか？そもそも、そちらの方が面倒ではないか？」

「うーん、目的がただ書の完成だけなら誰彼構わず襲えばいいんだけど、極力罪を重くしないようにと頼まれてるから、奴らの闇を潰しつつ、証拠も集めて、そこにいる魔導師から蒐集すれだよ」

「それで、どうなるんだ？」

「えー、管理局の違法研究をしている研究所なら、管理局の上層部しか知らないはずだから、おいそれと、一般の局員を派遣できない。何故なら、助けを呼べば、当然、管理局員がやってくる。けどそこにあるのは違法研究。呼べば助かるかも知れないけど、間違いなく捕まる。その研究をさせている上層部が助けてくれるかもしれないけど、おそらく、見捨てられる。だから呼ぶに呼べない。捕まれば最悪死刑。でも、収集されても死にはしないでしょ？」

「ええ、悪くても少しの間魔法が使えなくなるぐらいかしら」

「だから、救援を求められない。誰でも命は惜しいものだから。違法研究所を襲えば、敵の増援は普通の管理局員を襲うよりも遥かに少なく済む。さらに、違法研究の証拠も握っておくから、大々的に発表も出来ない。違法研究も辞めさせられる。管理局の闇の部分も潰していける。どう？この作戦？」

私は自信満々に提案するが…

「なんだか、悪役つつうより、もはや事件の首謀者とか悪の親玉じゃねえか？」

「ええ、私もそう思うわ」

「ああ、私もそう思う」

「同じく」

「何よ、ただ、蒐集を確実にするのと、違法研究を辞めさせて、その上管理局の上層部の弱みを握るだけじゃない？」

「良いことしてるんだけど、確実に悪だな」

「黒いわね」

「黒だな」

「真っ黒だな」

「ぶー。まあいいわ。とりあえず今から行く？今現在、八か所ぐらい場所はわれてるけど」

「そうだな、一先ず、今日は一か所に相手の戦力調査を兼ねて、全員で行く。相手次第で、次回から別れて行動する」

「じゃあ、行きましようか」

そうして、蒐集が始まった。

30話（後書き）

次回にA・S編に出来たら入りたいと思います。

お便りまっています。

31話

side 祐依

管理局の違法研究所を襲って、蒐集し、違法の証拠を握る。

「ね。増援来なかったでしょ？」

「ああ、お前の言うとおりだったな。一先ず、この先ノアの作戦通りに行こう」

「そうだな。で、次から、どうすんだ？全員じゃなくても十分じゃねえか？」

「そうね。私もそう思うわ。ノアさん、どうします？」

「んー、今回ぐらいの規模だったら、私を入れて、三人で十分ね。そしたら、他の人は主のところ、待機兼一緒にいる。で、いいんじゃないかしら？」

「ふむ…それでいいが、ノア、お前はどんな戦い方をするんだ？今回は戦わずに敵の無力化に専念していたが…」

「そうねえ…剣類を使った近距離戦。武器を使わない格闘術による近距離戦。銃類・弓・ナイフとかの武器を使う中・遠距離戦。魔術とかでの中・遠距離戦。それと、魔術とかの後方支援。大抵のことはできるわよ。」

例えば、真正面から戦ったり、遊撃として攪乱させたり、潜入したりして情報収集したり、戦線には完全に出ないで、支援に徹したり・

・
」

「…お前一人で十分なんじゃねえか？」

「そうだな…」

「うん…やれるかしら？管理局潰し……」

言われてみれば、黒き月でやれば管理局ぐらい潰せそう気がする。

「無茶苦茶だな…」

「じゃあ、今日はこれまでにして、明日以降に残りの違法研究所に行きましょうか」

「別に今からでも構わないぞ」

「ごめんね。一応下準備が必要だから。敵の戦力を測ったり、証拠を握ったりとかあるから、明日までに終わらせるから、今日は主とゆっくり過ごして、明日以降に備えてもらえないかしら？」

「それなら、仕方があるまい。何時頃に終わるんだ？」

「そうね…明日の朝には間に合わせるわ。九時過ぎに連絡するわ」

「わかった。よろしく頼む」

「まかせて！」

守護騎士たちと別れ、明日以降のために準備を始める。

違法研究所の襲撃、魔力の蒐集を繰り返すうちに十二月になった。

さすがに管理局側も警戒するようになってきたのか、若干警備が厚いとも出てきた。

魔導師が多いほど、蒐集できるので都合がいいのだが、管理局の魔導師の質にうんざりしてきた。

「今回で2 / 3が集まったけど、管理局の魔導師ってどうしてこんなに質が悪いのかしら？ 思ったより集まらないわねえ…」

「そうだな、最近は数が増えてきたから、以前よりかは蒐集できるが、確かに質が低いな」

「何か他に考える必要があるかしら…？」

「そうね…このままだと、はやてちゃんは……」

「確かに、このままだと危なくなるかもしれないから、蒐集の対象を広げるべきかしら？」

「うむ。次回の蒐集の量で検討するべきだな」

「そうでしょうか」

「ええ」

はやての期限が着々と近づいてくる。
タイムリミット

31話（後書き）

なんか、A・S編に入っているような、いないような微妙な話が
続いている…

お便り、待ってます。

32話（前書き）

この話が始まる時点で、既にテストロッサファミリーの判決が出ており、囑託魔導師として、アースラにいます。

32話

side other

ノアと守護騎士の蒐集が始まって、いくらかの時間が過ぎた頃。

時空管理局のアースラでは、リンディ・ハラウンとクロノ・ハラウン、そしてプレシア・テストロッサと使い魔のリニスがいた。

艦長室でとある話し合いが行われていた。

「艦長、なんでしょうか？」

「クロノ、闇の書の稼働が確認されたわ」

「なっ！？本当ですか？母さん！？」

「ええ、最近よく見つかっている管理外世界にある違法研究所が襲撃されている事件で、襲われた研究所にいた研究者や魔導師の魔力が奪われているのよ。被害者に死者はいないのが幸いだけど、話を聞ける人からの証言で、闇の書の存在が確認されたのよ」

「闇の書って、たしか一級搜索指定のロストログアだったわよね？」

「ええ、詳細のデータは後で、纏めてデバイスに送ります」

「お願いするわ」

「それで、犯人たちの詳細はわからないのかしら？」

「はい。監視カメラなどは全て破壊され、何もデータはない上に、襲われた人たちに、忘却系の魔法を使われているらしく、誰も解けないんです。なので、どんな魔法を使うのか、どんな武器なのか、どんな戦い方をするのか全くわからないんです」

「…そう」

「共通点が、ターゲットが違法研究所だけ襲い、その研究所の違法研究の証拠が全て握られているんです。ですから、違法研究所を監視しておけば見つかるのですが、そもそも違法研究所の所在は隠されているもので…」

「じゃあ、どうして、襲撃後、見つかっているのかしら？」

「それは、匿名の秘匿回線で管理局に通報が来るんです。管理局側は毎回逆探知などを試みるのですが、まったくわからないんです。おそらく犯人が通報しているのでしょうか…」

「その意図がわからないわね」

「……襲撃された違法研究所の中には、管理局の上層部と繋がりが確認されたものがあるんです。なので、管理局側は大々的に発表できないんです。ですから、このことは他言はしないでほしいのですが」

「わかったけど、どうして、リンディさんは知っているのかしら？」

「私は前回の闇の書の事件に関わっていたので、情報が貰え、その中に謎のロックのかかったデータがあり、ロックを何とか解除して中を見たらこの情報が…」

「内容が内容のだけに上に確認をすることもできないのね。それで、どうするのかしら？」

「……違法研究所の場所が発見できない以上、後手に回るしかありません。我々も違法研究所を探索しますが…」

「簡単には見つからないわよね？」

「ええ、闇の書に関してはどうにかしたいのですが、どうすることもできません。ですから……ノア・ミナツキを第97管理外世界で探索します」

「ノアを搜索するのは私としてはいいけど、理由は？」

「彼女はNM事件以降に何度か確認されているんです。捕まえようとするんですが、当然の如く一度も捕まっていません。ですが、彼女を発見し追跡すると絶対に違法研究所が見つかっているんです」

「それで、彼女に協力を頼みたいわけね？でも、彼女は管理局と敵対してるけどどう説得するのかしら？そもそも、どうやって、彼女に会うの？」

「それは、第97管理外世界で高魔力を出します。彼女は一般人に

魔法関係で巻き込みたくないと言っていたので、おそらくやって来るでしょう」

「一般人を人質にするわけね？」

「貴様、言葉を選べ！」

「クロノ、確かにリニスさんの言う通りよ」

「ぐっ」

「それで、どうやって、協力させる気にいるのかしら？」

「闇の書が完成すれば、たくさんの人々が危険になると」

「要するに脅迫ね？それで、あわよくば、解決後逮捕するのかしら？正義の皆さんは？」

「リニス！」

プレシアがリニスを諷める。

「……それはわかりません。ですが、闇の書は大変危険ですから、そちらの解決を」

「艦長！奴は広域次元犯罪者です！犯罪者の手を借りるなんて！」

「クロノ、他に手がないのよ。もし、ノアと遭遇しても、最優先は交渉することよ」

「くっ！……わかりました」

「では、我々、アースラは第97管理外世界に向かうわよ」

32話（後書き）

次こそ、入りたいと思います。

お便り、待ってます。

33話

side 祐依

うーん、やっぱり、管理局の魔導師は質が悪すぎるわね。

このままだと、まずいかも…

そんな訳で、今日は違法研究所の襲撃の帰りに、近くの魔獣を狩ってます。

「うーん、リアルモンハンをやるとは思ってもみなかったわ」

「あたしたちはこれがもっぱらメインだったぞ」

「ああ、魔獣から魔力を蒐集していたからな。魔力を持った人を狙うより、魔獣の方が数が多い上に、組織を相手にするより楽だからな」

「でも、違法研究所での蒐集は魔獣よりも効率的だったわよ」

「そうねー、これからは、対象を増やそうか。違法研究所狩りでもいいんだけど、間に合わなかったら、元も子もないし。メインは研究所で、他の人は魔獣狩りに」

「そうだな、それでやっていこう」

「じゃあ、さつそ…く？ おっ！ここから南南西49キロの地点に龍種発見！行くわよ」

「なんで、そんなとこのことがわかったよ？」

「え？これくらいわからない？」

「いや、普通そこまで遠くのことはわからないだろう」

「そう？ま、いいわ。とりあえず、狩りに行くわよ！」

「思ったよりあっけなかったわね」

そこにいた百年級にとどかとかないかぐらいの結構大型の龍種がいたが、皆であつという間に倒し、蒐集をした。

「殆どお前がやったんだろう！」

「え？だって、予想以上に防御力が低くて…」

「普通、龍種を一撃で倒せねえよ！」

「まあいいじゃない。結構な魔力が蒐集できたんだから」

「お前の強さの上限は一体どこなんだ？」

「まあまあ、話は全部終わったらゆっくりしよ。次行くよ！」

そんな感じで、蒐集の対象を広げ、魔力を集めて行ったが、ある日。

ヴィータが海鳴市である少女に狙いをつける。

33話（後書き）

短いですが、ここで。

お便り待ってます。

34話

sideヴィータ

とうとう、蒐集の対象を増やす許可がノアから出た。

ん？そう言えば、なんでノアがトップになってんだ？

まあ、いいか。

「ヴィータ」

「なんだ？ザフィーラ」

「魔導師を襲ってもいいのか？」

「いいだろ、別に。ノアも対象を増やすことに賛成してんだから。それにこの辺りにでつけえ魔力を持ってる奴がいるんだ。そいつから魔力を蒐集できれば、完成に大分近づくんだ」

「わかった」

ザフィーラを説き伏せ、捜す。

「見つけた！」

ターゲットを発見し、結界で閉じ込める。

side 祐依

ヴィータとザフィーラが索敵をしている頃。

「やっと見つけた。ノア・ミナツキ。闇の書から手を引け」

守護騎士たちと打ち合わせを終え、守護騎士たちが転移した後、守護騎士たちの転移の際の魔力を追って来たのか、仮面をつけた男がやって来た。

そして、結界を張られる。

「何故かしら？」

「わざわざ、話すまでも？いいから黙って、我々の言うことを聞け」

「御生憎様。私たち、黒き月は誰の指図も受けないわ。特に私は【黒猫】って言われるくらいだから。誰の言うことも聞かないわ。逆に不幸を届けてあげるわ」

挑発するようにそう言って、‘倉庫’からmisfortuneを取り出し、銃口を向ける。

「交渉決裂だな」

「交渉？そんなもの初めからなかったじゃない？」

「ふん。いいだろう力づくで言うことを聞かせてやる」

「そう。なら、あなたに不幸を届けに来たぜ！」

そう男口調で告げる。

仮面の男が殴りかってくる。

「はあ！」

「遅い、遅い」

攻撃を避け、銃身の下部にある縦方向に三角形状に大きく伸びているところで、すれ違いざまに後頭部を殴る。

「ぐう」

「そら、逃げないと」

私は右手でmisfortuneを仮面の男に向けながら、左手で‘倉庫’から出したhappinessを後ろに向かって、振り返らずに発砲する。

・ドン

「ぐあ」

happinessから計二発撃つ。

一発は魔力弾。

もう一発は実弾。

後ろにいたもう一人の仮面の男に命中する。

魔力弾の方は障壁で防ぐが、もう一発の弾にとある術式を施した実弾が右肩に被弾する。

「ぐつ、何時から気づいていた？」

撃たれた仮面の男の方へ、殴られた方の仮面の男が近寄りながら問うてくる。

「そんなの現れた時からよ」

「く、質量兵器は禁止されているはずだ！」

「それこそ御生憎様。私は魔術師。あなたたち魔導師とは関係ないのよ。魔導師がなんと言おうと関係ないわ。それに正体を隠している猫の話なんかの話なんて聞く耳なんか持ってないのよ」

「貴様?!」

二丁の銃を向けながら告げる。

「それだけなら、もうお終いにしましょ。＜オールザウェイ！＞」

二人に向けて銃口から無数の氷の弾丸が放たれる。

「ぐあっ」

二人に無数の弾幕が当たる。

「おまけよ
バースト・ブレード
炸裂弾」

以前に作った炸裂弾を二人に向けて放つ。
バースト・ブレード

「ぐああ」

二人に命中し、爆発する。

煙が晴れると、転移して逃げていた。

「ちっ、まあいいわ。次でやればいいし」

『マスター、二人の転移先解析終了しましたが』

「ありがと、ゼロ。でも今日はいいわ。忠告はしたから、また邪魔してきたら容赦なく仕留めるから。それに大体どこの差し金かわかるから」

『わかりました』

結界を破壊し、外に出てみると、ヴィータが結界を張ろうとしていたところだった。

34話（後書き）

ゼロのセリフを久しぶりに出した気が・・・

お便り、待ってます。

35話

side 祐依

仮面の男たちを撃退しヴィータとザフィーラが結界を張り、知っている魔力の持ち主を閉じ込めようとしていた。

「あれって…まあ、様子を見ますか」

そう言つて、結界を壊さないようにしながら中へと侵入する。

ちよつと離れた所から観戦していると、

「あ、やっぱり、なのはだった…まあ、いいかしら。私は管理局とは敵対してるし、今はヴィータたちに協力してるから。なのはなら、無駄に魔力があるからたくさん魔力がたまるでしょ」

なのはに向かって、攻撃を仕掛けるヴィータ。

なのははヴィータに向かって、目的を尋ねようとしているが、

「バカかしら？」

普通、目的を初っ端からばらす奴がいるのか？
いるならば、見てみたいものだ。

最初はなのはが優勢だったが、なのはがヴィータの帽子を吹き飛ばすと、ヴィータが怒り、攻勢に出る。

「あら、カートリッジを使うのね。そこまでの相手かしら？まあ、私は帽子の回収に行きましょうか。あの帽子、大事にしてたし」

私は帽子を回収し、直しながら様子を見てみると、

案の定カートリッジを使ったヴィータとグラーフアイゼンが圧倒していた。

ヴィータの一撃が、なのはのバリアを貫き、レイジングハートにまでダメージを与える。

「これで、決まりね」

そう言つて、近づこうとした時、

ヴィータの止めの一撃を受け止める影が乱入してきた。

「！ あれは！」

ヴィータの一撃を止めたのはフェイト・テストロッサだった。

ヴィータがフェイトと共に空中戦を繰り広げる中、ユーノがなのはの怪我を治していた。

フェイトにアルフの援護が加わり、ヴィータがバインドで捕まってしまう。

「これはダメね」

私はヴィータの前に姿を現す。

「ノア！」

「ノアさん！？」

私の突然の登場にフェイトとアルフが隙を見せる。

その隙をつこうとしたら、近づいてくる二つの反応を見つけ、今はヴィータへのバインドの破壊にまわる。

「はあ！」

「きゃあ！」

ヴィータの救援にやって来たシグナムの一撃がフェイトを後退させる。

ヴィータへのバインドを破壊し、帽子を渡す。

「ヴィータ、大丈夫か？」

「ああ、サンキュ。シグナム、ノア」

「おまえがケガでもしたら、我らが主も心配する、あまり無茶をするな」

とシグナムがヴィータをたしなめる。

「そうよ。今回はよかったけど、戦いの最中は常に冷静に。でないと、思わぬものに足元をすくわれるわよ」

「うう、わかったよ」

「じゃあ、いきましようか」

「ああ」

フェイト対シグナム、ヴィータ対ユーノ、アルフ対ザフィーラが始まる。

私は…

「見ているんでしょう？管理局員さん」

そう告げると、目の前にモニターが出てくる。

「ノア・ミナツキ。どうしてあなたがそこに？」

「ふふ。人助けですよ。リンディ・ハラOWN提督そしてプレシア・

テストアロツサ囑託魔導師」

「ノア、あなた一体何をしてるのか、わかってるの？」

「ふふ。以前に言っただでしょ？ 私たちは誰の指図も受けない。誰も【黒猫】の私を飼いならすことはできない。私は私の心情に肩入れしているだけだと」

そう言いながら、私は‘倉庫’から苦無を出し、背後に向かって投擲する。

「なっ！？ぐあっ！」

背後に転移してきた、クロノにダメージを与える。

「そんな見え透いた手を通じるとでも思いましたか？ 甘く見られましたね。その代償を彼に支払ってもらいましょうか」

モニターの場所を‘倉庫’から事前に錬成しておいたdemiseを出し、一閃する。

そして、クロノに相対する。

「さあ、やりましょうか」

「くっ！ 今度こそお前を捕まえる」

「ふふ。意気込みだけは十分ね。その意気込みに応えてあげるわ。
？リンク・十六夜咲夜・八雲紫・サニミルク・ロード？」

十六夜咲夜の 時間を操る程度の能力
八雲紫の 境界を操る程度の能力
サニーミルクの 光を屈折させる程度の能力
を共有する。

そして、武器を *demise* を‘倉庫’に戻し、*misfortune* と *happiness* を出し、構える。

「ステインガースナイプ」

「それだけかしら？」

私はクロノの魔法を魔力弾で相殺する。

「今度はこちらから行くわよ」

時を操り、大量の魔力弾を放つ。

その弾を全てスキマに撃ちこむ。

そして、光を屈折させ、スキマと魔力弾を隠す。

スキマの位置を調節し回避不可能な弹幕を形成する。

そして、時を通常に戻し、牽制程度の魔力弾を一発放つ。

「どうした？そっちなぞ、これだけか？」

「いつ、それだけって言ったかしら？」

「何、どういうこ・ぐああ！」

ちゃんと、非殺傷設定にした大量の魔力弾がクロノに襲いかかる。光を屈折させているため、視覚できず、直撃するまで気づけない。セイバーのような直感や周りの空間内を把握する力がなければ躲すことはできない。

もつとも、スキマで調整しているため、ほぼ全方位から同時に迫ってくるので、躲すことは不可能である。魔力弾を消し飛ばすしか、対処ができないのである。

大量の魔力弾を浴びて、気を失うクロノ。

「丁度いいわね」

『シャマル、これから蒐集できる？周りの監視は全部潰してあるから来ても大丈夫よ。それに情報遮断の結界も張ってあるから、転移してきても平気よ』

『わかりました。すぐにそちらに向かいます』

シャマルが到着し、クロノから魔力をギリギリまで蒐集させる。

「はい、これで十分です」

「限界までやった？こいつが先に仕掛けてきたから、正当防衛でたけるけど」

「言われた通り、限界ギリギリまで蒐集しました。他のみんなも終わりそうですから、ヴィータちゃんが初めに倒した子からも蒐集します」

「じゃあ、一緒に転移する？情報を隠すために」

「いえ、大丈夫です。ここからでも旅の鏡を使えば」

「そう。って、なのはが大技仕掛けようとしてる。早いとこやって！あれだと結界が壊される！」

「え？！わかりました」

そうして、なのはの魔力を蒐集している間にクロノをなのはがいた場所の近くに転移させる。

シャルガなのはの魔力を蒐集するが、なのはが最後の力で、スターライトブレイカーを放ち、結界が破壊される。

「ちっ、皆！撤退するわよ！」

守護騎士たちに指示をだし、もしもの為に決めておいた、離脱プラ

ン通りに転移を繰り返し、管理局の追つてを撒く。

35話（後書き）

管理局にノアが存在が明確にばれました。

これにより、管理局と一層敵対します。

お便り待ってます。

36話

sideリンディ

ノア・ミナツキに協力を頼むために、第97管理外世界へ向かうと…

結界が張られており、その中では魔法戦闘が繰り広げられていて、その一人が以前に協力してくれた高町なのはだった。

正体不明の魔導師と戦闘を行っていた、なのはの救援にフェイトが向かい、一度、敵の捕縛に成功するが…

突然、今回の目的だった。

ノア・ミナツキが割って入ってきた。

もしかしたら、助けに来てくれたのかと、淡い期待を抱いたが…

次の瞬間にフェイトちゃんが別の敵に吹き飛ばされ、距離があく。

その後、捕縛したバインドを破壊し、謎の襲撃者を助け出す。

謎の襲撃者たちと会話し、帽子を渡していたところを見ると、ノアが襲撃者たちの仲間であると推測された。

それぞれが、戦闘になると、

ノア・ミナツキが私たちに声をかけてきた。

私は答えるためにモニターを出す。

暫しの間、いくらかの問答をし気を逸らそうとしたが…

クロノの奇襲が読まれ、逆に返り討ちに遭い、そのまま戦闘になる。

映像が途切れ、戻った時には、なのはちゃんが結界を破るところだった。

その横に気絶したクロノが倒れていた。

逃亡する襲撃者の一人が、手にしていたものがモニターに映る。

「あれは、闇の書!」

「何ですって?」

隣にいたプレシアさんが驚いた声を出す。

「間違いありません。あれは闇の書です」

「じゃあ、ノアは闇の書の関係者だったの?」

「おそらく…今の状況ではそう考えるしかない」と

「まさか…」

「詳しい話し合いはみんな、特になのはちゃんとクロノを救護室に運んでからしましょう」

そう言って、部下に指示を出す。

sideプレシア

なのはちゃんと執務官が目覚まし、会議室に集まり、話し合いが始まる。

まずは、闇の書についての話になる。

大体の闇の書に関する情報は事前に目を通していたので、特に問題がなかったが、その後の襲撃者改め、闇の書の守護騎士たちの使っていた魔法についての話になり、そこは研究者の私が補足しながら説明した。

最後にノア・ミナツキについての話になった。

執務官などの一部の者を除いて、明らかな戸惑いがあった。

「艦長！ノア・ミナツキは前回のNM事件同様、今回の件もあいつが何かやっているに違いありません」

「ええ、私もあの時に割って入った時は止めて来てくれたのかと淡い期待を持ったけど、その後の行動で崩れ去ったわ。間違いなく、彼女は敵に違いないわね」

「あいつがいるなら、本局に応援の要請をするべきです！」

「そうね…エイミィ、要請をしておいてくれる？」

「はい」

「彼女が関与していたなら、違法研究所の襲撃も納得できるわね。以前にもたった数日で二か所の所在を発見し、覆せない証拠まで集めていた彼女の情報収集能力なら、違法研究所の発見し、証拠を握ったうえで、魔力の蒐集をしてもおかしくないわね」

「奴は一体どこからそんな情報を得ているんだ？」

管理局員はあれこれと言っているが、私にはあることが頭から離れなかった。

闇の書事件を解決するよう命令が上から出たので、アースラスターの私たちと、また現地協力者のなのはちゃんが事件にあたることになった。

どうやら、アースラは何かをするために整備中で、第97管理外世界に転移するのに数十分のタイムラグがあるため、なのはちゃんの家
の近くに拠点を置くようだ。

なのはちゃんとフェイトとアリシアが喜んでいた。

私は会議の後、リニスと二人で部屋で話しをするために呼んでいた。

「プレシア、話とはなんですか？」

「ノアのことよ。リニスもアリシアと同じように今までの事知っている
んでしょ？」

「はい、アリシアと同じように、ずっとあなた方を見守っていました
から」

「ノアと交信した時に彼女は私の時と同じように人助けって言った
のよ。彼女はまた、誰かの為にしようとしているんじゃないかしら
？」

「そうですね。私もそう思います。プレシアの罪を被っただけでな
く、汚名まではらした。彼女がただ単に悪意を持って、協力してい
ることは絶対にありえません」

「と言うことは、闇の書のマスターに何かあるのかしら？」

「おそらく、そうでしょう」

「ノアと何とか話し合いが出来ないかしら？このままだと、何も恩が返せないどころか、彼女がまた罪を背負っていくのを見ているしかない… ノアはアルハザードが確かにあると言った。そこが拠点の一つだと…アルハザードに行くことができれば、会えるかもしれないけど…」

「アルハザードに行く方法は全くの不明。以前の計画をしていた手段では周りに被害があるだけで、絶対にたどり着くことはできないと」

「ええ。それに、もし行けたとしても、管理局に報告することはできない。間違いなく、アルハザードの技術を悪用する輩が出てくる」

「プレシア。幸い、私たちは闇の書を追えと命令を受けます。ノアが闇の書に関与しているなら、おそらく戦場でしようが彼女と会う可能性があります。そこで、話を聞くチャンスがあります」

「そうね。まだ、終わっていないのだから、チャンスはあるわね」

「ええ、そのためにも、頑張っていきましょう」

そうして、リニスとの話し合いを終え、新しい、拠点に移る準備をする。

36話（後書き）

そんな訳で、プレシアとリニスはノアのことを信じてます。
何か理由があるのだろうか。

お便り待ってます。

37話

side 祐依

離脱した後、守護騎士たちがはやての家に戻る前に声をかけてくる。

「ノア。あたしが倒した、白いのと助けに来た黒いのはお前を知り合いだったのか？」

「どうして？」

「あたしが捕まった時に割って入ってきたお前の姿を見た時に驚いてたし、何より名前を呼んでたじゃねーか」

「そう言えば、そうね。うーん…一言で言えば、敵ね。私は広域次元犯罪者で、彼女らは管理局」

「ノアさん。それは以前におっしゃってた、NM事件のことですか？」

「その通りよ。シャマルさん。以前に話した通りだけど付け足すなら、最後に私たちと敵対して戦ったのが彼女らなのよ」

「じゃあ、あの金髪の子のお母さんが、ノアさんが助けた…」

「そうよ」

「お前、助けた相手に戦えんのか？」

「あらヴィータ、心配してくれるの？」

「バツ 違えよ。足手まといが増えんじゃねーかって事だ！」

ヴィータが照れを隠すように言う。

「その答えなら問題なしよ。昨日の敵は今日の友ってよく言うけど、反対に、昨日の友は今日の仇って言うこともあるし。昨日は背中を預けて戦った人が今日は互いに殺し合うことだってあるんだから」

「そうか… お前にそんな過去が」

「あ、最後のは例えよ。今回は。あの管理局員たちなんかには背中を預けたことはないから」

「違うのかよ！… って、今回ってことは実際にあったのか？」

「裏に生きてればそんなことしょっちゅうあるでしょ？まあ、私が仇側が多かったけど…」

「いや、我々は、この四人とマスターだけだったな。共に戦うのはノア、お前が初めてだ」

「そうなの？私は私の心情に肩入れしているだけだから。昔、とある仕事を依頼されて、引き受けてその仕事の途中で依頼主に関する悪い情報を見つけたら、そのことを知った依頼主が私を金で買収しようとしてきて、断ったら、手のひらを返すように、そっから殺し屋との追いかっこよ。まあ、全員返り討ちにしてあげて、逆に不幸を依頼主に届けてあげたわ。それから、私の異名に【黒猫】って言うのが増えたのよ。猫のように飼いならすことはできない」さ

らに目をつけられると、‘不幸’を届けにやって来るから。不幸を届ける【黒猫】ってね」

「お前一体何者なんだよ？」

「そうねえ。魔術師、魔法使い、魔導師、錬金術師、．．．e t
c」

「いや、そう言うことじゃなくて…」

「冗談よ。私は私の心情に肩入れして動く、不幸の届け屋…かしら？」

「でも、ノアさんはNM事件では庇ったって」

「そうね。そういう時は悪役^{ヒール}って言ってるわね」

「ふむ、要するにノアは自分の思うところで行動しているのだな？」

「そんなところかしら？今はあなたたちとあなたたちのマスターに協力するために行動しているわ。借りた恩は返さなくちゃいけないから」

「そうか…まあ、管理局に完全にバレてしまったな。これから大変になるだろうが、よろしく頼む」

「ええ、任して。絶対に助けるわ。」

そうして、守護騎士たちは帰って行った。

sideプレシア

引越しが無事に終わり、サプライズなどが多々あったけど、夜になり今はノアへの対策会議をしている。

「それでは、今回はノア・ミナツキへの戦闘での対策についてよ。彼女を説得することはまず不可能だから、倒すしかないのよ」

「皆の知っているあいつの情報を出して欲しい」

「はい」

なのはちゃんが手を挙げる。

「私とユーノ君が初めて会った時には、狙撃銃みたいな物で、魔力弾を撃ってました。その次は、両手で変わった形の銃でした。魔力弾をやっぱり撃ってました」

「三回目に会った時は、何も持たずに空を飛び、そして初めて聞く炎系の魔法を使っていました」

なのはちゃんに続き、ユーノ君が付け足す。

「温泉のところであたしが初めて会った時は一瞬目を離しただけで、魔力の反応を一切残してなかったから、転移とかの魔法じゃないと思うけど、消えていた。近くの気配を探ってもわからなかった」

今度はアルフが発言する。

「私となのはちゃんがジュエルシードの前で戦った時にジュエルシードが暴走して、私が素手で無理やり封印をしようとしたら、突然目の前に現れて、あつという間に封印してくれた。その時は魔力が周りに溢れてたから、転移かどうかはわからなかったです」

今度はフェイトが告げる。

「それは、私たちが観測していたけど、あの時は、なのはちゃんとユーノ君、フェイトちゃんにアルフさんしか観測されていなかったわ。魔力の計測器に反応しないどころか、映像にも映ってなかったわ。後で話を聞いて、初めてその時にノアがいたことを知ったわ」

リンディさんが付け足す。

「私が初めて会った時は、部屋の扉を開けられるまで、時の庭園に侵入されたことにさえ気づけなかったわ。それと、私との最初の戦闘の時は片刃の剣を使っていたわ。その片刃の剣で私の魔法を斬られたわ」

私が言うつと。

「斬られた？消されたのではなく？」

「ええ、結果を言えば、消されたで間違いないのだけれど、あの時は間違いなく私の魔法の雷撃が剣に斬られて、魔法が霧散したのよ。それにその剣はノアが何かを呟いたと思ったら、次の瞬間には手に握られていたわ」

「それが、デバイスの可能性は？」

「おそらく、ないと思うわ。ノアはデバイスを持っていないはずだし、あれは膨大な魔力を有していたわ。並みのデバイスなら、デバイスがもたないわ。そんなデバイスなら有名になっているはずよ」

「ロストロギアの可能性は？」

「それはわからないわ。でも、ノアは魔導師とは違う、魔術師と言っていたから、彼女たちの技術のものかもしれないわ」

「僕が初めて戦った時は、どこからともなくナイフを取り出し、投擲し、僕の顔すれすれを掠めました。その後の会話から、牽制目的の投擲かと思われます」

「その後の話し合いの後に転移を妨害する結界を張ったのに、煙がはれたらいなくなってたよね。これも魔力反応一切なしで」

クロノ君が続き、その後、エイミィさんが発言する。

「最後のジュエルシードの時に私が無理やり発動させた時には、聞いたこともない氷系の魔法を使って私を助けてくれました」

「なのはとフェイトの決闘の後、ジュエルシードが揃って、回収に言った時に奴が突然現れ、十字架を模した物を投擲してきました。それは、柄以外を魔力で構成しているものでした」

「私の病氣とアリシアを目覚めさせるのに使ったのも、私も知らない魔法だったわ。複雑な魔法陣に膨大な魔力を使ったものだったわ。そう言えば、若返りの薬も持っていたわね」

「時の庭園での戦闘の時には、味方を三人召喚していたわね。本名じゃないと思うけど、セイバー、アーチャー、ランサーと呼んでいたわね。その名の通りな戦闘だったわね」

「セイバーと言われた相手は僕の魔法を無視し突っ込んできて、剣でやられました」

「アーチャーって言われた人は最初は双剣で攻撃してきて、その後、剣を弓で飛ばしてきました」

「ランサーって言われた人は速い槍さばきでした」

「ノアは、どこからともなく、白と黒の銃を取り出してきて戦った。接近戦に持ち込んだけど、簡単に躲かれて、ユーノが銃で殴られて、あたしは銃をつきつきられた」

「この前の戦闘の時には、バインドをあつという間に破壊していたわね。その後、何か金属の…短刀にしては変わった武器を投擲してたわね。その後、片刃の剣をどこからともなく出して、モニターを

破壊されたわね」

「その後は、白と黒の銃で戦闘しました。魔法は魔力弾で相殺され、一発撃たれ、躲した直後にほぼ全方位から攻撃を受けました。その攻撃は全く見えませんでした」

その後、皆の情報をまとめたが…

わかったのが、

- ・狙撃銃、銃、剣、ナイフなどの投擲武器を使う。
- ・どこからかわからないところから武器を出す。
- ・味方が最低三人いる。
- ・私たち、魔導師とは全く異なる魔法を使う。

それと、闇の書のヴォルケンリッターたちと一緒にいたので、デバイスの情報を手に入れている、もしくは、デバイスを手に入れている可能性がある。と。

もし、デバイスを手に入れているなら、魔導師の使う魔法を知られているかもしれない。

結果。

対抗策は見つからず、不安だけが残った。

37話（後書き）

後半は作者のノアが今まで戦闘面で何をやったのかの確認です。

お便りまっています。

38話

side 祐依

管理局にバレてしまったため、多くの世界で、浅く、広く蒐集を行うようになった。

もしものために長居はしないようにした結果だった。

最近、ヴィータが焦ってきて、無茶な攻撃をするようになり、負傷をすることが増えてきた。

怪我をはやてに知られないようにするために、シャルがメインで怪我を治す。

私は、シャルがいない時に行く。

私は敵の無力化、情報隠蔽など戦闘から、裏方まで幅広くやっているため、シャルに任せることが多い。

なのは襲撃から、一週間過ぎたある日、ヴィータとザフィーラがメインで蒐集に出かけ、私はその近場の魔獣を倒していると…

-!

ヴィータとザフィーラがいた場所に突然結界が張られる。

「これは-!」

『マスター、おそらく管理局がお二人を』

「わかってるわ」

ゼロの言うとおりだろう。

『シグナム、シャマル！二人が管理局と戦闘になった！至急二人の援護に』

二人に念話で連絡する。

『わかった！すぐに向かう』

『はい。はやてちゃんを家に送ったら、すぐに向かいます』

シグナムはすぐに来れるようだが、シャマルははやての病院に付き添っていたため、遅れるようだ。

私は離脱の準備のため、結界を張っている管理局員を少しずつ潰していた。

「ノア！ 現状はどうだ？」

数人倒したとこに、シグナムが転移してくる。

「二人が、管理局と交戦中。数は多いけど、敵じゃないと思うわ。けど、前回に倒した二人が、デバイスを改造してきたわ」

「わかった！すぐに突入する」

「シグナムは先に行つて！ 私はシャマルを待つわ。ヴィータとザフィーラの二人を捕獲用結界に閉じ込めるぐらいだから、まだ何かあるかもしれないから、シャマルは攻撃手段がほぼ皆無だからもしもの為にシャマルの護衛をするわ。それと、万が一の為に結界を張っている管理局員をなるべく多く無力化しておくわ」

「了解した」

「待つて、私がシグナムの結界内に突入する穴を開けるわ。カートリッジがもつたいないでしょ？」

「すまない。頼む」

「任して。く黒曜の輝き、快速の槍となり、敵を討つ！ デモンズランス！>」

闇属性の漆黒の槍が結界に炸裂し、結界に穴を開ける。

「シグナム！」

「任せろ！」

開けた穴にシグナムが突入する。

そのすぐ後、開けた穴を修復される。

「どんだけいるのよ…」

私は、中の様子を窺いながらも、外にいる管理局員を無力化していく。

その中には当然、守るための武装局員もいる。

シャルが離れた所に転移してくるが、その時に丁度、武装局員との戦闘中だった為、近寄れなかった。

side other

結界内では、少々劣勢になりつつあり、シャルが結界を破壊しようとするが、シャルの魔法では破壊することが出来ない。

どうするか悩んでいると、背後に…

「戦闘をやめさせろ」

執務官がシャルに向かって、杖を向けていた。

だが、クロノが仮面の男に攻撃される。

「闇の書を使い」

「え？」

仮面の男の言葉にシャルムには戸惑う。

「減ったページはまた増やせば良い。仲間がやられてからでは遅い」

それは、収集した闇の書のページを直接魔力に変換し、それによって砲撃を放つというものだった。

完成前の闇の書は、使用すればその分ページが減ってしまい、完成が遠のく。

それが、シャルムが戸惑っていたのはそれが原因だったのだが…

「そんな必要ないわよ」

s i d e 祐依

周りにいた管理局員を片付け、シャルムの下へ駆けつけると、以前突っかかってきた、仮面の男がいた。

そいつがシャルムに闇の書を使えと言っていたが、

「そんな必要ないわよ」

私はそう割り込む。

「ノア！何故貴様がここにいる！？」

「ふふふ。守るためですよ」

そう言つて、misfortuneを構え、銃口を向ける。

「さあ、あなたに不幸を届けに来たわ」

私は仮面の男に牽制の魔力弾を撃つ。

「くつ、貴様がいるとは…」

仮面の男はそれを、バリアで防ぐが、

「さあ、選びなさい。死ぬか、それとも、もう二度と姿を見せないか」

以前にバリアを貫いた、とある術式を刻み込んだ、銃弾を装填し、銃口を向ける。

「急いでいるの。あんたの相手を相手をしている暇はないのよ」

「くそ！」

引き金を引く前に転移して逃げる。

「ちっ　あとは、執務官ね」

クロノに向かつて、別の銃弾を再装填し銃を構える。

「くそ！　ステインガーブレイド！」

「遅い！」

魔法が完全に発動する前に、杖めがけて、バースト・ブレード炸裂弾を撃つ。

「ぐあっ！」

バースト・ブレード炸裂弾が直撃し、バリアで若干防御するが、デバイスにダメージを与える。

怯んだ隙に接近し、

「輪舞旋風」

勢いをつけた後ろ回し蹴りを放ち、

「裂焰蹴」

気を込め、炎を纏った回し蹴りで吹き飛ばす。

連撃をくらい、気絶しながら、吹っ飛んでいく。

「さあ、さっさと結界を破壊して、離脱するわよ。主が待ってるんですよ？」

「どうして、それを？」

「さあて、ね！　＜光と闇の狭間に消えろ！アンビバレンス！＞」

光の雷が結界に落ちた後、闇の雷が足元から襲い掛かる。

この術で、結界は完全に破壊される。

「さあ、行きなさい。足止めは引き受けたわ」

「ありがとうございます。みんな！引きます」

守護騎士たちが、転移して離脱していく。

追跡を妨害する、結界を張り、追えないようにしつつ、管理局員と向かい合う。

「さあ、時間稼ぎに付き合ってもらわよ」

38話（後書き）

ノアは戦闘をよくしますが、こういった後始末っぽいことをよく引き受けます。

少しでも、幸せな時間を作ってあげたいが為の行動です。

お便り待ってます。

39話

side 祐依

祐依が結界を破壊する前：

結界内では、以前と同じように、
なのはVSヴィータ フェイトVSシグナム の戦いが行われていた。

なのはとフェイトのデバイスにカートリッジシステムを搭載し、大幅な戦力強化してきた二人がやや優勢に戦いをしていた。

二人が一騎打ちで負けるとは思わないが、予想以上の戦力の上昇に二人がやや劣勢になると、シャマルが撤退を提案し、結界が壊された後、離脱する。

守護騎士たちが離脱した後、なのはとフェイトをはじめとする、管理局と敵対する。

「さあ、時間稼ぎに付き合ってもらいましょうか」

「ノアさん！ どうして、こんなことするの？」

なのはが問いかけて来る。

別にわざわざ答える必要はないが、あくまで時間稼ぎなので、答える。

「前にも言ったでしょ。人助けって」

「私たちも協力できないの？ 理由をちゃんと話してくれば、管理局だって、助けてくれるかもしれないの」

「わかってないわね。わざわざ、敵に情報を与えらと思う？ 管理局は私たちの敵なのよ」

「でも！」

「なのはちゃん、少し下がってくれる？」

「プレシアさん」

なのはが、プレシアの言うとおりに下がる。

「何ですか？ プレシア・テストロッサ囑託魔導師」

「あなたは私たちを助けてくれたわよね？」

「何の事かしら？ 私はジュエルシードを全て破壊するために行動した。その結果が、偶然、あなた方の利になっただけよ」

ジュエルシードにまつわる事件の真実を隠すためにそう言う。

「…そうだとしても、私たちはあなたに救われた。今度は私たちがあなたに恩を返したいのよ」

「だったら、私たちに関わらないでもらえるかしら」

私はプレシアの考えを一蹴する。

「それだけなら、もう話すことはないわ。時間も稼げたし。＜神聖なる光よ集え、この名を以ちて我が仇なす敵を討て！　デイヴァインセイバー！＞」

魔力をギリギリまで抑え、魔術を発動する。

広範囲に雷を落とし、目くらましをする。

「もし、引けないのなら、闇の書。いえ、夜天の魔導書の真実について調べなさい」

そう言い残し、離脱する。

ノア・ミナツキに話を聞こうと、そして何かできることはないかと、尋ねるが、一蹴され、魔法を放たれる。

バリアでなんとか防ぐが、魔法が消えるころには既に逃げられていた。

「夜天の魔導書の真実…？」

彼女が言うからには何かあるのだろう。

周りを見回すと、フェイトやアルフ、なのはちゃんや他の局員も大なり小なりダメージがあるようだが、全員無事であった。

「…おかしいわね。あれだけの魔法でこれだけの被害だなんて…」

以前に私が見たフェイトを助けるために使った氷系の魔法や、なのはちゃんが見たという炎系の魔法、そして、先程の結界を破壊した魔法の威力と全然違う。

それに、私とアリシアに使ったあの魔法のことを考えると、その気になれば、私たちを全滅させることなど容易いはずなのに…

今までに襲ったという違法研究所の人たちも怪我をしていますが、全員が生きている。

中には、大規模な魔法を使った形跡があったにも関わらず…まるで、私たちとは全く異なった魔法を使っている、同じような非殺傷設定の魔法のように…

「まさか…」

その後、全員が帰還し、すぐに会議が開かれる。

「奴はもう間違いなく、管理局の敵です」

いつものように、執務官がそう主張している。

今回の戦いで相手のある程度の実力がわかったが、一番の問題のノア・ミナツキのことは依然わからない。

会議が終わりに差し掛かった頃、

「ちょっといいかしら？」

「なにかしら？」

「ノアが去り際に『闇の書。いえ、夜天の魔導書の真実について調べなさい』って言っていたのだけれど、調べてもらえないかしら？」

「夜天の魔導書？　闇の書ではなく？」

「ええ、確かにそう言ったわ。何かあるような気がするのよ」

「…わかりました。調べてみましょう」

そうして、会議が終わった。

39話（後書き）

ノアの目的上、今は人殺しはありません。

なので、デバイスを利用した、非殺傷設定の魔法を使いますが、やるときはそんなものを使わず、やりにいきます。

お便りまっています。

40話

side 祐依

離脱後、魔力を使った転移、能力を使った転移を繰り返し、完全に追っ手を撒く。

『マスター、そこまで情報を与えてよかったのですか？』

「大丈夫でしょ。あそこまで情報をあげて、答えに辿りつかなかったらどうしようもないけど」

そう返し、念のために能力の方の転移でアルハザードに転移する。

「ルイン、もうすぐかもしれないわ」

「そうですか…」

「大丈夫よ。何があろうと、成功させるから」

「ええ、わかりました」

数日、アルハザードで管理局側の情報収集をしていると、

「祐依、シグナムとフェイト、ヴィータとなのはが遭遇し、戦闘になりました」

そうルインに告げられる。

「場所はわかる？」

「はい、両方とも座標はわかってます。シグナムは交戦、ヴィータは闇の書を持っているため、離脱しようとしています」

「わかったわ。まずはヴィータの方へ行くわ」

アルハザードを知られないようにするため、能力を使った転移で駆けつけると、なのはがヴィータに向かって、超遠距離の「ディバインバスター・エクステンション」を放つところだった。

助けに入ろうとしたところ、仮面の男が現れ、防ぐ。

仮面の男がなのはをバインドで拘束したのを確認した後、仮面の男に攻撃を仕掛ける。

「絶影！」

仮面の男の上空に瞬間移動し、威力を上げるために踵落としにする。

「がっ！」

「ノア!？」

「ヴィータ、先に離脱して、行けたらシグナムの応援もしくは主の警護を」

「わかった。シグナムなら大丈夫だろ。だから警護に行くわ」

「ええ」

ヴィータが離脱する。

仮面の男に向かって、*misfortune*を向ける。

「さあ、前に言ったわよね。二度と出てくるなって。あんたの目的は知らないけど、潰すわよ」

とある術式を刻んだ銃弾を装填し、両足に向かって放つ。

「ぐあああ!」

狙いは寸分変わらず、バリアを容易く貫通し、両足を撃ち抜く。

「さよなら」

今度は頭に狙いをつけ、引き金を引こうとすると…

「デイベインシューター!」

「っ! ちっ」

なのはがバインドを破壊し、攻撃が仕掛けてきて、その攻撃を迎撃する。

その隙で、仮面の男は転移し、逃走する。

「どうして、そんなことをするの！」

「忠告を再三無視し、私たちの邪魔をするからよ」

「でも、今は助けようとしてたんだよ！」

「関係ないわね。あいつなしでもどうとでもなったし、それにあいつらは何かを企んでいるのに、わざわざ、利用される筋合いはないわ」

「でも！」

「くどい！あなたと話している暇なんてないわ」

「ノアさん！ あなたを倒して、お話を聞いてもらいます！」

「-！ ちつ… ええ。わかったわ。もう一人の方は援護に行く必要がなくなったわ。やってあげるわ」

「フェイトちゃんに何かあったの？」

「さあ？ どうかしら」

尋ねられるが、教える義理は無いので、はぐらかす。

「それも含めて、聞きます」

「ふふふ。できるものならやってみなさい」

そして、なのはとの戦闘に入る。

「アクセルシューター！」

「甘い、遅い！」

misfortuneとhappinessで魔力弾を放ち全てを殺す。

なのはが何度も魔法を放つが全てを相殺する。

「これが本気かしら？」

「まだまだ！ デイバインバスター！」

misfortuneとhappinessでは面倒なので、倉庫にしまい、painを取り出し、構え、撃つ。

狙撃銃モードで、デイバインバスターを真正面から、正確にど真ん中を強烈な一撃で撃ち抜き、消し飛ばす。

「きゃあー！」

ディバインバスターを消し飛ばし、そのまま、なのはに一撃が向かっていくが、バリアで防がれる。
威力をある程度、殺されていたため、貫けなかったようだ。

今の一撃で間合いが開き、なのはが得意とする射程に入ったようだが、関係ない。

全ての魔法を撃ち消していく。

私はなのはみたく固定砲台ではなく、動き回りながら、迎撃していく。

「かかった！」

とある場所で、設置式のバインドが発動し、拘束される。

「ふふふ。これで終わりのつもり？」

バインドを一瞬で破壊する。

「まだなの！　これが私の全力の一撃！」

なのははバインドで時間を稼ぎ、最大の一撃を放つ作戦に出る。

「いいわ。受けて立つわ」

私はpainを消し、取り出すのは鉄球。

「後^{アン}より出でて先^{サラー}に断つもの」

「スターライトブレイカー！」

「？斬^{フラガ}り決^{ラック}る戦神の剣！？」

なのはのデバイス、レイジングハートのコアを外し、撃ち抜く。

「きゃあ！」

レイジングゲートが破損し、戦闘続行不可能になる。

「これで、終わりね」

「待つて！」

そう呼ばれるが、無視し、転移する。

40話（後書き）

仮面の男をマジで殺るつもりでした。

なのはに邪魔されなかったら、殺っていたでしょう。

なのはのスターライトブレイカーに打ち勝つのに、他の宝具でもよかったですが、殆どの宝具がなのはごとやってしまいそうなイメージになったので、こうなりました。

祐依は他のサーヴァントの宝具も使うこともできます。
能力のリンクを使えば、対象と同じことが出来ます。

お便り待ってます。

41話

sideなのは

ノアさんに負けちゃって、アースメンバーに迎えに来てもらって、フエイトちゃんが目を覚ましてから、報告会がありました。

まず、フエイトちゃんの報告で、次に私。

「それで、なのはちゃんは何があったの？」

私が出た後すぐに映像が映らなくなって、何があったかわからなかったみたい。

「えと…ヴィータちゃんとお話をしたけど、戦闘になっちゃって、ヴィータちゃんに一撃を与えたと思ったら、突然仮面の男の人が入ってきて、その人がヴィータちゃんを守って、私をバインドで止めた。そしたら、ノアさんが突然現れて、その仮面の人に踵落としをして、ヴィータちゃんと言、二言話をしたら、ヴィータちゃんが離脱して行って、その後、ノアさんが、いつもの黒い銃で仮面の人の両足を撃ち抜いたの」

「攻撃したの！？ 助けてくれた人を！？」

「はい。さらに攻撃をしようとしたところに私が遠距離から、魔法を撃つたら、仮面の人が転移していったの。私はノアさんに訳を聞いたけど…」

「どうしたの？」

「ノアさんは、『忠告を再三無視し、私たちの邪魔をするからよ』
『それにあいつらは何かを企んでいるのに、わざわざ、利用される
筋合いはないわ』って」

「ということ？ 仮面の男は闇の書、ノアたちと仲間ではない？」

「そう言えば、二人と捕獲用結界内で戦った時も、仮面の男が相手の一人を助けた所を、割って入ってきていたわよね？」

「ええ、僕が、杖を突き付けていたところを、仮面の男に攻撃され、一人を逃した時にも仮面の男に向かって、攻撃を加えようとしていました。その時の話からすると、ノアと何度か戦闘をした様子でした。」

「その後、話を聞くために戦闘になりました。ノアさんは基本迎撃で、私の魔法を全て、黒と白の銃と、狙撃銃みたいな銃で相殺していました。狙撃銃の方が強くて、ディバインバスターが撃ち負けました」

「何！？ あれをか」

クロノ君たちが驚く。

そんなに驚くことかな？

「はい。そのまま、撃ち合いをされていて、設置型のバインドで拘束して、スターライトブレイカーを撃とうとして、チャージに入った

ら、あつという間にバインドを破壊されて、攻撃されると思ったら、受けて立つって言われて、ノアさんの武器が、銃がいつの間にか、鉄球になっていて、スターライトブレイカーを撃ったと思ったら、レイジングハートのコアのすぐ側を撃ち抜かれてたの」

「スターライトブレイカーに撃ち勝ったのではなく、撃つ前に攻撃されたの？」

「でも、確かに撃ったと思うたんです！　ですけど…」

「わかったわ。おそらくその鉄球になにかがあると思うわ。今回で分かったのは、謎の別勢力とでも言うのかしら？　仮面の男がいると、それと、ノアの鉄球の形をした謎の武器ぐらかしら？」

リンディさんが纏めようとすると、

「ちょっといいかしら？」

「何かしら？　プレシアさん」

「先程、なのはちゃんは仮面の男の両足をノアが撃ち抜いたって言ったわよね？」

「はい」

「時間的には、なのはちゃんの場所の後に、フェイトの場所に現れたんだけど、フェイトのところには現れた仮面の男は足に怪我はなかった…　時間差的に魔法で治している時間などないはずなのに…」

「それって、つまり…」

「仮面の男は一人じゃない？」

「そうとしか考えられませんね。フェイトちゃんを奇襲する程だから、足を怪我していて、できるものじゃないわね」

「じゃあ、仮面の人は、個人じゃないの？」

「たぶんね。確証がないからはっきりとは言えないけど」

そうして、新たな謎が生まれた・・・

41話（後書き）

最後がなんか目茶苦茶になってしまいました…orz

10,000ユニークに到達しました。

お便り待ってます。

42話

side シャマル

あれから数日、

はやてちゃんがベッドから車いすに移ろうとした時に突然倒れてしまった。

私たちは急いで、病院に連れて行って、石田先生に診察してもらって、安心するけど…

攣っただけではあれだけの痛みはありえない…

石田先生にははやてちゃんの入院を勧められて、はやてちゃんを説得して入院してもらった。

side プレシア

以前にノアが言っていた‘闇の書’と‘夜天の魔導書’のことについて、多少の情報が出てきたらしい。

そして、また会議が始まった。

「じゃあ、ユーノ君お願いできるかしら」

「はい。闇の書は本来『夜天の書』と呼ばれる研究分析用の魔導書で、主とともに旅をして、各地の偉大な魔導師の魔法を蒐集し、研究するためのものだ」と。けど、長い歴史と、幾人もの持ち主を経るうち、その機能はいつしか歪められ、壊され、異形の品へと変わっていったそうです。

「闇の書」として生まれ変わってからは、確かに完成後に主は『大いなる力』と闇の書を操る能力…管理者権限を得るが、その時間はごくわずかな時間のみであり、その後すぐさま闇の書は暴走を始め、主の魔力と魂をまたたくまに食い尽くし、その力を無差別破壊と周辺地域の侵食に使い始める。

魔導書自体の破壊は、無限転生機能のせいで無意味。
真の主として管理者権限を得たものしか制御することはかなわず、その機を逃せば暴走。

主を押さえて蒐集を行わせないようにしても、蒐集の役に立たなくなった主を食い殺し、新たな主を求めて転生する。

それが、闇の書を『封印不可能』と言わしめた呪いの正体です」

「ご苦労様。闇の書についてはこれでわかったと思うけど、問題は、ノア・ミナツキよ。どうして彼女は闇の書の真実を知っているのか。彼女は我々管理局とは関係ない。無限書庫でようやく見つけた内容をどうして知っているのか…」

『プレシア、やはりノアはアルハザードで…』

会議の途中でリニスが秘匿回線の念話で話しかけてくる。

『ええ。私もそう思うわ。技術や設備が過去の物だとしても、それは、ロストロキア古代遺失物やそれに準ずるもの。私たちの予想を容易く超えるでしょうね』

『ですが、ノアはそれを使えるのでしょうか？』

『問題ないと思うわ。私の考えたアルハザードへの行き方を言った時に否定した。その際に知ったって言ったのよ。おそらく、アルハザードの物を使い、知ったと考えるべきね』

『でしょうか…』

『どういふことかしら？』

『いえ、あの… ノアにはまだ何かあると思うんです。彼女が魔術師という言う私たち魔導師と違うのは今まで何度も思ったのですが…
… 今までに私たちが知ったこと以上に何かがある』

『それは、魔法や技術ではなく？』

『…はい』

『そうね… 彼女なら、闇の書について全て知っているのかもしれないわね。ただ単に完成させるのに手を貸しているだけなら、管理局を直に手を出すわよね。仲間でさえ、あんなに強いんだから。なのに初めは違法研究をしていた研究所を襲っていた… 何かがあるのは間違いないわね』

『少し、話がズレますが、ノアは一体何歳なんでしょう？』

『どうしてかしら？』

『仮面で素顔を見たことがないですが、あそこの執務官たちは素顔

を見て気絶したらしいですが、おそらく、それほど歳をとっていないでしょう。ですが、あの魔法や戦闘、時の庭園に乗り込んだり、たった一人で闇の書のヴォルケンリッターたちを逃がすための殿をしんがり務める、そして、多数の相手に向かつても引かない胆力。プレシアに飲ませたという若返りの薬を作り、あの見たこともない能力の武器。何より、仮面の男に向かつて、躊躇いもなく発砲、なのはに邪魔されなければ、間違はなく躊躇いもなく殺す気で撃っていただろう殺意。今まで、誰一人殺さずにいたのに、その気になると躊躇わず引き金を引こうとする』

『そう言われれば、確かに何歳なのかしら？ 若返りの薬を持っている時点で見た目の年齢でない気がするけど……』

後半はリニスと念話ばかりでした。

会議はちゃんと聞いてはいました。

42話（後書き）

管理局側が、ノアのヒントで闇の書について、やっと知りました。

お便り待ってます。

43話

side 祐依

シャマルから、祐依にはやてが入院をしたと連絡を貰い、今日はノアとしてではなく、祐依として、病院を訪れる。

（まだ、黒き月以外の人には祐依ノアとバレていません。なので、シャマルははやての友人として、祐依に連絡をしています）

病室を訪ねようと受付ではやての部屋を聞き、病室前に行くと、

「何やってんですか？ シャマルさん」

「きゃっ！ って、祐依さん、脅かさないください」

「いや、変装して、病室の中を覗いていたら不審者ですよ」

シャマルが、はやての病室を除いていた。

「いえっ！あの…これは…」

「中でなにかあったんですか？ 中で五人ほど楽しそうにおしゃべりしているだけじゃないですか？」

「え？どうしてそれを」

「声ですよ。はやてちゃんの他に四人の声がするじゃないですか」

「わかるんですか？」

「耳がいいんですよ。それと、気配には敏感なんですよ。後ろにさつきから見ている先生もいらっしやいますし」

「え？」

「こんにちは、シャルさん」

「えっと、こんにちは」

先生が出てきて、挨拶をする。

「初めまして。相沢祐依です。はやてちゃんとは図書館で知り合った、歳の離れた友人です」

「こちらこそ、初めまして。はやてちゃんの担当医の石田です。それで、シャルさんちよつといいかしら？」

「はい？」

そうして、二人は何処かへ行ってしまった。

『どうしよつか？』

ゼロに念話で尋ねる。

『お友達というようですから、改めて出直しましょうか』

『それがいいかもね。じゃあ、一旦売店でも行きましょうか』

はやての部屋の前から離れようとしたら、

・ガラッ

「あ、祐依さん」

扉が開き、なのはが出てきて、遭遇する。

「あら、こんにちは。なのはちゃん」

「祐依さんはどうしたの？」

「ん？ 私？ はやてちゃんが入院したって聞いたから、お見舞いに来たんだけど、先客がいたから後でまた来ようとしたところに、なのはちゃんが部屋から出てきて、鉢合わせしたって感じがしら」

「そうなの？でも、大丈夫なの。中の人みんな知り合いなの」

「そうなの？」

「うん。はやてちゃんと知り合いなら、みんな会ったことがあるの」

「でも、知り合いでも、私は歳が離れてるし、また今度来るわ」

そう言って、別れようとしたら、

「大丈夫なの」

と言って、服の裾を掴んで、扉を開けて、

「祐依さんが来てくれたの」

そう言ってしまった。

ここで逃げることはできないことはないが、できない。

「こんにちは。はやてちゃん大丈夫？ それと、みんな久しぶり」

「こんにちは。祐依さん」

全員が口々に返してくれる。

（アリサとすずかは恭也さんと忍さん経由でこの姿で面識があります。なのはとフェイトは翠屋で知り合いました）

その後、六人で談笑しながら、時間を過ごし遅くなり、アリサとすずかは迎えが来て、なのはとフェイトは暗くなってきたて危ないという理由で、私が翠屋まで送って行くことに、ついでに翠屋で夕食をとった。

その後、守護騎士たちと合流し、蒐集をする。

タイムリミット
期限はもう近いことを告げられる。

43話（後書き）

祐依を久しぶりにだした…
ずっと、ノアとして行動していたから…

お便り待ってます。

44話

side 祐依

十二月半ば過ぎ、闇の書がもうすぐ、残り100ページを切る。

「ノア、主の容体は悪化の一途を辿るばかりだ。最悪、今月末が期限だ」
リミット

「わかったわ。でも、助けるためには、このまま蒐集をするだけではダメって言ったわよね。最後の仕上げの為に今日の蒐集をやったら、私は一時戦線を離れて、準備をするわ。おそらく、クリスマスまでかかるわ。ギリギリかもしれないけど、絶対に間に合わせるわ。もしもの為にこれを闇の書のマスターに」

普通の三日月を模したペンダントを渡す。

「これは？」

「現段階で分かる限り、闇の書からのマスターへの魔力干渉をギリギリまで妨害する術式を組み込んだものよ。みんなには害はないわ。簡単に言えば、闇の書本体からマスターへのパイプを狭くするみたいなものかしら？」

「大丈夫なのか？」

「ええ。私の技術を使っているんだから。そこらの魔導師や科学者なんかには、構成どころか存在もわからないわ。絶対に外さないように言っておいてね」

「わかった」

「あ、それと、絶対に私の合図を待つてね。勝手に完成させちゃダメよ」

「それは、その最後の仕上げとやらか？」

「ええ。最悪の為の手はあるけど、それは使いたくないから…」

「わかった。今まで、我らを何度も助けてくれたのだ」

「じゃあ、そろそろ蒐集に行きましょうか。ちょっと遠いけど違法研究所を見つけたわ。そこをまず襲いましょう」

違法研究所を襲い、その後、周辺の魔獣を狩り、闇の書の残りページが、50を切る。

「じゃあ、打ち合わせ通りお願いね。残り10ページを目安に蒐集してね。そこまでいったら、マスターと一緒にいてあげなさい」

「ああ。そつちこそ、へますんじゃねーぞ」

「あら、誰にいつてるのかしら？ そつちこそ、気を付けて」

「ええ。気を付けるわ。ノアさんこそ、気をつけください」

「何かがあつたら躊躇わず連絡してね。じゃあ、そろそろ行くわ」

守護騎士たちと別れ、アルハザードに戻る。

「ルイン。最後の仕上げをするわよ」

「わかりました。準備は出来てます。こちらに」

ルインと共に研究室で最後の仕上げを行う。

「これで、完成ね。ルイン、絶対に成功させるわよ」

「はい。明日のクリスマスに間に合いましたね」

「ええ、最高のプレゼントになるわよね」

この時、クリスマス・イブの昼だった。

その数時間後、あんな事態になるとは、思ってもみなかった・・・

44話（後書き）

A・S 編ついに佳境です。

お便り待ってます。

45話

side シャマル

祐依さんに明日の正午に闇の書を夜天の魔導書に直すための作業をすると連絡が入り、その時まで、はやてちゃんと一緒にいてやれ、と言われて、はやてちゃんの病室にいと、はやてちゃんのお友達が訪れ、何気なく招き入れると…

その中には、以前戦った管理局の人たちが、二人混ざっていた。

咄嗟に通信妨害を行い、念話をさせないようにする。

二人は、事を荒立てないため、事実を隠し、静かな見舞いを望む。

私たちは複雑な心境で見守っていた。

すずかちゃん達が、帰った後、病院からほど近いビルの屋上で二人に闇の書について、シグナムと私の代わりにザフィーラが告げる。

私はノアさんに事前に教わっていた、ノアさんのデバイスへの秘密連絡をし、現状を説明していた。

ノアさんは少し、こちらに来るのに時間がかかるみたい。

明日の準備をすぐに出来るようにするのに多少の時間がかかるらしく、もし、戦闘になったら、確実に倒すか、怪我をしないように、はやてに絶対負荷をかけさせないようにと、言われた。

三人に秘匿回線の念話で伝える。

管理局の二人が、闇の書について、私たちに伝えようとするが、以前にノアさんに教えてもらっていた内容だった。

「うるせー！！ そんなこと、とつくに知ってたんだよ！！」

ヴィータちゃんが瞳の端に涙を浮かべながら、襲いかかる。

そう、私たちは全てを既に知っている。

そして、それらを解決するために動いてきた。

ヴィータちゃんが一人を、吹き飛ばす。

だが、その攻撃を防ぎきってしまうのは。

炎の中から浮かび上がる純白のバリアジャケット姿を見て、ヴィータちゃんのはなのはを悪魔と呼ぶ。

「悪魔でいいよ… 悪魔らしいやり方で…話を聞いてもらうから！」

そうして、ヴィータちゃんとシグナムがそれぞれ戦闘に入る。

戦闘中、二人が何度も言葉を言ってくるが、それらは既に知っている。

二人を戦闘不能にするために攻撃を続ける。

こちらは、ノアさんに全てをかけている。

だから、ノアさんを待つ。

その戦闘の中、突然、遠方からバインドが放たれ、拘束されてしまう。

そして、仮面の男に闇の書を奪われ、蒐集され、消えていく。
消えていまいま直前にノアさんに緊急を告げる念話を飛ばし、消えてしまう。

ー！

シャルマルからの最期の念話が届く。

「ルイン！ 不味い！ 闇の書が奪われて、蒐集させられてる。このままだと、……暴走する！」

「わかりました。ですが、まだ、準備が……」

「くっ！ ルイン、最後の手段を使うかもしれないわ。ルインはプラン通りの準備をこのまま急いで！ 私は行って、時間を稼ぐわ！ ゼロは私の補助などは一切なし、回線をつないで、ルインの補助を」

「わかりました」

『了解』

私はあの世界で使っていた黒い外套と仮面を身に着ける。

「最悪の時の為の手段はゼロに既に仕込んであるから、その時は連絡するから……」

「わかっています」

ルインの返事を聞き、戦場となる、海鳴市へ。

「？リンク・八雲紫・ロード？」

スキマを開き、飛び込んでいく。

45話（後書き）

ここまで、書いておいて、本当の最後以外、どうなるか、作者にもまだわかりません。

追記しておく、リリカルなのは、A・S編で終了のつもりです。Strikers以降はどう原作破壊しようか思いつかないので、やったとしても、一旦この物語を終了し、別の物語をやった後で書くかもしれません。

お便りまっています。

46話

side 祐依

シヤマルから火急の知らせを受け、現場へ駆けつけると…

既に闇の書の意味が目覚めていた。

周囲を見渡すと、仮面の男が離れた場所にいた。

「ちっ あいつらか！」

‘倉庫’から、demiseを取り出し、phantomに変化させる。

日本刀から、鞘も鍔も柄も刀身さえ、全て純白の刀に変わる。

闇の書の意味が既に目覚めているが、覚醒はしきっていないので、仮面の男を先に潰す。

「陽炎！」

仮面の男たちの背後にあえて、瞬間移動し、phantomで斬りつける。

「「なっ！」」

「？エルキドウ！？」

鎖が現れ、二人を拘束する。

「くそっ！」

「姿が！？」

私はphantomを向けながら、二人に告げる。

「この剣は斬れないモノを斬る」

phantomは本来、実体を持たないモノを斬ることができる。実体を持たないモノを斬る。

故に実体を持つモノは斬ることが出来ない。

そして、一番の能力が、斬ったモノを封印することができる。

「あんたらの変身していた魔法を斬った」

「何！？」

「そんなことが…」

そう告げる中、phantomが漆黒に染まっていく。

「さあ、不幸を届けに来たわ！」

漆黒に染まったphantomの刀身が二人を捉える。

「きゃあ!」

エルキドウを消し、二人が倒れる。

倒れた直後、クロノが現れる。

「貴様!」

「遅かったわね。クロノ・ハラウン執務官」

「二人に何をした!」

「私たちの邪魔を再三してきた猫に人誅を下しただけよ」

「殺すほどのものだったのか!」

「ふふふ。死んではないわよ。もっとも、もう二度と魔法は使えないけど」

phantomは二つの形態を持つ。

純白の時は、封印。

漆黒の時は、破壊。

封印は、斬ったモノを封印することができる。

破壊は、斬ったモノを破壊する。

今回は、最初に変身の魔法を封印し、

最後に魔法を使うための機関を破壊した。

封印は解けば、また使うことができる。
が、破壊すれば、特殊な方法をせねば、元に戻ることはない。
その方法は、祐依しか知らない。
故に事実上、二度と使えることはない。

「なっ！　そこまで、することか！」

クロノが、詰め寄ろうとするが、

phantomを‘倉庫’にしまい、misfortuneを取り出し、足元に発砲する。

「当然よ。闇の書を夜天の魔導書に完全に直すことができたのに、それが明日の正午に行われる筈だったのよ。それを、こいつらが、邪魔をした。今まで、再三警告をしてきたのに」

「ばかな！　闇の書を直すだと！！」

「ええ。そうよ。管理局に改悪された夜天の魔導書を無事に直せる筈だったのに、闇の書の意味が目覚めた以上、完全に直せる可能性はほぼ無くなってしまったけどね」

『マスター、闇の書の意味が間もなく覚醒します』

『わかったわ。』

闇の書の意味を観察させていたゼロから報告を受ける。

『ルイン。もう覚醒するわ。プランBに変更よ』

クロノと話しながら、ルインに念話する。

『……わかりました。プランBに移行します』

「管理局だと!？」

「これ以上無駄話している時間はないわ。後はそっちで、調べなさい」

「待て!」

「?リンク - 小野塚小町 - ロード?」

小野塚小町の‘距離を操る程度 of 能力’を使い、その場を去り、闇の書の意味の前に立つ。

46話（後書き）

つい、猫姉妹をやってしまいました。

殺すことはせず、魔法を奪ってしまいました。
魔導師？ 使い魔として、殺しましたが…

これまでの行為にプツンしました。

後悔はしていません。

お便り待ってます。

47話

side 祐依

闇の書の意味の前に立つ。

（今回は、ゼロの補助がないため、ずっと、博麗霊夢の‘空を飛ぶ程度の能力’で飛んでいます）

「「ノアさん!？」」

なのはとフェイトをバインドで拘束していた仮面の男、もとい猫を再起不能にしたためか、バインドから解放され、二人が闇の書の意味の方へ飛んでくる間に、突然現れ、驚いた声を出す。

だが、私はそれを無視する。

「すべてが終わってしまった」

闇の書の意味が涙を流しながら、俯く。

繰り返される悲しみと、またも、主を失う痛み。

私は静かに独白を聞く。

なのはとフェイトは懸命に闇の書の意味に呼びかけるが、

「我は闇の書、我が力の全ては、主の願いのそのままに」

闇の書の意味の頭上に巨大な広域攻撃魔法・デアボリックエミッションの光弾が…

「闇に染まれ…」

「ちっ 下がれ！」

相手の魔法の規模を知ると直ぐに二人を下げさせる。

「？リンク・伊吹萃香・ロード？ <無光なる最果ての渦。永遠の安息へと導け！>」

「デアボリックエミッション！」

「ブラックホール！」

数瞬遅れて、発動する。

デアボリックエミッションの直線状に現れた漆黒の闇が飲み込んでいく。

ゼロを介さず行つたために、本来の威力・範囲・効果が発揮される。さらに、伊吹萃香の‘密と疎を操る程度の能力’で底上げされ、完全に打ち消す。

「なっ！？」

闇の書の意味は驚きに表情を染める。

「一旦引いて、態勢を整えるわよ！」

二人を掴んで無理やり離脱し、ビルの陰に隠れる。

「ノアさん！ どうしてここに！？」

「言ったでしょ。夜天の魔導書のために動いてるって。……！ 二人とも、落ち着いて聞いて」

「え？」

「何？」

「この近くに一般人がいる。しかも、あなたたちの知り合いの」

「ええ！？」

「本当なの、ノアさん！？」

「こんな時に嘘なんて言ってる場合じゃないでしょ！ 今から二人はその人たちを退避させて」

そんなやり取りをしていると、

封鎖領域を展開される。

「急いで！ このままだと巻き込まれる！」

「でも…」

「こっちは私が何とかする！」

「わかりました」

二人が離れていく。

どうやら、二人にユーノとアルフ、そしてプレシアが合流したらしい。

クロノは猫姉妹を連れて、転移をしていた。

闇の書の意味の前に姿を現す。

「何故邪魔をする…」

「あんたを助けるためよ」

「…無駄だ」

そう言うが、表情は悲しみ染まっていた。

今までもどうしようもなかった。

それは、今回もそう思っているのだろう。

「やってみなくちゃわからないでしょう?」

‘倉庫’からmisfortuneとhappinessを取り出し、向ける。

「もう、手遅れだ。 刃を以て、血に染めよ 穿て ブラッディダガー!」

私の包囲するように実体を持ったダガーが生成される。

「はあっ!」

それらを撃ち落とし、または、銃で弾き落とす。

「な!」

術後の、さらに驚きの隙をつき、

「あんたの絶望に不幸を届けに来たわ。 喰らえ!」

misfortuneに爆裂弾
バースト・フレッド
happinessに凍結弾を装填し、撃つ。
フリーズ・バレット

「ぐあああ!」

爆発と熱・急激な冷却。

障壁のせいで直接的な傷を負わせることはできないが、ダメージを負わせることはできた。

「くっ プラズマランサー！」

「不味い！」

さっきのは実体を持っていたため落とせたが、今回は実体がない。

撃ち落とせない。

弾き落とそうとすれば、ダメージを負う。

ゼロの補助がないため、魔力弾の生成が遅れ、いつものように撃てない。

魔術ので迎撃は、間に合わない。

よって、回避にまわり、武器を *d e m i s s e* にそして、 *p h a n t o m* に変え、一発ずつ封印していく。

対処し終わり、闇の書の意味を見ると、

足元にピンクの魔法陣が現れ、周囲の魔力が集まっていく。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ 貫け、星光 スターライト ブレイカー！」

なのはの文字通りの必殺技、スターライトブレイカーが放たれた。

なのは相手の時のようにあれは使えない。

詠唱破棄すれば、威力が足りない。

かといって、詠唱をしていれば時間が足りない。

- !

仲間の、師匠の声が頭に響く。

「I am the born of my sword 《身体は剣でできている》」

防ぎきれると信じて、投影するのは…

「？^{ロー・アイアス}熾天覆う七つの円冠？！」

七つの花弁のような形状をした、投擲系の攻撃に絶対の防御力を持つ楯。

「ぐう！！！」

耐えているが、かなり辛い。

「なんて攻撃考えてんのよ！」

楯は魔法を受け止めていても、今なお顕在だが、出している私が耐え切れない。

「くう！！^{トレース}強化・開始」

無理やり魔術回路に魔力を流し込み、身体を強化する。

無茶を承知で、耐えていると、

桃色の閃光が、

金色の閃光が、

雷撃が、

闇の書の意味に放たれた。

「何!？」

闇の書の意味は不意を突かれ、咄嗟に防御に移り、攻撃が止む。

「ノア（さん）」

「はあはあ、平気よ。これくらい」

寄ってくる、三人と遅れている二人に声をかける。

「でも、あれを受けて…」

「そんなことより!あいつを止めなくちゃ」

心配してかけてくれる声を断ち切り、闇の書の意味に視線を向ける。

47話（後書き）

どうなるんでしょう…一体…

お便り待ってます。

48話

side 祐依

再度、四人で、闇の書の意味に向かう。

なのはとフェイトが停止を呼びかけるが、

「我が主は、この世界が、自分の愛する者達を奪った世界が、悪い夢であつてほしいと願った。我はただ、それを叶えるのみ。主には、穏やかな夢の中で永久の眠りを…」

そう、切つて捨てる。

「嘆く前に考える！下を向かずに顔を上げる！ 変わらない現実に文句を言うだけで何もしないのは卑怯者のすることよ」

私はそれをさらに切つて捨てる。

「ノア…」

プレシアが私に目を向ける。

「初めから諦めてんじゃないわよ！」

phantomを漆黒に染め、突き付ける。

「それでもいい…私は、主の願いを叶えるだけだ」

「それが、本当にはやての願いなのか？」

「闇の書さん！」

なのはがついにキーワードを言ってしまう。

「お前も…その名で私を呼ぶのだな…」

「え？」

「我は闇の書…ただの道具だ…」

「じゃあ、どうして泣いている！ そんなに悲しそうな顔をしている！」

「これは、主の涙だ。道具の私に感情なんてものは存在しない」

「もういい！！ あんたをぶん殴って、目覚まさせてやるわ」

会話を打ち切る。

「ノアさん！？」

周り何か言っているが、無視し、phantomを納刀し、抜刀の構えをする。

「穿て ブラッディダガー！」

「葬刃！」

どれだけ離れていても、一瞬で到達する神速の抜刀術。

ダガーを無視し、迫っていく。

「くっ！」

バリアを張るが、関係ない。

phantomは斬れないモノ、実体を持たないモノを斬る。
バリアなど、所詮魔力で作られたもの。

バリアを一瞬で破壊する。

「何！？」

間一髪で避けられるが、翼を一枚切り裂いた。

その後、なのはとプレシアが遠距離から魔法を放つ。

バリアを再展開され、防がれる。

だが、一瞬の目くらましになる。

「はあ！」

フェイトが切りかかるが、

「お前も、我が内で眠るといい」

攻撃を受け止められ、消えていく。

「ちっ！ 陽炎！」

フェイトの頭上へ瞬間移動し、フェイトを蹴り飛ばし距離を無理やりあける。

「きゃあ！」

「？リンク・サーヴァント・サモン？ こいつを止める！！」

「全ては…安らかな眠りの内に…」

フェイトを蹴り飛ばしたために、フェイトがいた場所に停まってしまい、対象が私になる。

私は吸収される前に仲間を召喚し、命令を下す。

全員を召喚する前に吸収され、意識が途絶える。

48話（後書き）

口では言っているけど、実際には行動してしまう祐依です。

お便り待ってます。

49話

side 祐依

「う…ここは？」

周りを見渡すと、研究室の一室のようだが…

- !

「そんな…ここは」

かつての世界…しかも、私が禁忌を犯した場所…

「あら。やっと起きた？」

「え…せ・先生？」

「何寝ぼけてんのよ。さっさと起きなさい」

私は胸元のペンダントを咄嗟に確認する。

「ある…」

私の罪の証は確かにあった。

「そっか…ここは」

「その通りよ。ここは、あなたが望む世界。私が生きているという

偽りの世界よ」

「先生……」

「そう、しよげない。前にも言ったでしょ？私のはあの時の事は恨んでないって。私は昔のツケで永くなかったのよ。あんたの軌跡を見たい一人なんだから。それに、あなたにそれを残せたんだから。私の教え子なら、立って歩け、前へ進め。あんたには立派な足がついているじゃないか」

私に色々なことを教えてくれた恩人である先生が私の肩に手を置きながら言う。

「やることがまだあるんでしょ？さっさと起きて、あなたのキセキを見せてもらなさい」

「……はい！」

「あ、ちょっと、そのペンダントに行く前にちょっと貸してくれる？」

「え？ あ、はい」

先生にペンダントを渡す。

先生はそれを床に置く。

かつて、私が賢者の石を錬成しようとした場所に。

「パチン！！」

室内を閃光が満たす。

「うつ」

咄嗟に目を閉じる。

「できたわよ」

そう言つて、ペンダントを投げ返してくる。

「それに私の全てを込めたわ。魔術、技術、技能、その他、私が培つてきた全てをね」

そう言う先生の姿は徐々に薄れつつあった。

「先生！？」

「いいのよ。言つたでしょ？あなたの描く軌跡。あなたが起こす奇跡。それらをキセキを見てみたいって」

「はい」

私は涙を堪えながら、返す。

「さあ、行きなさい」

先生の姿が完全に消える。

「行つてきます」

世界がぶれ始める。

「<元始にて万物の生たる燐光。汝が力、我に示せ！轟け！ビツグバン！！>」

すべてを粉碎する原始の爆発を引き起こす。

世界を吹き飛ばし、偽りの世界から脱出する。

sideセイバー

マスターに召喚されると、同時に消えるマスター。

周りを素早く観察すると、以前、時の庭園で戦闘した人たちと指示された、闇の書の意味と、アーチャーとキャスターがいた。

マスターはサーヴァント全員を呼ぼうとしたが、間に合わなかったのか。

「ノアさん!？」

茶髪の…確か、高町といったか…

「大丈夫ですよ。マスターは生きています。我々とまだ繋がっていますから」

「本当!？」

「ここで、嘘を言ってどうする?。」

アーチャーが代わりに答えてくれる。

「そんなこと言っている場合じゃなくてよ」

闇の書の意味がこちらに魔法を放とうとしていた。

「く」

放たれる魔法はキャスターとアーチャーが相殺、撃墜してくれた。

私は、魔力放出で渾身の一撃を叩き込む。

「はあ!」

「ぐ」

アーチャーが弓で、キャスターが魔術で援護してくれる。

三人で波状攻撃を加え、相手を攻撃に移させない。

そんな攻防を数分続けていると、

マスターから念話が私たちに、
なのはたちには、違う人から、念話が届く。

49話（後書き）

お便り待ってます。

50話

side 祐依

あの世界を脱出すると、はやてと闇の書の意味がいた。

「?リンク・古明地こいし・ロード?」

何やら大事そうな話をしていたので、隠れる。

話し合いを聞いていると、

「無理です。自動防御プログラムが止まりません」

そう、闇の書の意味が言ったので、

「手段はあるわよ」

‘無意識を操る程度の能力’を解除し、姿を現す。

「誰なん?」

「お前は…ノア?」

「ええ。私はノア・ミナツキ。魔術師よ」

「それで、手段があるって?」

「それは、二人の協力が必要不可欠なのよ」

「それは一体？」

「闇の書を夜天の魔導書に直すのよ」

「そんな！？できるわけがない！！」

「できるわよ。夜天の魔導書が闇の書になった原因… 防衛プログラムの管制人格を排除されたのが、元々の原因なのよ」

「だが、防衛プログラムの管制人格は…」

「生きてるわよ。私は彼女に助けられたんだから」

「本当なのか！？」

「ええ。話は元に戻すけど、はやて。あなたが管理者権限で防衛プログラムを一旦、切り離すのよ。それで、防衛プログラムに管制人格を再インストールするのよ」

「できるのか？」

「ええ。準備は今までやって来たのよ。それで、はやて。彼女に新しい名前を付けてあげて」

「私が？」

「あなたが、マスターでしょ」

「そやな… よし！ 夜天の主の名の下、汝に新たな名を送る。祝福のエール、幸運の追い風…強く支えるもの…リインフォース…」

「管理者権限の使用が可能になります」

「じゃあ、行くわよ」

「待つて！ どうして、ノアさんはここまでしてくれるん？」

「小さな親切を受けたら、大盛りで返しなさいって」

私はそう告げる。

「？リンク・八雲紫・ロード？ はやて、私がここを出てから、3
0秒後、管理者権限で防衛プログラムを切り離して」

「わかった」

「その前に、リインフォース。こっちに」

「何ですか？」

頭に触れながら、

「ちょっと、お手伝いよ」

境界を操り、防衛プログラムだけを他のものと分ける。

「！ これは！？」

「防衛プログラムを他のと分けただけよ。じゃあ、行くわよ!」

私は、スキマを開き、現実に戻る。

「ノアさん!」

現実に戻ると、何故か、なのはが一番に反応した。

いや、私の仲間たちは繋がっているため、初めから知っているので、大きな反応がないだけである。

「これから、始まるわ!」

『ゼロ!』

『大丈夫です』

ゼロに最後の確認をとる。

闇の書の意味…いや、はやてから防衛プログラムが飛び出す。

はやてが新たな夜天の書のマスターとして何かやっているが、私た

ちはそれを無視し、防衛プログラムと私たちを結界でさらに隔てる。

『ルイン！ 行くわよ』

『わかりました』

防衛プログラムにゼロを媒介とした、楔を打ちこみ、ルインを、防衛プログラムの管制人格を再インストールを行う。

「あと少し・・・」

再インストールを終了し、全てを元に戻していく、修復作業に移る。

その時、

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト！」

クロノの襲撃を受ける。

50話（後書き）

お待ちしております。

51話

side 祐依

あと少しで終わると思った瞬間

「ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト！」

クロノの奇襲を受けた。

「くっ！」

咄嗟に躲してしまう。

動いたために、ゼロと防衛プログラムをつなぐ楔が切れてしまう。

「あ!？」

一瞬そちらに気をとられ、一発が仮面を弾き飛ばす。

ゼロのバリアジャケットではなかったために、素顔が見られてしまう。

前のように、素顔を隠すための細工は作業に集中するためにしていない。

『祐依（さん）!？』

はやての夜天の魔導書のマスターとしての儀式が終わったところで、

こちらを丁度向かれ、
素顔が見られ、全員が驚きの声を上げる。

「ちっ ええ、そうよ。私がノア・ミナツキよ」

舌打ちをしつつも、答える。

「どうして!？」

「魔術師は正体を隠すって言ったでしょ？ 祐依として、全員と面識が出来ていたのは、作り話みたいに信じ難い話で、冗談って言いたいぐらいよ」

「貴様、何が目的だ!」

「学習しないわね。今までも何度も言っているでしょ？ 人助けって」

応答しながらも、ゼロを防衛プログラムに再度楔を打ちこみ、調べるが、

「! 不味い!! みんな下がれ!」

そう忠告する。

「防衛プログラムが暴走する!! 中途半端に直したから、余計にひどくなってる」

防衛プログラムの管制人格は、完全に停止し、眠っている。

結界内の世界に火柱が上がる。

「きゃあ！」

「くそ！　＜堅固たる守り手の調べ！　フォースフィールド＞」

円形のバリアを張り火柱を防ぐ。

「ノア！　どっとうにかできないのか？」

アルフがバリアを張りながら、尋ねてくる。

「ないことはないけど……」

「じゃあ、それをやれば！」

「防衛プログラムの管制人格を起こして、止めさせれば或いは……」

「何か問題があるんですか？」

ユーノもバリアを張りながら、尋ねてくる。

「一回、精密な作業中に攻撃されて、無理やり接続を切らされて、管制人格が今、生きてはいるけど、完全に停止しているのよ」

私はクロノを見ながら、そう告げる。

「なっ！？　僕のせいかな！？」

数人から、無言で見つめられ、若干たじろぐ。

「いえ、結果だけを見ればそうだけど、あなたは管理局の執務官。私が作業中とはいえ、無防備でいたんだから、攻撃をするのは、当然よね？」

一応、助け船を出しておく。

「まあ、それは置いといて。今はあれをどうにかしなくちゃね……」

「はやてちゃんの管理者権限は使えないの？」

なのはがはやてに尋ねるが、

「ダメよ。切り離しているから、時間をかけて再接続しなければ、何もできないのよ。再接続には時間が全然足りないのよ」

はやてが答える前にそう返す。

「手は他にないの？」

プレシアが尋ねてくる。

「…率直に言えば、二つ」

私は指を二本たてながら、告げる。

「一つは、防衛プログラムを消滅させる」

「それは、無限の転生と永遠の再生機能が」

ユーノが口をはさむが。

「永遠の転生機能は修正した時に直したわ。けど、防衛プログラムを消滅させれば、夜天の魔導書が、リインフォースと守護騎士たちも一緒に消える」

「どうということなん？」

はやてが、慌てて問うてくる。

「今、防衛プログラムには、バグがあったプログラムを全て含んでいるのよ。その中には、存在するために必要不可欠な、はやてと繋ぐ大事なパスがあるのよ。書がマスターのリンカーコアから強制的に魔力を吸い上げていたから、それも直すために今は防衛プログラムにあるのよ」

「じゃあ、どうして、今あたしたちは消えねえんだ？」

「必要最低限な、繋がりは残してあるのよ。あなたたちが、行動できる程度にはね。直すために切り離して、消えてしまいました。じゃ、お話にならないでしょ？」

「ああ、ノアの言うことは本当だ」
リインフォースが肯定する。

「じゃあ、どうすれば……」

「それで、二つ目ね。防衛プログラムの管制人格をたたき起こすの

よ」

「そんなことできるのか？」

「ええ。こちらも、方法は二つ。強力な攻撃を叩き込み、ショックでたたき起こす方法」

「わかりやすいじゃないか」

数人が頷くが、

「でも、これは、どの程度の攻撃で起きるのが、わからないのよ。下手したら、起きる前に攻撃に耐えきれず、消滅する可能性があるのよ。そしたら、さっきの消滅させる案と同じ結果ね」

「でも、永遠の再生の機能が」

「それは、中途半端に直してあるのよ。どこまで、再生するのか、再生できるのか、全くわからないのよ」

「なんで、そんな中途半端にしたんだい！」

「再生機能を直している時に攻撃を受けたからよ」

『・・・』

またしても、何人かがクロノを無言で見つめる。

「それはもういいから」

話が進まないで、止める。

「最後の手段は、防衛プログラム内に入って、管制人格を起こしてくるのよ」

「な!？」

周りが驚いているが、スルーする。

「そんなことができるのか!？」

「私が、闇の書の意味に吸収され、消えたでしょ？ あれを応用して、防衛プログラムの中に入るのよ」

「それは危険すぎる!」

リフォースが反対する。

「あなたたちを助けるにはそれしかないのよ」

「だが…」

「…ノア、一つだけ聞きたい」

クロノが改まって、尋ねてくる。

「何かしら？」

「どうして、ここまでです。前回のジュエルシードの事件もプレシア達からの話も聞いている。デバイスの情報が嘘で、プレシア達の

証言が本当なら、ただの人助けじゃないぞ。それに今回もそうだ。始めのうちは、違法研究所ばかり襲っていた。誰一人殺すことなく、無力化さえして、通報もしていた。単純に直すだけなら、そこらの魔力をもったものを襲っていれば、もっと早く終わっていたはずなのに。そして、今、最も危険な橋を渡ろうとする？」

「……先生との誓いよ。不条理によつて、苦しんでいる人を助けるため。そして、今回は誰でもない、夜天の魔導書の防衛プログラムの管制人格に頼まれたのよ。闇の書……いえ、夜天の魔導書の管制人格と守護騎士、そして主を助けてほしい、と。私がある場所で倒れていたのを、助けてくれたのが、彼女なのよ」

「そうか……」

「ええ。だから、私が、行くのよ」

「私も行こう！」

リインフォースが名乗り出るが、

「いえ、行くのは私たち、黒き月よ。みんなにはあいつらの足止めをお願いしたいのよ」

「あいつら？」

「そう」

私たちが話している間に、防衛プログラムは、蒐集したリンカーコアの魔力を基に擬似生命体を作り上げていた。

「あなたたちをモデルにした、あのこたちをね」

「何!？」

全員が驚きの声を上げる。

私から魔力を蒐集しなかったため、私のコピーは存在しない。

コピーたちが、それぞれに戦闘態勢をとる。

「この子たちは、倒そうが、消し飛ばそうが、本体には被害がないわ。全力でやりなさい。でないと、死ぬわよ」

「どういうこと?」

「みんな、魔力で強化されてるのよ。そろそろ、時間が無くなって来たわ。さあ、始めるわよ!」

その言葉に反応したのか、襲いかかってくる。

全員が散開し、各個戦闘に入る。

「さあ、私たちも行きましょうか」

防衛プログラムに向かう。

51話（後書き）

作者の独自解釈や設定が多数出てきてしまいました。

防衛プログラムが作り出した擬似生命体は、なのはのポータブル版に出てくる、マテリアルズと同じようなものと考えてください。

お便り待ってます。

52話

side 祐依

「さて、今行くわよ」

防衛プログラムに向かう。

「？リンク・八雲紫・ロード？」

境界を操り、防衛プログラムの中へ。

中に入ると、目に飛び込んできたのは、かつての闇の書の行ってきたことだろうか…

守護騎士たちが、蒐集のために人々を襲っていく光景。世界を消し去っていく光景だった。

「ゼロ、ルインの居場所はわかる？」

「はい、このまま真っ直ぐ言ったところです」

ゼロの言うとおりに進んでいく道中で、今までに蒐集してきた魔獣たちのコピーが襲いかかってきたが、全てを振り返りにする。

進んでいくと、何故か、扉があった。

「マスター、管制人格はこの扉の奥です」

「そう…行くわよ！」

中に入ると、確かにルインはいた。

けれど、ルインは幾重もの球形状の結晶の中に佇んでいた。

「マスター。あれは、管制人格が防衛プログラムの暴走に巻き込まれ、封印されている状態です。起こすのには、あの封印を全て解く必要があります」

「わかったわ」

封印を解析し、封印を解いていくがあと一つのところまで…

「マスター！！」

ゼロの声に反応し、咄嗟に飛び退く。

「ヤ・・メ・ロ」

そこには、ルインにそっくりな姿、けれども髪は真っ白な色をした、人物がいた。

「何かしら？」

‘倉庫’から、misfortuneとhappinessを取り出し、構える。

「マスター。彼女はおそらく、闇の書の防衛プログラムの管制人格かと」

攻撃を全て迎撃しながら、ゼロの解析を待つ。

だが、攻撃を重ねるたびに、錬度が、言語能力が上がっていく。

「マスター！ 解析終わりました。彼女は管制人格から記録を、魔法をコピーしています。さらに、彼女が最後の封印です！！」

「要するに、あいつを倒せば、ルインを助けられるわけね」

攻撃を仕掛けようとした途端、

「<黒曜の輝き、快速の槍となり、敵を討つ！ デモンズランス！>」

「な！？ <光よ、邪悪を滅ぼす槍と化せ！ ホーリーランス！>」
デモンズランスをホーリーランスで相殺するが…

「なんであいつが魔術を使えるのよ！？」

わたしの魔力は蒐集していない。

あの魔石は、自然界の魔力を集めたもので、私の魔力は一切含まれていない筈なのに。

「マスター。憶測ですが、守護騎士たちが見てきたからでないでしょうか？」

「ってことは、あいつは私が見せた魔術を使うかもしれないのね？」

無闇に魔術を使えなくなった。

その後も、なのはやフェイトたちの魔法や私が誰かの前で使った魔術が放たれる。

それらを、数少ない選択肢の中から、懸命に迎撃し、相殺していく。

「くっ！ このままじゃ、ギリ貧ね」

幸いなのが、使用されるのが、魔法や魔術だけで、私の能力や武器は使われない事だ。

だからと言ってこのままだと、決着が着かない。

「？リンク・十六夜咲夜・ロード？」

私は一か八かの勝負に出る。

「幻符「殺人ドール」」

大量のナイフを広範囲にばら撒く。
そのナイフが突如向きを変え、襲いかかる。

「ぐう」

突然の方向転換により、攻撃が通る。

防衛プログラムの管制人格のはずなのに、障壁は何故かマニュアルでしか張らないため、不意を突くことによりダメージを与えていく。

「時符「咲夜特製ストップウォッチ」」

その隙をさらにつき、札をきる。

時間停止フィールドを飛ばし、捕まえる。

「これで終わりよ！<Know your place! Know what true power is! Fragmented End!>」

自身を中心に6つの球体を展開し、レーザーを雨のように連射して攻撃する。

「ぎゃあああああああーーーーー！！」

エンドオブフラグメントが直撃し、消滅する。

消滅した途端、ルインを覆っていた、結晶が砕け散り、解放される。

「ルイン!!」

急いで、ルインの下へ駆け寄る。

「う、うゝん」

「ルイン!!」

ルインを揺する。

「ゆ・・・え・・・?」

「目が覚めた? さっそくで悪いけど、防衛プログラムが暴走しているの。止めるのを手伝って!!」

「わかりました。す・ぐ・に・・・・!!?」

「どうしたの?」

「いえ、なんでもありません」

「嘘ね」

「え?」

「何かあったんでしょ?」

「...はい。暴走を止めることはできます。ですが、このままだと、全てのプログラムを直すことが出来ません...」

「何故？」

「…防衛プログラムの一部が完全に壊れています」

「それは何処？」

「…………それは、私です」

「え？ ルインが！？」

「はい。闇の書の防衛プログラムに封印された時に無理やり接続され、一部のデータが修復不能な程、完全に破壊されました。私を夜天の魔導書に戻せば、書は再び暴走を繰り返すでしょう」

「そんな！？」

「私を破棄すれば、防衛プログラムの管制人格がないですが、夜天の魔導書を直すことができます」

「そんなことをしたら、ルインが！」

「はい。消滅するでしょう」

「他に手段はないの！？」

「それしか、夜天の魔導書を直す方法はありません。他の方法はどれも、何時かは綻びが生まれ、再び暴走し、闇の書と呼ばれるようになるでしょう」

「……わかったわ。ルイン、いえ、ルインフォース！ 私と契約し

なさい」

「な！？ 何を言っているんですか！？」

「あなたを決して消させはしない。あなたが生きるために私が道をキセキを作るわ」

「…わかりました」

「じゃあ、さつさとやるわよ。」

<閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ

繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する

告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。我に従え！ ならばこの命運、汝が剣に預けよう
ルインフォース>」

聖杯はないが、（精霊等は別だが）契約はこう行ってきたので、今回もこう行つ。

「ルインフォースの名に懸け誓いを受ける……！」

貴方を我が主として認めよう 祐依」

「これからよろしくね。さあ、暴走を止めるわよ」

「はい」

52話（後書き）

エンドオブフラグメントは

End of Fragment「欠片の終焉

と言う意味らしいので、決着をつけるために選びました。

日本語版は作者的に何か、しっくりこなかったので、英語版の詠唱にしました。

東方のスペルカードですが、イメージは東方緋想天です。

ルインを基に新たな魔導書を作ろうと思ってます。

ですが、表向きには・・・

次回、最終回になりなす。

更新は6月20日です。

お便り待ってます。

53話（前書き）

キセキの錬金術師inリリカルなのは は今回で最終回です。

53話

side other

祐依がルインと契約し、防衛プログラムの暴走を止める。

「何だ！？ 突然消えた…？」

「見て！ 防衛プログラムが…！」

コピーたちが突然消え、防衛プログラムを見ると、暴走が収まり、少しずつ塵になり、消えていく。

「ノアが無事にやったのか…？」

防衛プログラムが塵と化し、その中から、祐依が出てくる。

side 祐依

近くのビルの屋上に降り立つと、

「ノアさん！ 無事に終わったの…！」

みんなが駆け寄ってくる。

「ええ。結果を言えばね。はやて、これを」

私ははやてにデータディスクを渡す。

「これは？」

「夜天の魔導書のバグがあったデータを全て修復したデータよ。早いうちに入れなさい」

「わかったわ。えっと」

「マスター、貸してください」

「お願いするわ、リインフォース」

周りでは、喜んでいるが、

「ノア！ 防衛プログラムの管制人格がない！」

リインフォースが問ってくる。

「え！？」

「どういつこと！？」

周りが一転、別の意味で騒ぐ。

「…手遅れだったのよ。中で、闇の書の防衛プログラムの管制人格と戦闘があったのよ。なんとか勝ったけど、闇の書の防衛プログラムにプログラムの一部が完全に破壊されていたのよ。書に入れば、何時か再び、闇の書と呼ばれるくらいにバグを生み出すくらいにね」

「そんな…」

「それで、どうしたんだ？」

「彼女を消したわ」

「なんだと!!」

ヴィータが詰め寄ってくる。

「結果だけを言えばね。正確には、私が封印したわ。暴走を起こさないように。それが、彼女の願いだったのよ。主をリインフォースを守護騎士たちを守るために」

「そんな…」

「プレシアさん、最期だから言っておきます。アルハザードは先程、消滅しました」

「どういうこと!？」

「夜天の魔導書の防衛プログラムの管制人格が遙か昔に管理局の手によって、書から排除された時に、電脳空間を彷徨っていたところ、アルハザードのメインコンピュータに保護され、彼女が管理してい

ましたが、彼女が離れた今、アルハザードは消え去りました」

「どうして、ノアがそれを知っている？」

「それは、…！ もう時間もないですし、いいでしょう。私はこの世界の人間ではないんですよ。生まれや育ちは地球ですが、私の世界は魔法や魔獣などが、当たり前前に存在する世界だったんですよ。私はとある事故により、この世界に飛ばされました。飛ばされた先が、アルハザードでした。そこで、彼女に出会い、助けられました。そこで、この世界のことを色々学びました」

「だから、僕たちと全く異なった魔法や技術を使っていたのか」

「ええ。彼女に今まで、サポートをしてきてもらいました。管理局の事、プレシアさんの事、夜天の魔導書の事…」

「そうだったのか」

「ですから、アルハザードはもう存在しません」

「わかったわ。だけど、一ついいかしら？」

「何でしょう？」

「さっき、あなた、最期って言ったわよね？」

「ええ。百聞は一見にしかず。私の足を見てください」

私の足は徐々に消えつつあった。

「ええ!？」

「何で!？」

「どうして!？」

「力を使い過ぎ、尚且つ、封印まで行ったツケですよ。このまま、死ぬのか、それとも元の世界に戻るのか、それとも、また別の世界に行くのかわかりませんが、とりあえず、この世界での時間はもう殆ど残っていないんですよ」

そう言いながらも、身体が徐々に消えゆく。

「そんな!？ とうにかならへんの!？」

周りが泣きそうになっていく。

「はやて、彼女の最期の言葉『リインフォースや守護騎士たちと今までのことを忘れるぐらい最高の思い出を作ってってください』
って言っていたわ」

「!」

はやてたちの動きが止まる。

「私からもお願いね。今まで以上に幸せになりなさい」

プレシア達に、

「私がプレシアさんたちにおきたことは、キセキです。これからは、

光に、自由に生きてください」

「キセキ……」

なのはが何かを呟いている。

「！ ノアさん！！」

「何かしら？」

なのはが、突然大きな声を上げる。

「ノアさん！　もしかして、お父さんの怪我を？」

「！　思い出したの……？」

「やっぱり、ノアさんだったの？　お父さんの怪我を治してくれたのって」

「ふう、そうよ。あの時、公園でなのはが泣いているのを見て、私の知り合いを思い出してね。ほっとけなくて、やったのよ」

「でも、どうして、今まで……」

「それは、この地球に魔法がないからよ。アースラの時に言ったでしょ？　関与されたら、記憶を消すって。なのはがどうして、思い出したのかはわからないけどね」

なのはの問いに答え。
次にクロノに向かう。

「クロノ・ハラOWN執務官。無理を承知でお願いします。今回の件、全て私の行ったことにしてくれませんか？ 闇の書に目が眩み、私がやったと。そして、制御しようとし、失敗。私は死亡、と。後、これはオマケです」

クロノにデータディスクを渡す。

「これは？」

「私が今までに調べてきた管理局の裏の部分や違法団体に関するデータと今回の闇の書事件の発端のデータです」

「先ほどの頼みだが、すまないが、そこまでは出来ない。彼女たちにはある程度の罰を与えられるだろう。だが、テストロッサ家みたいに幾分かは軽くさせてみせよう」

「お願いします」

私は本当に最期に全員を見渡す。

涙を零している者。

涙を必死に堪えている者。

別れを惜しむ者。

みんなそれぞれの顔をしている。

「最期に私の本当の名前はノア・ミナツキではなく、あいざわ ゆえ相沢祐依が本当の名前です」

そう言って、笑顔を向ける。

消えゆく最期に聞こえたのは、私の名前を呼ぶ、全員の声でした。

これから、私は一体、どんなキセキを起こし、歩んでいくのだろう。
・
・
・
・
・

53話（後書き）

永い間、読んで下さり、真にありがとうございました。

ありきたりですが、これからも、相沢祐依の物語は続いています。

- 追記

ルインフォースは管制人格として『暁の魔導書』の管理をしています。

夜天の魔導書と反対に夜明けをイメージし、新たなスタートを切りました。

夜天の魔導書と同じように、魔法を記録していきます。

因みに、祐依のユニゾンデバイスでもあります。

守護騎士たちはまだ未定です。

他の物語で出てくるかもしれません。

グレアムを出すのをすっかり忘れていました・・・

最後に今まで本当にありがとうございました。

さらに追記、

次回は

・ネギま

・禁書目録

のどちらかをやろうかなと考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9803r/>

キセキの錬金術師 In リリカルなのは

2011年7月7日12時10分発行